

東方屁理屈録

kokohm

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

某所で行われていた屁理屈推理合戦という推理ゲームを東方キャラにさせようというだけの作品です。一人でも多くの人に屁理屈推理合戦に興味を持ってもらいたい、その思いを胸に頑張る所存です。

※不定期更新、及び展開上東方キャラが犯人や被害者になります。また、私の未熟や試行錯誤のために、話によって文章の書き方が異なります。基本的には新しいものの方が安定したものとなっていると思います。十二盤辺りからがいいかもしれませぬ。

加えて、第三盤から第八盤までは実際に行われたりプレイに最低限の修正を加え、物語として装飾したものになります。それらを承知の上お読みください。

目次

第一盤、出題編	1
第一盤、解答編	9
第二盤、出題編	17
第二盤、推理編、其の壹	32
第二盤、推理編、其の貳	43
第二盤、解答編	54
第三盤、出題解答編	63
第四盤、出題編	73
第四盤、解答編及び第五盤、出題編	86
第五盤、解答編	95
第六盤、出題編	104

第六盤、解答編及び第七盤、出題編	117
第七盤、出題編及び第八盤、出題解答編	128
第九盤、出題編	143
第九盤、解答編	151
第十盤、出題解答編	160
第十一盤、出題編	168
第十一盤、解答編	180
第十一盤、真相編	192
第十二盤、出題編	199
第十二盤、解答編	210
第十三盤、出題編	221

第十三盤、	解答編
第十四盤、	出題編
第十四盤、	解答編
第十五盤、	出題編
第十五盤、	解答編
第十六盤、	出題編
第十六盤、	解答編
第十七盤、	出題編
第十七盤、	解答編

316	306	297	288	280	269	259	248	234
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

第一盤、出題編

某日、幻想郷、博麗神社にて。

「二人には、探偵をしてもらいます」

八雲紫は博麗霊夢と霧雨魔理沙にそう告げた。

「さて、買い物に行つて来るわ」

「私も付き合おうぜ」

いきなりの紫の発言に霊夢と魔理沙は席を立とうとしたが、紫は必死で二人を引き止める。

「ちよつとちよつと、待つてくださいな」

「そう言われてもなあ」

「一体何よ、探偵役つて」

「そうですわね、きちんと説明してあげますわ」

パンと扇を広げ、紫は説明を始める。

「外の世界においてとある作品内にて行われていた推理ゲーム、屁理屈推理合戦と言われたそれを私達三人でやっていきたいの。私が出題者である魔女を、二人がそれを解く探偵役としてね」

「魔女？」

そう聞いた霊夢は魔理沙の顔を、魔理沙本人も自身の顔を指す。それに対し、紫は扇で口元を隠しながら笑う。

「魔理沙は関係ないわよ。魔女、私は人間には不可能な犯罪を貴方たちに示すわ。まるで魔法でも使わないと実現不可能な事件をね。それを二人には人間にも可能だと証明してもらおう、そういうゲームよ」

「それ、本当に人間にも可能なんでしょうね？」

「可能よ、理屈上はね」

「ふーん、ならいいけど」

「要はトリックを解けて感じか？ 密室とかそういう」

「そんな認識でいいわ、別に密室に限った話じゃないけど。とにかく、そのトリックを解いたら貴方たちの勝ち、諦めてしまったら私の勝ちよ」

「なるほど」

「まあルールなんかはやりながら説明しましょうか、こほん」

述べる。

「【被害者は八雲藍】である」

「うん？」

「なにそれ？」

「これは赤き真実と呼ばれるものよ、絶対の真実とも呼ばれるわね。魔女側はこの赤で嘘をつくことはできない、そういうルールよ」

「赤は真実のみ語る」と、加えて紫はそう告げる

「つまりその赤を集めて推理しろと」

「そういうこと、逆に赤以外のことは嘘の可能性があるから気をつけなさいな」

「というか被害者……」

「続けるわよ？ 【犯人は橙】である」

「アンタ、自分の式とその式になんて役を振っているのよ」

「一応了承はとったから問題ないわ」

「そういう問題？」

身内に対してそれは無いんじゃないかという目を霊夢は紫に向けているが、当の本人は何処吹く風だ。

「続けるわ、【凶器はナイフ】【死因はナイフを刺されたことによるショック死】」

「ナイフで刺されたってだけの話じゃないのか？」

それだけだろう、と魔理沙は片肘突いて手をひらひらさせながら言うが。

「【ゲーム開始時から終了時まで橙は藍から百メートル以上離れた地点にいた】
【橙はゲーム中その場を一步も動いていない】」

「んん？」

紫の赤に怪訝な表情を浮かべる、どうやらそこまで単純な話でも無いらしい。

「魔女である私はこれを『橙が式を用いて藍を殺した』と主張するわ。本来はもつともらしくお話を装飾するのだけれど、今回はとても簡単だからなしよ。事実のみを語っていく事にするわ」

「それを私達は人間にも可能だと説明すればいいのね」

「そういうことよ。あと言い忘れていたけれどあくまでここで出てくる橙たちは普通の人間だから能力の類は使えないと思って頂戴。そういったものは全部魔法として扱うわ」

「分かったわ」

幻想郷の住人が持つ能力、魔力、霊力、法力、そういったものは全部超常現象扱いとし魔法に含むということだ。つまりそういったものは使われていないという前提で推理をしていくことになる。

「それと推理を提示する際は青字でお願いね、この青字の推理に対して魔女側は赤を用いた反論を行う義務があるわ。例を挙げると『橙が他の人間を使って藍を殺させた』と推理したとして、私はそれに対し「このゲームにおいて橙と藍以外の登場人物は登場しない」と反論するわ」

「なるほどね、とりあえず推理して赤を稼ぎ最終的に真相を暴けと」

「なかなか面白そうなゲームじゃないか」

「乗り気になってくれたようで嬉しいわ」

「それじゃとりあえず、『橙がナイフを百メートル投げて殺した』」

「橙の体格は一般的な少女の体格」「一般的な少女にはナイフを百メートルも投げることは不可能」

「まあそうよね」

「じゃあ、『ナイフの長さが百メートル』だった」

「【ナイフの長さは柄も合わせて三十センチ】」しかない」

「ふむう」

「『ナイフに百メートルの棒がくくりつけてあった』」

「【ナイフ以外の道具は使われていない】わ」

「これ駄目か」

先制のジャブは外れだったようだ。そこまで簡単な問題でもないのだろう。

「そうそう、何か私に赤字で言わせたいことがあったら復唱要求と言ってからその文言を告げて頂戴。ただこれに対して魔女は従う義務は無いわ、復唱するか否かもヒントになるかもね。それと出来れば推理や復唱要求の時は指を突き立ててノリノリで言つてね」

「復唱要求、「第三者の介入は無い」」

しかし霊夢は全く乗らずに淡々と復唱要求をする。

「……乗ってくださいいな、しかもそれ先ほども言った赤で十分じゃないの。まあいいわ、【第三者の介入は無い】」

「それって人間だけか？ 例えば動物とかはどうなるんだ？」

「ああ、それもそうね。だったら、「橙、藍以外の生物はゲームに関係ない」これでどうかしら？」

「把握したぜ」

「それにしてもこれ、本当に人間にも可能なんでしょうね？」

「当然ですわ」

『『ナイフに空を飛ぶ仕掛けがあった』』

「【ナイフには何の仕掛けも無い】」

「そんなのもありなの？」

魔理沙の推理に霊夢は呆れ顔だが、そう呆れるようなものでもない。

「屁理屈推理、だからね。割と何でもアリとなっているわ。実際の解答だつて常識的に考えるとおかしいでしょつてもものばかりだし」

「そう、だつたらそういうことも視野に入れて考えましようか」

「あまりへんてこな推理に固執するのも良く無いけれどね、さて」

そう言つて、紫はどこかを見ながら告げる。

「貴方は、どう考えるかしら？」

今回出た赤の纏め

【被害者は八雲藍】【犯人は橙】

【凶器はナイフ】【死因はナイフを刺されたことによるショック死】

【ゲーム開始時から終了時まで橙は藍から百メートル以上離れた地点にいた】

【橙はゲーム中その場を一步も動いていない】

【このゲームにおいて橙と藍以外の登場人物は登場しない】

【橙の体格は一般的な少女の体格】

【一般的な少女にはナイフを百メートルも投げることは不可能】

【ナイフの長さは柄も合わせて三十センチ】【ナイフ以外の道具は使われていない】

【第三者の介入は無い】【橙、藍以外の生物はゲームに関係ない】

【ナイフには何の仕掛けも無い】

以上

第一盤、解答編

「何やってんの、アンタ?」

まるで他にも誰かがいるかのような紫の発言、気になった霊夢が突っ込んでみたが。

「お気になさらず」

紫は何処吹く風、といったようすだ。

「……まあいいわ」

あまり気にしてもしょうがない、紫が胡散臭いのはいつものことだ。そう霊夢は判断することにした。そんな霊夢と紫の問答はそっちのけで自作のメモを見ていた魔理沙が顔を上げる。

「……なあ、ゲーム開始時とか終了時とかって何だ?」

「何よ急に」

「いや、赤を纏めていたら気になって」

「まめね、アンタ」

「いや、基本だろ?」

まあ記憶力に自信がなければメモを取った方がいいのは確かだ。じっくりと複数の

赤を眺めることで新たに生まれる青もある。

「ゲーム開始時終了時というのは文字通りの意味ですわ、意外とこれがトリックの根幹を握っているときもある重要なものです。今回がそうだとはいませんが」

「ならその時に説明しなさいよ」

「忘れていましたわ」

「歳……」

悪びれもせずに堂々と言う紫に対し霊夢がボソツと呟く。

「何か言いましたか？」

「何でもないわ、とにかくゲーム開始時終了時の定義を教えなさい」

「そうね……」
「ゲーム終了時とは藍が死亡した時点を、ゲーム開始時とは藍が死亡する五分前を示す」
「こうしておきましょうか」

「何か雑ね」

「まあ、ぶつちやけると正直そこまで重要な点じゃないもの」

このゲーム終了時の定義によって生まれるトリックもあるのだが、今回は完全にスルーしてもらっていい、ということなのだろう。

「藍が刺されたのはどのタイミングなんだ？」

「ゲーム終了時になるわね、藍は即死だから」

「赤で頼む」

「【藍は即死】これでいいかしら？」

「いいぜ」

「しっかし、だからどうしたって感じね」

「だから言ったじゃない」

「アンタが最初から説明していれば問題なかったのよ」

「それに関しては一応謝罪しますわ」

そうは言うがどう見ても謝っているようではない、まあ気にしてもしょうがないかと
霊夢たちは思うことにする。

「とにかく、だ。今は謎解きの続きをしようぜ？」

「それもそうね、とは言ってもちよつと息詰まってきたかしら？」

そう言つて霊夢は魔理沙のメモを覗き込む、現状の赤を踏まえて考えるとかなりの可能性がつぶされているのが分かる。

「道具も仕掛けもなしにどうやったらナイフが百メートルも飛ぶのか、だな」

「割と困った感じね、どう考えたものか……」

ふーむ、と二人して考え込み、それを紫が楽しそうに見守っている。

「……あ、じゃあこんなのはどうか？ 『水の勢いを利用してナイフを刺した』」

「ごめんなさい、どういう意味なのかしら?」

考え込んだ後提示された魔理沙の推理、しかし説明が簡素すぎて魔女役である紫にはピンと来ていないようだ。

「いや、ホースの口を押さえた状態で水を流すと勢い良く水が噴出するよな? あんな感じで水流に乗せて飛ばすって推理なんだけど」

本人もきつちりとしたところまでは推理していないのだろう、ふわつとした説明であつたが今度はどういう考えであつたのか紫にも分かつた。

「ああ、そういう推理なのね……ううん、どう返したらいいかしらね……【橙の周囲には川、湖、海などは存在しない】これで頼むわ」

「んじゃ同じ発想で風は? 『空気の流れを利用してナイフを刺した』」

「また面倒なことを……ぶつちやけるとそんなトリックじゃないわよ。でもまあ、【気流等は関係ない】一応これで頼むわ、正直いまいちな赤だけれど関係なさ過ぎて斬りづらいのよ」

あまりにも想定外の範囲外の推理だと逆に赤で斬りづらい、魔女の意図に反した推理が出てくるのもまたこのゲームの常ではあるが。

「見当はずれってことか、ちよつとだけ自信があつただけだな。しっかしこうなるとどうすつか、何もなしに百メートルもナイフを投げるとか無理じゃないか?」

「あら、そうなる」と魔理沙は魔女に屈することになるけれどいいのかしら?」

「まあそれはそれで癪だな、もうちよつと考えてみるか……」

「そんなに難しくはないのだけれどね、視点を変えて考えてみれば一発のはずよ」

「視点、ねえ。この状況でどう変えればいいのかしら」

紫の発言に魔理沙は指をつーつと横にスライドさせる、おそらくナイフが飛ぶ様子を示しているのであろう。すると当の魔理沙ではなくそれを見ていた霊夢が何かに気付いた。

「……ああ、なるほど」

「霊夢?」

「あら、気がついたのかしら?」

「たぶんね、ちよつと回りくどく行かせて貰うわ。復唱要求、「橙と藍は百メートル以上離れた場所にいる」

これは気がついているわね、そう思いながら紫は霊夢の復唱要求にこたえる。

「【橙と藍は百メートル以上離れた場所にいる】」

「復唱要求、「橙と藍は水平方向に百メートル以上離れた場所にいる」

「へ?」

どういうことだ? という顔を浮かべる魔理沙と違い、紫は微笑みながら首を横に振

る。

「……拒否しますわ、理由は言うまでも無いわね？」

「ええ、もう分かったからいいわ」

「それじゃあ貴方の推理をどうぞ、霊夢」

「『橙は藍の百メートル以上高い場所に居た、その地点から眼下の藍に向かってナイフを落とした。ナイフはその勢いのままに落下地点に居た藍に刺さり彼女を死に追いやった』、どうかしら？」

「——はい、正解。霊夢の推理通りよ」

霊夢の青の真実を否定する赤の真実は無い、つまりは魔女の敗北だ。紫は勝者である霊夢に対してパチパチと拍手をして称える。

そしてようやく合点がいったのだろう。魔理沙は若干悔しそうな顔で軽く頷く。

「……ああ、なるほど。普通に水平方向で考えていたぜ、そういうことだったんだな」

「このゲームはそう思った思い込みが邪魔をするゲームだから、柔軟に常識を捨てて考えないと魔女に化かされるわよ？」

こうに違いない、そんなはずはない。それに囚われているとこのゲームにおいて勝つことは出来ない、絶対の真実は赤のみなのだから。

「肝に銘じておくれ、それにしても良く分かったな」

「視点を交えるって言われた時にアンタが指を横に動かしていたからね、横を交えたら縦だなんて思ったのよ」

「じゃあ私のおかげで分かったってことだな」

「調子に乗らないの。それにしても、言っておいてなんだけど刺さる、これ？」

「理屈上可能であればいい、実際の成功率はある程度投げて考える。あくまで屁理屈、そういうことよ」

現実で考えると不可能だろう、しかし出来ないとも言い切れない。屁理屈推理とはそういうものだ。

「まあ、そういうことならいいんだけど」

「それに考えてもみなさいな、普通のミステリーのトリックだつて常識的とは言いがたいわよっ…」

「……まあ、そうかもね」

と言つたところで紫は二人に問う。

「さて、二人とも初めての探偵役はどうだったかしら？」

「まあまあね、暇つぶしにはなつたわ」

「結構面白かつたぜ、当てられなかつたのが悔しいけど」

「じゃあもう一問する？ ストックはまだあるのだけれど」

「今度ね、今日はもういいわ」

「あら、そう？ 魔理沙は？」

「んー……一人でやってもしょうがないか。私もパスで」

「それならまた今度にしましょうか」

では、本日はここまで、ということ。そう言つて、紫はパンと扇を閉じた。

第二盤、出題編

「…ん？ 紫？」

「あら、魔理沙じゃありませんか」

紅魔館の大図書館、魔女のお茶会に参加していた魔理沙はそこで紫と出会った。図書館の奥から出てきたことから、どうやら魔理沙よりも先にこの大図書館を訪れていたらしい。

「珍しいな、お前が紅魔館にいるなんて」

「ちよつとここの本に用があつたのよ、もう済んだのだけれど。感謝しますわ、パチュリー」

「構わないわ、本を大事にしてくれさえすればね」

「そうね、かつてに本を持っていく誰かさんと比べたらだいぶましでしょうね」

「おいおい、そんな奴がいるのか。困ったもんだなあ、まったく」

「…鏡見なさい、鏡」

パチュリーの皮肉とアリスのジト目をまるで意に介さず魔理沙はハハハと笑う、パチュリーの疲れたような声もまるで無視だ。と、そんな自分を呆れたような目で見てく

る紫に気がついた魔理沙、何故かここであのゲームのことを思い出した。

「お、そういや紫。この間の奴をやってくれないか？ お茶菓子にも飽きてきたからさ」

「この間？ ああ、屁理屈推理合戦のことね。時間はあるし私はいいのだけれど、お二人はどうかしら？」

「屁理屈推理合戦？ 一体何かしら？」

「名前から察するに推理ゲームか何かかしら？」

「ええ、その通りよ」

そう言つて紫はこのゲームの説明をしていく、面倒なのでここはかくかくしかじかで済ませてもらおう。

「なるほど、面白そうね」

「たまにはそういうのも面白いかもしれないわね、魔法使いが魔法の幻想を打ち破るなんて皮肉めいているけれど」

紫の説明を聞いたパチュリーとアリスも屁理屈推理合戦に参加することに決める、久々に舞い込んできた新しい娯楽に二人もかなり乗り気だ。

「んじゃ決まりだ、頼むぜ紫」

「分かりましたわ、では今回はきちんとした物語を語るとしましょうか。前回のようにならぬだけの味気ないものではなく、つまらない現実を魔法の魔法で装飾した、そんな物語

を」

前口上を述べ扇を開く、そして紫は語り始める。

「では、幻想を始めましょうか」

真つ暗な部屋の中、一人の少女が呟いていた。

「憎い……、憎い……」

「あら、そんなに憎らしいの？」

ここには自分以外無いはず、そう思った彼女が顔を上げるとそこには一人の女性が居た。まるで物語の中から現れたかのような黒く古めかしい格好、魔女と言う言葉が脳裏に浮かぶ。

「誰……？」

「私？ 私は魔女、色んな世界を渡り歩く旅人の魔女。ねえ、貴方は誰が憎いの？」

「私が、憎いのは……」

彼女が呟いた名前を聞いて、魔女はにんまりと笑った。

「私が手伝ってあげましょうか？」

「え……？」

「貴方の復讐、その手伝いを」

魔女は三日月のような笑みを浮かべながら彼女に手を伸ばす。

「……」

彼女は、魔女の手をとった。

豪雨の中、一人の少女がやって来た。傘も役に立たないような雨の中走って来た彼女は館の玄関の前で雨宿りをしていた友人たちに声をかける。

「待たせちゃった？」

「遅いよ、チルノ」

「待ちくたびれたのだ」

「まったく、相変わらず時間にルーズなんだから」

「ごめんごめん」

【午前九時、チルノは館へと到着した】

【チルノが館に到着したとき、チルノ、ルーミア、リグル、ミスティアは生存している】

友人たちに謝った後チルノは辺りを見渡す、しかし彼女の親友の姿が何処にも無い。

「あれ、大ちゃんは？」

「いや、それがいないんだよ」

「あ、だからあたいに鍵を渡したのか」

「あれ、鍵持っているの？」

「うん、大ちゃんから持っておいてって」

「そうなんだ、じゃあさっそく入ろうか」

チルノが親友から受け取った鍵を使い館の戸を開ける、中に入ってみると明かりこそついてるもののその光は若干弱く、外の天気も相まって館の内部は薄暗い。

「何というか、雰囲気があるね」

「そうだね」

「ねえ、せつかくだから分かれて探索してみない？」

「ええー、大ちゃんに黙ってそんなことしていいの？」

「大丈夫だって」

「まあいいんじゃない？ 余計なことをしなければ大丈夫だよ」

「うーん、そうかな…？」

「じゃあ、えつと…、十時半に一旦集合でいい？」

「そうしようか、場所はここで」

「じゃあ解散」

そうして彼女達は別れて屋敷の中を見て回ることにしたのであった。

「あれ、チルノも来たんだ」

「うん、何かあった？」

「いや、面白いものは何も」

【午前九時二十分から午前九時三十分までの間、チルノとリグルは行動を共にしていた】

「あ、ルーミア」

「リグル、そっちは何かあった？」

「うーん、あんまりかな」

「そう、こつちも同じなのだ」

【午前九時五十分から午前十時までの間、リグルとルーミアは行動を共にしていた】

「うーん？」

「チルノ？ どうしたのだ？」

「ああ、ルーミア。いや、この絵って何の絵なのかなって思ってた」

「絵? ……うーん? 何だろう?」

「何だろう?」

【午前十時十分から午前十時三十分までの間、ルーミアとチルノは行動を共にしていた】

「あ、私が最後?」

「ううん、ミスティアがまだだよ」

「え? おかしいな、彼女が一番時間に厳しいのに」

「だよねえ」

【午前十時三十分の時点で、チルノ、ルーミア、リグルは行動を共にしていた】

「キヤー!!?」

玄関の近くで集まっていた三人の耳に悲鳴が飛び込んでくる、しかもそれは彼女達も良く知る声だった。

「!?!」

「何?!」

「ミスティアの声だ!」

悲鳴の聞こえた方へと三人は走る、そして。

「ちよ、ちよっと待って！」

「なに?!」

「この張り紙！」

「…鳥の姫はここに眠る？」

「…もしかして!?!」

嫌な予感と共に張り紙の貼ってある扉を開ける、するとそこにあつたのは。

「…え？」

「ミ、ミステイア？」

「そ、そんな…嘘だ…」

胸に刃を生やし、その服を血で染めたミステイアが、恐怖に引きつった顔を浮かべて死んでいた。

【ミステイアは死亡している】

ミステイアの遺体をその場に残し食堂に移った三人、当然だがその顔は暗い。

「…ねえ、ミステイアのことだけど」

「…何？」

「誰がやったんだと思う?」

「分からない、ここには私達以外誰もいないはずだけれど」

「誰かが私達に見つからないように潜んでいるだろうね、たぶん」

「探してみない？」

「え？」

「ミステイアの仇、とらないわけには行かないでしょ」

「…そうだね、探してみようか」

「皆で探す？」

「…いや、分かれて探そう。何かあったら大声で叫ぶんだ」

「分かった、必ず見つけ出そう」

そうして分かれて探し始めてしばし、チルノとルーミアが合流した。

「ルーミア、どうだった？」

「ううん、特に誰も」

「そっか…、リグルは見なかった？」

「え？ 見てないけど、どうしたの？」

「うん、考えたんだけどやっぱり皆で固まって探した方がいいと思うんだ。だから探していたんだけど見つからなくて、先にルーミアを見つけたんだ」

「…リグルを探そう、嫌な予感がする」

「うん、急ごう」

二人で館を探して回る、しかしリグルの姿は何処にも見えない。

「リグルー、どこー!!」

「リグルー! ……本当に何処にいるんだろう?」

「こんなに声をかけているのに出てこないなんて、一体……」

見つからないことに焦りつつも館の中を歩き回る、その最中。

「……これって」

「蛍の姫はここに眠る?」

「……駄目だ、開かない!!」

「ぶち破ろう、せーっの!!」

開かない扉を開けるために二人は勢いをつけ体当たりをする、その勢いに負け外れた扉と共に二人は部屋に飛び込む。

「リグル!!」

そこで二人が見たものは、胸に刃物をつきたてられそこから血を噴出しながら倒れているリグルであった。

「リグルは死亡している」

「え? リグ、ル?」

「何で、リグルが…」

リグルの遺体をその場に残し、二人は再び食堂に戻ってきた。

「やっぱり、リグルを殺したのもミスティアを殺した誰かののかな?」

「分からない…、でもそれ以外無い、はず」

【午前十一時から午前十一時三十分までの間、チルノとルーミアは行動を共にしていた】

【リグルが死亡したのは午前十一時から午前十一時三十分までの間】

段々と二人の口数も減っていく、最終的に二人は無言のままじっと椅子に座っている。そんな中、ルーミアが突然立ち上がる。

「ひっ!?!」

「ど、どうしたの、ルーミア?」

「いや、来ないで!! あっちに行つて!!」

何かが見えているかのように彼女は恐怖の表情を浮かべる、しかしチルノがその視線の先を見ても何か恐怖の対象となるようなものは見受けられない。そして、彼女は耐え切れなくなったかのように突然走り出した。

「ルーミア!?!」

「いやあああああ?!?!」

叫びながら走るルーミアをチルノは追う、しかし彼女の足は早くなかなか追いつけな

い。やっと追いついた、その時には。

「ルーミア……？ 何で……？」

彼女は地に伏し、ピクリとも動いていなかった。

【ルーミアは死亡している】

「チルノちゃん……」

「え？」

動揺しているチルノの耳に親友の声が聞こえる、だがその姿は何処にも見えない。

「チルノちゃん……」

「大ちゃん……？ 何処にいるの？」

「ここだよ……、チルノちゃん……」

気がつくとその彼女の姿がそこにはあった、先ほどまで誰もいなかったはずのそこに。

「大ちゃん、何時の間に……？」

「迎えに来たの……、さあ一緒に行きましょう……？」

「っ！」

こちらに向かって手を伸ばしてくる親友の姿に何かを感じ取ったのか、チルノはその場から逃げるように走り去る。そうして適当に走った彼女は一つの部屋に飛び込んだ。

「はあ…、はあ…。…あれ？　ここって…」

「チルノちゃん…」

「!?　大ちゃん…!」

「さあ…、一緒に行きましょう…」

後日、その館を訪れた者たちがいた。彼らはミスティア、リグル、ルーミアの死体を確認し、チルノが何処にいるのかを捜した。その結果、大妖精の部屋にて、鍵のかかったその部屋で彼女が首を吊っているのを発見した。

【チルノは死亡している】

【大妖精の部屋は施錠されている】

【大妖精の部屋の施錠、解錠は大妖精の部屋の鍵を使うことでのみ可能】

【大妖精の部屋の鍵は大妖精の部屋の中にあつた】

「良かったわね、復讐が果たせて」

「…」

「私もそろそろ行くわ、それじゃあね」

「…」

「…と、今回はこんなお話ですわ」

「何か荒いわね、お話が」

「少々雑なのは認めますわ、まあ、結局大事なのは赤字だけですから問題ないでしょう？」

「まあな、…さーて」

紅茶を一口飲んだ後、魔理沙はニヤリと笑う。

「探偵役を、始めようか」

今回出た赤のまとめ。

【午前九時、チルノは館へと到着した】

【チルノが館に到着したとき、チルノ、ルーミア、リグル、ミステイアは生存している】

【午前九時二十分から午前九時三十分までの間、チルノとリグルは行動を共にしていた】

【午前九時五十分から午前十時までの間、リグルとルーミアは行動を共にしていた】

【午前十時十分から午前十時三十分までの間、ルーミアとチルノは行動を共にしていた】

【午前十時三十分の時点で、チルノ、ルーミア、リグルは行動を共にしていた】

【ミスティアは死亡している】【リグルは死亡している】

【午前十一時から午前十一時三十分までの間、チルノとルーミアは行動を共にしていた】

【リグルが死亡したのは午前十一時から午前十一時三十分までの間】

【ルーミアは死亡している】【チルノは死亡している】

【大妖精の部屋は施錠されている】

【大妖精の部屋の施錠、解錠は大妖精の部屋の鍵を使うことでのみ可能】

【大妖精の部屋の鍵は大妖精の部屋の中にあった】

以上。

第二盤、推理編、其の壱

「と、格好つけたところ悪いのだけど、ルール説明をしてもいいかしら？」

ガクツ、と魔理沙がずっこける。

「おいおい、このタイミングかよ」

「ルール説明つて、さっきやっていなかった？」

「いえ、あれは前回霊夢と魔理沙した説明まで。赤と青についての基本ルールをきちんとしておかないとこれから先面倒だから」

「今更基本ルールつて、また忘れていたのか」

「それもありませんけど、前回はお試しのようなものでしたから細かいところは省いたのよ。あまりきちんと説明しすぎると霊夢が投げそうだったし」

「ああ、それはまあ納得できるな」

確かに、魔理沙はともかく霊夢は面倒くさがって参加しなかったかもしれない。一度参加したので以降は面倒くさがることには無いだろうが。

「それで？ その基本ルールとやらは何なの？」

「ええ、それは」

と、紫が基本ルールについて魔理沙たちに説明していった。以下、紫が説明した基本ルールを纏めたものである。

1. 〔で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
 2. 『で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。
なお、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
 3. 魔女は提示された青字に対して赤字を使って反論する義務を持つ。
青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、人間側の勝利となる。
なお、赤字での反論が有効かどうか、人間はよく検証する必要がある。
 4. 人間側は、〔で囲われた文章を赤字で復唱することを魔女側に要求できる。
ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。
- 「とりあえずの基本ルールをこう纏めておきますわ、以降何か不都合があれば訂正することとします」
- ルール説明が終わった後、アリスが軽く手を上げる。
- 「ちよつと質問、2の青は魔法を否定する内容でなければならぬというのは具体的にどういうこと？」
- 「一つは魔法や超常現象ありきの推理は駄目ということ。例えば『怨霊が四人を殺した』

というのは不可ですわね。もう一つ、青はトリックを説明していないといけない、ということ。『AがBを殺した』とだけ青で言われてもそれは魔法を否定していないから不可、『Aがくくというトリックを用いてBを殺した』といった風に宣言して頂戴」

その説明にアリスが納得したところで次はパチュリーが手を上げる。

「私も一ついいかしら、3の赤字の検証とは何かしら?」

「そうですね、こちらはこちらよつと説明が面倒なのだけけれど…。要はその赤が本当に青を切れているのか確認なさいな、ということよ。かなり適当な例になるけれど、Bが刺殺されたという謎において、AがBを殺したと青で言われたとする。それに対し魔女は、Aはナイフを所持していないと赤で宣言したとする?」

「…なるほど、確かにその赤は青を斬っていないわね。別にナイフが無いと刺殺できないいわけじゃないもの」

「そういうことですわ、他に質問は?」

パチュリーへの説明も終えたところで紫は三人の顔を見る、…どうやら現時点で質問は無いらしい。

「無いのなら、改めて始めましょうか」

「つてもな、調子が狂っちゃったよ。どうすつか」

「とりあえず私達は何を説明すればいいの?」

「犯人とトリック、その程度かしら。動機やらは気にしないでもいいわよ」
「分かったわ」

基本的にこのゲームではハウダニットとフーダニットが重要視されることが多い、ワイダニットを当てさせるゲームはそう多くない。まあ魔女は星の数ほどいるので中にはワイダニットを重要視している魔女もいるだろうが、少なくとも紫がそれを問題にすることは基本的でない。

「とりあえず、頭から順々に考えていく?」

「一先ずそれでいいか、最初はミスティアだな」

「午前十時三十分悲鳴が聞こえて向かうとミスティアは死んでいた、しかし悲鳴が聞こえた時点で他の三人は行動を共にしていた、だったわよね?」

「普通に考えると三人以外の誰かが殺したってことになるわね、話の描写的に大妖精かしら」

「そう考えると謎でも何でもないのだけれど、そこのところどうなの?」

「さあ? 何とも言えませんわ」

アリスの質問に紫は肩をすくめて答える、まあ当然といえば当然の反応だ。

「…まあとりあえず先に進むか、次はリグルだな」

「部屋の一室で死んでいるのをチルノとルーミアが発見したのよね」

「そしてリグルが死亡した時刻である午前十一時から午前十一時三十分までの間、チルノとルーミアは行動を共にしていた」

「となるとやつぱりチルノとルーミア以外の誰かの仕業になるな」

「そうですわね」

「…で、次はルーミアか」

素知らぬ顔で相槌を打ってくる紫を無視して魔理沙は話を進める。

「これもチルノがルーミアに追いつかれるまでの間に誰かに殺されたかもしれないわね、どうして錯乱したのが気になるけれど」

「どうしてでしょうね」

「最後はチルノか、これだけ密室なんだよな」

もう紫の相槌など気にも留めていない。

「別にチルノ以外誰もいなかったとも言われていないのだから一緒に部屋の中にいたんじゃないの？ 鍵は中からなら普通に閉められるでしょう」

「まあ成り立ちはするわね」

「まとめると、『チルノたち以外の犯人Xがそれぞれを殺してまわった、最後の密室は部屋の中に居続けているだけ』ってことになるのか」

「こうなるとそちらには赤での反論の義務が生じるのよね？」

「ええ、ですからこう返させて貰いますわ。【登場人物はミステイア、リグル、ルーミア、チルノの四人のみ】【それ以外の生物の干渉は無い】」

こうなると、四人以外の犯人Xの存在が完全に否定されたことになる。

「…そうなると四人の中に犯人がいることになるのか」

「復唱要求、「死亡した順番は、ミステイア、リグル、ルーミア、チルノ、の順番である」

「死亡した順番は、ミステイア、リグル、ルーミア、チルノ、の順番である」これぐらいは認めてあげますわ」

「そうなると必然的にミステイアは白ね、そしてチルノが黒濃厚になるわね」

「どうかしら、死んだ後も大丈夫な仕掛けをしていたのかもしれないわよ？」

「そんなもん考えていたら話が進まないぜ、とりあえずはチルノ犯人説で推理していいいだろうさ」

「そうね、だから確かめさせてもらうわ。復唱要求、「犯人は一人である」

「【犯人は一人である】付け加えると、【共犯者は存在しない】」

「ついでにもう一つ復唱要求よ、「共に行動していた、という記述は、片時も離れなかった、ということと同義であり、この時間中は直接的な殺害は不可能だった」

「…前半だけ応えましょう、「共に行動していた、という記述は、片時も離れなかったということと同義である」後半は拒否、理由は秘密よ」

眉をひそめながらそう応えた紫に対し、パチュリーは興味深そうな表情を浮かべる。
「へえ、後半は拒否するのね」

「下手に要求に応えていると変なロジックエラーを起こしかねないもの、慎重にもなりますわ」

ロジックエラー、魔女が絶対に生じさせてはいけない禁忌。物語の表裏があわなくなり、決定的な矛盾が生じてしまうこと。例えばAがBを殺した、と赤で宣言したにもかかわらずAは誰も殺していないと赤で宣言してしまうとそれは矛盾している。これは極端な例だがこのように物語が成立しなくなるのがロジックエラーであり、これが生じてしまうとゲーム版は即破綻、魔女の反則負けとなってしまう。だから魔女は何が何でもこれが起きないように物語を紡がないといけない。

「ただこうは言っておきましょう、「同行者の目を盗んで殺人を行うことはできない」「うん？ パチュリーのそれとどう違うんだ？」

「私からすればかなり違うわ、正直かなり微妙な赤なのだけれど」
「微妙、ね。つまりその赤は出したくなかったと」

「そうね、正直に言うときさっきの復唱要求はかなりきついわ。今の赤だつて下手をすればロジックエラーものよ」

「えらくペラペラと内心を話すんだな」

「私は気前がいいのよ、それにそれが分かってても推理に上手くつなぐとは限らないでしようっ。」

「まあそうだな、結局同行者がいる状況で殺人は無理ってことか」

「そうなるミスティアはまだともかくリグル死亡時の謎が解けないわね」

「うーん、どうしたものかな」

「…」

そのように魔理沙とアリスが話している中、パチュリーは黙ったまま何かを考え込んでいる。

「どうしたの、パチュリー？」

「ちよつとね、もう少し考えが纏ってから言うわ」

「そうっ？」

「んじや改めてミスティアの奴から解いていくか。復唱要求、「午前十時三十分、リグル、ルーミア、チルノは確かにミスティアの悲鳴を聞いた」」

「そうね、「午前十時三十分、リグル、ルーミア、チルノは確かにミスティアの悲鳴を聞いた」」

「やっぱり悲鳴を上げたタイミングで三人ともそろっているのか。復唱要求、「悲鳴を聞いてからミスティアの遺体を発見するまで三人は行動を共にしていた」」

「悲鳴を聞いてからミスティアの遺体を発見するまで三人は行動を共にしていた」
「ううん、どうしたもんか」

「次は私よ。復唱要求、「ミスティアの死亡時刻は午前十時三十分である」

「…拒否よ、理由は無いわ」

「あれ、悲鳴を上げたときに死んだんじゃないのか？」

「やっぱり違うのね。じゃあこう推理するわ、『悲鳴は録音されたものであり、午前十時三十分の時点でミスティアは既に死亡していた』」

アリスの青き真実を聞いた紫は一瞬悩むそぶりを見せた後、軽くため息をついた。

「…なるほど、さすがですわね」

「お？ ということは」

「ええ、アリスの言う通りよ。【悲鳴は事前に録音されたものである】【犯人はそれをタイマーで流した】それを認めましょう」

「そうなるともうミスティアの死に疑問は無いな、『犯人は一人で行動している間にミスティアを殺し、録音を流すことで死亡時刻を誤魔化した』これでチェックだ」

アリスの推理から最終的な青き真実を述べ、うんうんと頷く魔理沙であったが。

「ミスティアが死亡したのは午前九時二十分から午前九時三十分の間」

「…んん？」

淡々と赤き真実を告げる紫とその内容に怪訝な顔をする。

「【ミステリアの悲鳴を再生する機械の操作がなされたのは午前九時五十分から午前十時の間】」

「…え？」

「もう一度言っておきましょう、【犯人は一人である】【共犯者は存在しない】【共に行動していた、という記述は、片時も離れなかったということと同義である】【同行者の目を盗んで殺人を行うことはできない】」

「…つまり、チルノとリグルにミステリアは殺せない。リグルとルーミアに悲鳴の準備は出来ない。共犯者がいない以上両方とも可能な者で無いと犯人足り得ない」

「おいおい、嘘だろ？」

「【赤は真実のみ語る】ですわ」

驚いた表情を浮かべる三人に対し紫は微笑み、お茶を一口飲んだ。

「さあ、この赤をどう返すかしら？」

今回追加された赤字まとめ。

【登場人物はミステリア、リグル、ルーミア、チルノの四人のみ】

【それ以外の生物の干渉は無い】

【死亡した順番は、ミステイア、リグル、ルーミア、チルノ、の順番である】

【犯人は一人である】【共犯者は存在しない】

【共に行動していた、という記述は、片時も離れなかったということと同義である】

【同行者の目を盗んで殺人を行うことはできない】

【午前十時三十分、リグル、ルーミア、チルノは確かにミステイアの悲鳴を聞いた】

【悲鳴を聞いてからミステイアの遺体を発見するまで三人は行動を共にしていた】

【悲鳴は事前に録音されたものである】【犯人はそれをタイマーで流した】

【ミステイアが死亡したのは午前九時二十分から午前九時三十分の間】

【ミステイアの悲鳴を再生する機械の操作がなされたのは午前九時五十分から午前十時

の間】

以上。

第二盤、推理編、其の弐

「どうしたもんか……」

頭をかきながら魔理沙がそう言う、てつきりこれで終わるものだと思っていたのに見事に覆されてしまった。

「一気に推理が崩れたわね、どちらの条件もクリアできる人が居ないなんて」

『「知らず知らずのうちに機械を操作していた」ってことはないの?」

「【機械の操作は意図的に行われた】「操作を行ったのは犯人自身」、知らないうちに片棒を担いでいたってことは無いわ」「これも駄目、か。こうなると同じ人間が二人でも居ないと無理じゃないかしら?」

「もしくは時間を巻き戻してでもしているのか、どっちにしろ無いわね」

「それだ!!」

どうしたものか、ため息をつくパチュリーとアリスの会話を聞いていた魔理沙がパチンと指を鳴らす。

「え? どれよ?」

「時間だよ、時間!」

「何を思いついたの?」

アリスの問いかけに魔理沙はニヤリと笑みを見せる。

「今から教えてやるよ。復唱要求、「ミステリアの死体が発見されたのは死亡後二時間以内のことである!」

「……ふふつ、復唱は拒否するわ」

「よっしや!」

紫の返答にガッツポーズをとる魔理沙、それを見ていたパチュリーも納得の表情を浮かべる。

「……なるほどね。なら復唱要求、「一連の犯行が行われたのは二十四時間以内のことである」

「それも拒否するわ、どうやら貴方も気付いたようね?」

「ええ、でもここは魔理沙に譲るとするわ」

見せ場を譲ってくれるパチュリーに頷き、魔理沙は自信たっぷりな指を突きつける。

「それじゃいくぜ、これが私の青き真実だ!『ミステリアは他の三人が館を訪れるより前に死亡していた! 悲鳴の録音や機械の操作はその時に行われたものである! これにより三人のアリバイはミステリアの死亡に一切関係ない!』」

「あら？」「チルノが館に到着したとき、チルノ、ルーミア、リグル、ミステリアは生存している」のよ？」

「それはこう返すぞ、『チルノが館に到着したときというのはリグル、ルーミアが訪れた時より前のことである！』実はチルノは二回館を訪れていて、その赤は一回目のものを指しているんだらう？」

「……お見事、正解よ」

「よしー」

紫のリザインに魔理沙は全身で喜びを表現する、ようやく探偵として魔女の謎を打ち破れた喜びはひとしおだ。

「赤字で宣言した時間が違う日の事を指していたってこと？」

「そうよ、具体的に言うと【午前九時、チルノは館へと到着した】【チルノが館に到着したとき、チルノ、ルーミア、リグル、ミステリアは生存している】【ミステリアが死亡したのは午前九時二十分から午前九時三十分の間】【ミステリアの悲鳴を再生する機械の操作がなされたのは午前九時五十分から午前十時の間】これらは事件前日の赤よ、面倒だから新しく赤は出さないけれど本当のことだと信じていいわ」

「まあ確かに同じ日の、とは言っていないけれど、いいの？」

「正直微妙なところね、個人的にはぎりぎり問題ないと判断したのだけれど人によって

はアウトかもしれないわ」

「そう思うのなら出さなければいいのに」

「最初はそうしようと思ったのよ？ でも何となく癪に障ったのよねえ」

それらアリスの質問に微笑みながら返す紫、悪あがきと言うかなんとか、何となく素直に負けを認めるのが気に入らなかつたらしい。大人げの無い妖怪の賢者である・

「素直に負けろよ……」

「まあまあ、解けたんだからいいじゃない。ミステリアの謎はこれだけでいいのね？」

「ええ、ミステリアの謎についてはリザインするわ。残りは三つよ」

「ならばリグルの謎についてリザインしてもらおうわよ」

魔理沙に代わり今度はパチュリーが前に出る、先ほどから考えていたことに決着がついたようだ。

「あら、考えは纏ったのかしら？」

「一応ね、でもまずは下準備をしないとイケないわ。復唱要求、「リグルは刺殺された」

【リグルは刺殺された】ナイフか何かをグサリしたのだと思ってくれればいいわ」

「つつてもなあ、二人一緒に行動しているんじゃないかその暇が無い」

「こつちの赤は同日のことなのよね？」

「ええ、それは確かよ。あえてもう一度言うなら【リグル死亡時、チルノとルーミアは行

動を共にしていた」

「じゃあやつぱり無理じゃないか？」

どちらが犯人にしろ殺しに行くことが出来ない、これではどうしようもないように魔理沙には思えるのだが、パチュリーの推理は揺らいでいないようだ。

「そうね、でも手はあるわ。復唱要求、『チルノとルーミアはリグルのいる部屋の扉を壊して入った』」

「チルノとルーミアはリグルのいる部屋の扉を壊して入った」

「それは扉に体当たりしたイメージでいいのよね？」

「ええ、そのイメージでいいわ」

「じゃあ多分大丈夫ね。復唱要求、「犯人はリグルを“直接”刺し殺した」」

「直接？」

「……拒否よ、そう聞くのなら分かっているようね」

「？」

「どうどういこと？」

どうやらこれもリザインせざるを得ないらしい、そう観念する紫と対照的に魔理沙とアリスの頭の上には疑問符が浮かんでいる。

「こういうことよ、『扉の裏かりグルの胸部にナイフが固定されており、扉を壊した時に

それが刺さった』違うかしら?」

「……おめでとう、リグルの謎のリザインを宣言するわ」

「またもや拍手をする紫、この謎に関しては余計な悪あがきをしないらしい。」

「うん? どういうことだ?」

「ドミノ倒しをイメージしなさい、あの要領よ」

「……………ああ、扉ごと倒れこんだのね。私は鍵だけ壊したイメージだったから扉が倒れこんでいるなんて考えてもいかなかったわ」

「あ、なるほど。それでようやく分かったぜ、そういうことだったのか。つまり、リグルは発見されるのと同時に死んだわけだな」

「そういうことよ」

「扉を破ったと同時にリグルは死亡した、これなら死亡時刻に二人が行動を共にしているよ」と関係ないということだ。

「だから同行時に直接的な殺害は不可能と言わなかったね、その殺し方ならあの復唱要求は言えないと」

「あれはだいたい困ったわね、その後の赤も同行者の目を盗んで殺したわけじゃないから大丈夫だとは判断したのだけれど、まあ割とぎりぎりですわね」

「そう、そこについても聞きたいのだけれど。この場合同行者は共犯扱いにはならない

の？ 一応リグルを殺したといえれば殺しているのだけれど」

確かに、二人で扉を破ったのなら二人でリグルを殺したことになりそうなものなのだが。

「ご心配なく、【扉を破ったのはチルノである】のだから」

その紫の赤に三人が怪訝な顔をする、確かに一人で破ったのなら共犯者は生まれないだろうが、その赤では犯人を言っているようなものだ。

「え？ ここでそれを認めるといふことは」

「ええ、そういうことよ。いい加減分かっているでしょうから背中を押してあげるわ、

【犯人はチルノである】」

「……ちよつとびっくりしたわ、まさか自分から認めるなんて」

「さあ、その前提で残り二つの謎を解いてくださいな」

どういう意図なのか知らないが紫は探偵たちに重要な赤を渡した、これは先ほどの詫びのつもりなのかそれともただ単に飽きただけなのか。どちらにしろこれは大きなヒントだろう。

「じゃあルーミアの謎を解くか、というか死因は何だ？」

「さあ？ それも当ててくださいいな」

「まあそれもそうか。復唱要求、「ルーミアは刺殺された」」

「ルーミアの身体に外傷は無い」

「ふむ、撲殺やらも纏めて否定されたわね。復唱要求、「ルーミアは他殺」

「ルーミアは他殺」

「なら病気や寿命の線もないと考えていいわね」

「後何があるかな？」

「復唱要求、「ルーミアは毒殺された」

「ルーミアは毒殺された」これで死因は特定されましたわね」

「毒殺だったか、なら『チルノはルーミアに無理やり毒を飲ませた』

「ゲーム開始時からゲーム終了時までチルノはルーミアに一切触れていない」

「押さえつけて飲ませたとかは無いのか、じゃあ『チルノはルーミアに毒の入った飲み物を渡して飲ませた』

「【毒は摂取後十分以内に死亡する】【死亡二時間前からルーミアは一切飲食物を口にしていない】【飲食物とは日常生活において食事として摂取するものを指す】だから毒は飲食物には含まないと思つて頂戴」

つまりパンやお茶やらは食べていないということ、こうなると何かに毒を混ぜてそれを食べさせるとするのは実質不可能なように思える。

「そつとなると……」

「毒単体を摂取させないといけないのか……あれ？　普通に飲ませればいいだけじゃないのか？」

「ゲーム中に使用された毒は液体であり極少量」ペットボトルのキャップ一杯以下つて所かしらね、友人が二人死んだ状況でその程度の量の飲み物を渡して飲んでくれるかしら？」

「まあ私なら飲まないけど、ルーミアがそうだって言い切れないんじゃないか？」

赤で言われぬ限り何でもあり、そう思つての問いかけであつたのだが。

「じゃあ」友人の死によりルーミアは非常に神経質になつていた「その状況で他者から受け取つたものを口にするとは無い」

「マジか」

どうやらルーミアはそう単純ではないらしい。

「カプセルか何かを飲ませておいたというの？」

「カプセル等は使用されていない」ならびに「ルーミアは毒を摂取して十分以内に死亡している」

「これも駄目？　どういふこと？」

うーんと三人は考え込む、その隙に紫はつかの間の休憩としてお茶を一口味わうのであつた。

今回追加された赤字まとめ。

【機械の操作は意図的に行われた】【操作を行ったのは犯人自身】

【リグルは刺殺された】

【リグル死亡時、チルノとルーミアは行動を共にしていた】

【チルノとルーミアはリグルのいる部屋の扉を壊して入った】

【扉を破ったのはチルノである】【犯人はチルノである】

【ルーミアの身体に外傷は無い】【ルーミアは他殺】【ルーミアは毒殺された】

【ゲーム開始時からゲーム終了時までチルノはルーミアに一切触れていない】

【毒は摂取後十分以内に死亡する】

【死亡一時間前からルーミアは一切飲食物を口にしていない】

【飲食物とは日常生活において食事として摂取するものを指す】

【ゲーム中に使用された毒は液体であり極少量】

【友人の死によりルーミアは非常に神経質になっていた】

【その状況で他者から受け取ったものを口にすることは無い】

【カプセル等は使用されていない】

【ルーミアは毒を摂取して十分以内に死亡している】
以上。

第二盤、解答編

数分後、紫の出番はまだ来ていなかった。

「うーん…」

「どうしたものかしらね…」

魔理沙とアリス、どちらもピンと来るものが無いらしく虚空を見つめながら何か無いかと考えている。

「…紫、ルーミアは毒を摂取したのよね?」

パチュリーもまた二人と同じく悩んでいたが、何か思いついたのか紫に声をかけた。

「え? ええ、そのつもりだけだ」

「摂取とは口にしたって意味でいいのよね?」

「…ああ、なるほど。じゃあ赤を使っておきましようか、[ルーミアは毒を経口摂取した]」

パチュリーの発言から彼女の言わんとすることが分かった紫はそれに関する赤を提示する、それを聞いたパチュリーはやはりと言った表情で再び思案顔になる。

「? どういう意図だったんだ?」

「え？ ああ、注射器なり毒ガスなりの可能性も考えたのよ、それなら赤に引つかからな
いように思えるから」

毒は飲むものとは限らない、というか飲ませる方法が思いつかないので他の方法を考
えてはみたが少々違ったようだ。

「ああ、そういうことか。あ、でも外傷は無いんだから注射器は無理じゃないか？」

「逆に毒ガスはまだ通りそうな気がするのだけれど、口から吸い込めば経口摂取に入ら
ないかしら？」

「【注射器の類は使われていない】【毒ガスは使われていない】そういう手口では無いわ
ね」

「やっぱりね」

ああでもない、こうでもない、と話し合う三人。そんな中口元に手をやり爪を噛んで
いる魔理沙に気付いたパチュリーがそれを注意する。

「魔理沙、爪を噛むのは行儀が悪いわよ」

「ん？ ああ、悪い。どうにも思いつかなくてイライラしてな」

「気をつけなさい、そういったものは癖になると治らなくなるんだから」

「分かつちやいるんだけどな、どうにも」

「…それよ」

「え？」

ボソリと呟いた後、パチンと指を鳴らすアリス。その表情には自信が浮かんでおり、何か良い推理を思いついたことが分かる。

「何か思いついたの？」

「ええ、魔理沙のおかげで一つ思いついたわ。紫、ルーミアは何か癖を持っているんじゃないかしら？ 具体的に言うとか爪を噛む癖とか」

アリスの指摘に紫は一度大きく頷いた。

「お見事、ルーミアは爪を噛む癖を持っていた」緊張などで心に余裕がなくなるとつい噛んでしまうようね」

「なら私の青き真実はこうよ、『ルーミアの爪には毒が塗られていた、おそらくチルノが毒入りのマニキュアでも渡していたのでしよう。友人の死に動揺していたルーミアは思わず爪を噛んでしまい、その結果毒を摂取してしまった』どうかしら？」

「…おめでとう、ルーミアの謎についてリザインを宣言するわ」

「おー、やったな、アリス」

「なるほどね、爪は食べるものじゃないから赤には引つかからないと」

「そういうことよ、食事を取っていないと言ったけれど何も口にしていないとは言っていないわ」

つまり、緊張から爪を噛んでしまったルーミアは爪に塗られた毒を口にしてしまい、その結果毒で死亡したのである。

「でも爪にマニキュアをつけている状態で爪を噛むのか？」

「それだけ追い詰められていたと言うことよ、さすがに友人が二人も死んだら冷静さなんて欠けるでしょう」

「…ま、そうかもな」

紫の説明に魔理沙は納得して引き下がる、まあ理解の範囲内ではある。

「納得してくれたかしら？　なら最後の謎と洒落込みましょう」

「チルノの謎か、密室だったな」

「結構簡単だからすぐに解けると思うわ、まあ多少は足掻くつもりだけど」

「そもそもどの程度の密室なの？　確か鍵が部屋の中にあるというのは聞いたけれど」

「そうね、もう一度言っておこうかしら。【大妖精の部屋は施錠されている】【大妖精の部屋の施錠、解錠は大妖精の部屋の鍵を使うことでのみ可能】【大妖精の部屋の鍵は大妖精の部屋の中にあつた】」

「今更だけどチルノはそこで死んでいるということではないのよね？」

「ええ、【チルノは大妖精の部屋で死亡した】」

「大妖精の部屋には窓の類はあるのか？」

「大妖精の部屋の出入りには扉のみ使用可能」【ゲーム終了時扉は施錠されていた】

「と言うか犯人はチルノなんだろう？ だったら普通にチルノが中から鍵を閉めて自殺しただけじゃないのか？」

「そうね、【チルノは自殺した】でも、【扉の施錠、解錠には大妖精の部屋の鍵が必要】なのよ」

「え、あれはないのか、あれ」

そう言いながら魔理沙は何かをつまんで捻る動作をしている、おそらく内鍵のことを言っているであろう。

「ドアノブについているつまみのことね、確かサムサターンだったかしら、あれはついていないとするわ。勿論かんぬきみたいな内鍵の類もついていないわ」

「外から鍵を回す以外に施錠する方法が無いということ？」

「そうね、もう一度言っておくと【大妖精の部屋の鍵を使わずに扉の施錠、解錠することは不可能】」

「マスターキーの類は？」

「【マスターキー、スペアキーの類は存在しない】【大妖精の部屋の施錠、解錠を行えるのは大妖精の部屋の鍵一本のみ】」

「その唯一の一本が中にあるんじゃないでしょうもないじゃない」

「あら、二人とも気がついてないの？」

悩んでいる二人にパチュリーは意外そうな声をあげる。

「え？」

「簡単な話じゃない、こんなもの。『部屋の内側からでも鍵を使うことで部屋の施錠を解錠する』というだけよ。要はドアノブの両方に鍵穴があるってこと」

「正解、もう少し悩んでくれると思ったのだけれどね」

「ここにもいくつかあるもの、赤を聞いていてすぐに分かったわ」

一般生活においてあまり見ることは無いだろうがドアノブの両側に鍵穴があるタイプのものもあるそうだが、今でも重要な場所の鍵にはその手のものが使われているものがあるとのこと。

「…あー、そういうことか。全然思いつかなかったなあ」

「そういえば本なんかでも鍵穴から中の様子を見るシーンなんかがあるわね、あれもそのタイプの鍵だったわね。意外とピンと来ないものね」

「だな」

「さて、これで全ての謎を解明したわけだけれど。魔法で装飾されていない本来の物語はどういったものだったのかしら？」

「そうね、最後にそれを語って終わりましょうか」

そして、最後に紫は真実を語った。

「終わったよ、大ちゃん」

彼女は写真の中で笑う親友に、全てが終わったことを報告した。

一ヶ月ほど前、彼女の親友が死亡した。原因は高所からの落下、事故死であろうというのが警察の発表であった。彼女は悲しみにくれないながらも親友の死に納得しようとした、…だが。

とあるきっかけで彼女は知った、親友は彼女の友人たちによって殺されたのだと言うことを。そして、彼女は友人たちの殺害を計画した。

一人目は普通に殺した、彼女は恐怖に顔をゆがめながら死んでいった。

二人目は少し手をかけてみた、何時死ぬか分からない恐怖を味あわせてみた。

三人目に関しては少し前から仕込んでみた、自ら引き金をひかせてみようと思ったのだ。

そして、最後に四人目を。

「…気付けなくてごめん、大ちゃん」

彼女は最後に自ら首を吊った、気付けなかった自分を罰した。

かつて笑い声が響いた屋敷に、今は語る者はなし。

「と、こんなところね」

「ちよつと雑じやないか？」

「正直眠いのよ、貴方たちが長引かせるから」

そう言つて紫はあくびをかみ殺す、どうやら一日の多くを眠りに費やす彼女の限界が近づいてきているらしい。

「責任の一端はお前だけ、まあいいけどさ」

「やっぱり大妖精は死んでいたのね、そんな気はしたわ」

「復讐は復讐であつたと、ちなみに本当にミステイアたちが大妖精を殺したの？」

「どっちでもいいわ、敵討ちであろうと勘違いであろうと。あくまで蛇足だから好きに考えて頂戴。それよりも今回の感想を聞かせてもらえるかしら？」

「私は楽しめたかな、今度は謎を解くことができたし」

「私も結構楽しめたわ、ちよつと長かったけれど」

「また機会があれば誘って頂戴、喜んで参加させてもらうわ」

魔理沙、パチュリー、アリスの評価はおおむね好評であるようだ。それを聞いた紫も満足そうに笑う。

「そう、じゃあまたいつかやりましょう。今日はこれで失礼させてもらうわ」
優雅に一礼をして、今宵の魔女はその場を去った。

第三盤、出題解答編

とある日、八雲紫の屋敷に訪問者の影があった。

「どうも、今よろしいですか？」

「文？ ええ、構わないけれど。藍、お茶を頼むわ」

「分かりました」

突然の訪問、それに構わず紫は文を屋敷に招きいれるのであった。

「では私はこれで」

「ありがとう。…それで一体何のようかしら？ 何かの取材？」

二人分のお茶を出してその場を去る藍を見送って紫は文をじつと見る、そんな彼女の視線に文は笑顔で話を切り出した。

「ええ、魔理沙さんから少々面白いネタを仕入れたもので」

「魔理沙から？ とすると屁理屈推理合戦のことかしら？」

「ええ、そういうことです。なかなか楽しそうに魔理沙さんが語っておられましたから興味を持ちまして」

少し前に偶々彼女と出会った時にその推理ゲームのことを聞かされたのである、それ

で彼女にそれを教えた紫を訪れたのだ。

「それで私に話を聞きにきたと」

「そういうことです、お願いできませんか？」

「ふむ、そうね……。貴方、魔理沙から基本ルールについては聞いているかしら？」

「ええ、……もしや出題願えるのですか？」

「そのつもりよ、それが一番早いでしょう？」

「あやややや。これはこれは、予想外の収穫となりそうです」

話だけを、と思っていたが実際に体験させてもらえるとは。これ以上の収穫はそう無いであろうと文は喜ぶ。

「貴方の探偵度を試させてもらうわ、即興の謎だから物語はなしよ」

「分かりました、挑戦させてもらいます」

目の前のお茶を一口飲み、紫は謎を語り始めた。

「はたては死亡している」

「あの、被害者が知り合いなんです」

「ちょうど思いついたんだもの、仕方ないわ。【はたての死因は全身打撲によるもの】【はたての遺体がある部屋への出入りはドアからのみ可能】【ゲーム終了時、ドアの鍵はかかっていた】【ゲーム終了時、鍵はドアの内側にあった】」

「ふむふむ、赤はとりあえずそれだけと」

「いきなり全力を出すのもなんでしよう？　上手く私から赤を引き出しなさいな」

「それもそうだ、そう領きつつ文は探偵を始めた。」

「では…、『はたては転んで死亡した』というのはどうでしょう？」

「前後の状況が分からないけれどなんとも間抜けな話ね、それだと。【はたては自分のミスで死亡したわけではない】ちよつと微妙な赤で悪いわね、突貫の謎だから色々難しいのよ」

「ふむ、では『犯人Xがはたてを殺害後、鍵を持って外に出て鍵をかけ、窓から鍵を投げ込んだ』というのはどうですか？」

「【ゲーム開始時から終了時まで、鍵は部屋の外に出ていない】」

「なら、『はたて殺害後、犯人は部屋の中に留まっていた』」

「あー、そうね…」

文の推理に紫は困った顔を浮かべている。

「あれ？　意外とお困りですか？」

「んー…、【犯人は…、ゲーム終了時部屋の外にいる】」

「？　なんとも歯切れの悪い赤ですね」

「ちよつと答えにくかったのよ、これをどうとるか貴方の勝手だけれどね」

「なるほど、そういうった魔女の態度も推理の材料にしろと。なかなか奥の深いゲームのようですね、人がいることで最大限機能するゲームであると」

中には苦戦しているふりをして相手を引つ掛ける魔女もいるが、まあそれもまた醍醐味という奴であらうか。

「そういうことよ、それを踏まえて貴方はどう考えるのかしら？」

「んー…、一先ずはおいておきます。ちよつと違う方面に目を向けてみますかね。復唱要求、「はたての遺体は部屋の中にある」

「はたての遺体は部屋の中にある」

「復唱要求、「はたてが死亡したのは部屋の中である」

「はたてが死亡したのは部屋の中である」

「ふむ…」

「そうそう、ヒントをあげておくと部屋と言っても今回は一般的な部屋じゃないわよ」

「一般的じゃない？ 複数あるとかですか？」

「そういうことではないわね、赤で言っておくと【このゲームにおいて、部屋、と呼称されるものは一つだけ】よ。要はそれを部屋と呼ぶのが微妙な話、ということね」

「ふむ？ …うーん、復唱要求、「はたては一度も部屋の外に出ていない」

【はたては一度も部屋の外に出ていない】

「なるほど…」

「ヒントを追加すると全身打撲とはどういう状況でなるか、と考えると良いかもしれないわね」

色々と考え込んでいる文に紫はヒントを出す、割と気前の良い魔女である。

「どういう状況か、ですか…」

「効果音で表すと、ドーン！ かしらね」

「ドーン？ ドーン…」

「紫様、子供っぽいですよ」

「別に良いじゃない、藍」

「では私はこれで」

「…何しに来たのかしら」

何故か唐突に現れてツツコミをいれ、唐突に去っていった藍にぼやく紫。そんな二人にかまわず考え込んでいた文は何か思いついたのか、自信ありげな顔を出口を開く。

「これでいきます、『犯人ははたてを高所から突き落として殺害した』」

「【はたては落下によって死亡したわけではない】」

すぐさま返された紫の赤に、あれ？ という顔を浮かべる文、やはり自信のある推理だったようだ。

「あやややや、落下死だと思っただのですけどねえ」

「でも悪くはないわよ、あまり言うとは混乱してしまうかもしれないけれど」

「悪くない、ですか」

「それにしても部屋の中で落下死ね。クレーンで部屋ごと持ち上げて落下死、とかあったわね」

「割とよくある奴ですわねえ」

「あ、でも今回は逆ね」

「逆？」

「『部屋、はそう大きなものではない』ということよ。部屋の中で落下死できるほどの大きさじゃないってこと」

「ああ、そういうことですか。…うーむ、なかなか難しいですね」

「難しいというよりは、といった謎だと思っただけけどね。部屋、という文字にこだわると無理かもしれないわ」

『部屋が小さいもので、部屋ごと投げられて殺害された』確実に違うでしょうが、一応」

「…割と近いわ、どう返そうかしら」

「え？」

思いもがけない紫の反応、予想外の返答に文は驚く。

「【部屋は投げられていない】ということで頼むわ。投げられる部屋、ロッカーかしら？」
「ですね、それをイメージしていました。ふむ、『部屋の外から攻撃されてはたては殺害された』というのはどうでしょう？」

「…ああ、その青はきついわ。と言いか返せないわね」

非常に困った表情を浮かべる紫、しかし赤を返せないということとは。

「と、言うことはリザインですか？」

「そうね、そうなるわ」

「肝心の部屋の正体が分かっていますませんが良いのですか？」

「わりとあるのよね、全部の謎は解いていないのに根幹の部分を崩されてリザインというのも。魔理沙達とやったときは真相をほとんど解いたけれど」

「なるほど、これもまたこのゲームの特徴、と」

「どうする？ 全部ばらすか部屋の正体を探るか、貴方の好きにして頂戴」

「ではもう少しやってみます」

延長戦、最後の謎を解くために文はさらに頭を回転させる。

「復唱要求、「部屋の大きさは一畳よりも小さい」

「ん…、ちよつと待っていて。一畳の大きさを確認してくるわ」

そう言つて席を立ち実際に確認しにいく紫、それを見送つた後文は今気がついたよう

な反応をしてから出されたお茶を飲んだ。

「…お待たせ、面積的には一畳よりも大きそうだったわ。でも復唱は拒否させてもらわね、ちよつと言いくらいのことがあるから」

「分かりました」

「でも、一畳よりも小さな部屋もありそう、とは言っておくわ」

「複数あるのですか？ でも一つだけと赤で言っていたような気がします」

「ゲーム中に出てくるものは一つだけよ、でもいくつか種類があるのよ」

「ふむふむ、そういう部屋だと」

部屋、とゲーム中呼称されているものは複数の種類が存在する、そういうことであらうか。

「まあ、今回の大きさはそれなりにあることにしましょうか。でも小さいものもあるでしょうし、もしかしたらはたての場合はそうだったかもしれないわ。ちなみにとても大きなものもあるわね」

「うーむ…、分かりませんねえ」

そう色々々と聞かされたがどうにもピンと来ない、先ほどまでのように何か降りてくるということもない。要は手詰まりであった。

「答え合わせ、する？」

「…お願いします」

どうにも思いつかない、ということでは文は降参の意思を表明する。とはいえ紫にリザインを言わせている以上ゲームとしては文の勝ちではあるが。

「答えは車よ、【はたては交通事故によって死亡した】」

「あー、なるほど」

言われてみれば確かに、そういう反応を文は見せる。こういう発想は出る時は簡単に
出るのだが、出ない時は何をやっても出ない、そういうものだ。

「一応小さな部屋、密室ではあると思つたのよね。窓はあるけれど出入りは難しいし。それと一人乗りの小さな奴もある、わよね？」

「はい、ありますね。ふむ、ドアは一つとか復唱要求しておけば良かったですね」

「そうなる流れは変わっていたでしょうね」

たった一つの推理や疑問が全体の流れを変える、それが今回の総評であろうか。何にせよ、魔女と探偵どちらにとっても楽しいゲームであったのは確かだ。

「あやややや、話には聞いていましたでしたがやはり面白いゲームですねえ」

「そうね、私も魔女としてなかなか楽しませてもらったわ。まあそのうち探偵役に回りたいとは思うけれどね。というわけで」

「私がこのゲームを広めれば良いのですかね？」

新聞で屁理屈推理合戦を広めれば魔女や探偵も増えるかもしれない、そうすれば紫もまた探偵役としてゲームを楽しめるようになる。魔女も魔女で楽しいのだが、探偵役をやってみたいという欲求もあるのである。

「お願いするわ、なかなか良い時に来てくれたこともあるし」

「良い時？」

「今度博麗神社でまたやるつもりなのよ、良ければ貴方もどうかしら？」

「ああ、それは喜んで参加させてもらいますよ。では私はこれで、早速記事に興じたいと思います」

「ええ、それじゃあまた会いましょう」

「はい、ではまた」

その後、文は今回のゲームを新聞にするのだが、それを読んだはたてに絡まれるのはまた別の話だ。

第四盤、出題編

幻想郷、博麗神社。そこに五人の人物？ が存在していた。

「さて」

その一人、今回の主催者である八雲紫が改めてその場にいる面々に目をやる。

「探偵の皆様方、今回はお集まり頂きありがとうございます。今回私が準備した謎、華麗に解決されることを望みますわ」

「あやややや、楽しませてもらいますよ」

参加者、探偵役を担うのはかねてより参加を決めていた射命丸文、それと偶々この場に神社を訪れていたチルノ、大妖精の妖精組、それと。

「それは良いんだが、一ついいかね？」

「何かしら？」

「このマスクは何？ あと服を返してください、お願いします」

紫が適当にスキマからフィッシングした男、罪と書かれたマスクを被り：何故か股間にバラを供えた男性であった。何故男性だと分かるのか？ 見れば分かる、何しろ全裸に近い半裸なのだから。はつきり言おう、変態にしか見えない。ちなみに罪袋と言うそ

うだ、本名は不明。

「だ・め」

「…シユーン」

「ま、貴方が正解したら考えてあげるわ。では、改めて」

バツと手に持った扇を広げて、ニヤリと笑った口元を隠す。

「魔法を始めましょうか」

「これは…、あまりよろしくないわね」

紫の魔女の見つめる先、そこには吸血鬼の姉妹の死体が存在しました。

両者の胸からは真つ赤な血がどくどくと流れており、両者の手には血に濡れたナイフが握られています。

そう、吸血鬼の姉妹が互いにナイフを刺し合い死んでいたのです。

「…彼女達の死を汚すわけにはいかないわね」

原因が何かは分かりませんが友人とその妹が互いに殺しあってしまった、他の者はこそつてそのことを噂することでしょう。

魔女は友人の誇りを守る為に魔法をかけることにします。

何事かを呟きながら彼女が手をかざすと友人の妹の遺体はその場から消え去りました。

「これでよし、後は私に任せて頂戴」

そして、友人の誇りを守る為に魔女は手を尽くしたのです。

と、紫が熱演しながら物語を語ったのであるが。

「面白そうなネタですね」

「いやん、撮るな！」

と、文は罪袋の写真を撮っているし。

「ねえねえ、何でバラが生えているの？」

「チルノちゃん、これはね、紫さんが俺にはバラが似合うからって準備してくれたのよ」

「へー、そうなんだ。さすが紫だね」

チルノもまた罪袋の格好について話をしているし。この参加者達は魔女の言葉を聞いているのであろうか？

「ちゃんと聞きなさいな、貴方たち」

「こーら、もう魔女さんが話しているでしょ」

注意の声が被った、どうやら大妖精だけはきちんと話を聞く姿勢であったようだ。そ

のことに紫は若干感動してしまうが冷静に考えて欲しい、それが普通なのだ。

「皆さん自由ですねえ」

「わかったよ、大ちゃん」

お前もな、素直なのはよろしい。そんなことを思いつつ、場の面々の視線がこちらに集ったことを紫は確認する。

「…いいかしら？ 赤を宣言するわよ。【レミリアは死亡している】【レミリアの遺体は部屋Aに存在している】【フランは死亡している】【フランの遺体は部屋Bに存在している】【レミリアは即死した】【レミリアがフランを殺した】【フランは即死した】【フランがレミリアを殺した】【部屋Aと部屋Bは10メートル以上離れている】」

提示された赤、それを文などはメモしながらふんふんと頷いている。他の面々も大体反応は同じだ、ここからどう推理しようかと考えている。

「さあ、探偵の皆様。その明晰な頭脳から導き出された推理を私に示してくださいるかしら？」

とうとう始まった屁理屈推理合戦、最初に手をあげたのは罪袋であった。

「紫さんの今日のパンツは何色ですか？」

…手を上げてそれか、と全員が思った。

「何を言っているんですか、この変態は」

文などはこの通り、口にまで出してしまっている。…のだが。

「安心なさい、はいてないわ」

まさかの紫の返しにまたもや全員固まる、本当かどうかはさておきその返しは予想外が過ぎるというのもだ。

「ふむ、よろしい。大事な選択回数を削った価値はある」

質問者である罪袋はキリツという効果音がつきそうな感じでそう言ったが、削れたのは皆からの僅かばかりの敬意の精神だろう。

まあ、それはともかく、改めて屁理屈推理合戦はチルノから始まった。

「それじゃ復唱要求、「凶器は刃物である」」

「【凶器は刃物である】」

続いては文だ。

「それでは「レミリアは部屋Aで死んだ」「フランは部屋Bで死んだ」」

「【レミリアは部屋Aで死亡した】【フランは部屋Bで死亡した】その調子で頑張んなさいな、私は気前のいい魔女だからね」

「復唱要求、「第三者Cが存在していた」」

「第三者ねえ」

チルノからの復唱要求に紫は僅かばかり考え込む、とはいえそれは答えにくいというよりは。

「チルノちゃん、それは青字じゃないかな?」

「あ、そうなのか。ごめんね大ちゃん」

ちよつとずれている、と言った方が正しいか。

「復唱要求でも通らないことは無いと思うけれどね、まあ「第三者は存在しない」の方がいいのは確かだけれど。とりあえずそれで答えるわね、〔登場人物はレミリア、フランの二名のみ〕」

「では復唱要求を、「部屋Aと部屋Bは最初から10m以上離れていた」

「【部屋Aと部屋Bは最初から10m以上離れていた】」

『凶器の刃渡りが10m以上あり、お互いを刺殺できた』

「【凶器はナイフ、長さは柄を含めて三十センチ】」

「じゃあこんなのは? 『レミリアとフランの部屋は一つだった』」

「【部屋Aと部屋Bは独立している】」

文、大妖精、チルノと順々に考えを述べていく。それに答えつつも罪袋はどうしたのか、と紫が目を向けてみるとちよつと彼が口を開く。

「刺した後どちらかは移動できる状態だったりします?」

「罪袋、それを聞きたいのならきちんと復唱要求しなさいな」

「罪袋それはおかしいよ 二人は「即死」なんだよ?」

「ああ、即死か…。なら…」

そう考え込む罪袋を見て、ちよつと慣れていないようねと紫は思う。まあこの屁理屈推理合戦は前回の文の仕事のおかげで多少は広まったがまだまだ細かいルールまで浸透しきつているとは言いがたい状況だ、今回逸りながら慣れてもらうしか無いだろう。…そもそも罪袋は何処出身なのだろうか? ……まあ、ゲームが出来るのならそこはどうでも良いか。

『レミリア達が、刃物を10m投擲した』

「レミリアとフランの体格は一般的な少女のもの」
「一般的な少女に刃物を10m投擲することは不可能」

「復唱要求、「凶器は二人が持っていたナイフ」

「【死因はナイフによるものよ】
ついでに言っておくと【凶器、犯行に使われたナイフは二つよ】

「むむむ…、難しいね」

大妖精、チルノの妖精組が頑張っている。妖精はあまり頭がよろしく無いなどと言われる事もあるが存外それでも無いらしい。

「復唱要求、「部屋は水平に10m離れている」

「…復唱拒否よ」

ということとは垂直方向に10m離れているということ？ などと質問者である大妖精は考えるのだが。

「でも、それだと下の階から上を殺せないんですよ…。うむむ」

それはそれで推理が繋がらない、難しいものである。

「大妖精のが復唱拒否されたのが気になるな…」

「そうね、そういったものも踏まえて考えなさいな」

ボソリと呟やかれた罪袋の言葉は紫は肯定する。屁理屈推理合戦の特徴の一つである拒否、これもまたゲームを面白くする為のギミックの一つであるのだから。

「復唱要求です、「レミリア、フランは一人ずつである」

「ん…？ ああ、同姓同名とか二重人格とか？」

「ですな」

「今回のゲームの登場人物は、レミリアという一人の少女と、フランという一人の少女である」【名前、肉体を共有しているものはいない】

「フランが四人に増えるからってそれはないよ、文」

まあフオーブアカインドはないが、きちんと魔法以外の方法で説明さえ出来れば問

題ないと言えなくも無い。とはいえ、今回はそういうことではないのであるが。

「それじゃ…、「レミリアとフランは血を流した」

「うん？」

「いや、これが通らなければレミリア、フランって名前の人形が刺されたという可能性もあるかなって」

「あ、なるほど。そういう考えもあるね…」

チルノの説明に罪袋は軽く頷く、こういつた自分に無い発想を聞くことでさらに推理を進めることができる。そしてそれから導かれた推理がさらに別に推理を生じさせる。だからこのゲームはある程度の人数がいる状態でやった方が良いと思う。

「レミリアとフランは確かに血を流した」残念だったわね、人形じゃないわよ」

『ナイフを何か棒のようなものを使って長くして刺した』

「二人はナイフを直接握って相手を刺した」これは結構重要な赤よ」

「普段二人はナイフより怖いもの振り回している気がするけど…」

「ナイフも十分怖いわよ」

「大丈夫、あたい達は一回休みになるだけだよ」

そうチルノは笑っているが、微妙に笑えないのは人間だけであろうか。

「それでやり合ったら本人より周りが危険だけどね」

「罪袋はね、私達は平気よ」

訂正、人間だけであるようだ。

「復唱要求、「ナイフに何か仕掛けがあった」

「仕掛けが無い、の方が良いわよ。でも答えてあげる【ナイフに仕掛けは無い】

「んー、そうなのか。じゃあスペツナズナイフとかの可能性は消えたのか」

「ないわねえ、断言してあげるわ」

現状、一番発言しているのはチルノであろうか。紫には彼女が一番積極的に屁理屈推理に参加しているように見えた。

「大ちゃんもどんどん質問しないと」

「うん…」

と、チルノに促されるものの大妖精は若干生返事な様子。どうやら既に何某かの推理を持っており、今はそれを固めている最中なようだ。

「さてさて…、少し考えてみるか」

「そうですね、しかし中々いいものが出ないですねえ」

「何か赤がいるかしらねえ」

罪袋と文の発言に紫は赤の追加を検討する、とそのタイミングで大妖精が口を開いた。

「では復唱要求、「2つの部屋はそれぞれの部屋に一番近い壁が10m以上離れている」
分かりますらいいでしょうか？」

「いえ、意味は分かったわ。でもどうでしょうか…、あえての復唱拒否でいくわ。…それにしても、大妖精のばかり拒否しているように思えるわね、でもそれだけ良い線いつていると思いなさいな」

「ふむむ」

「ふむ」

紫の発言に大妖精と文はさらに考え込む。その推理が良い線ならどうなるのか、それを考えているのであろう。

「復唱要求、「レミリアとフランが死んだ時刻はほぼ同時である」

「【レミリアとフランは同時に死亡した】」

「事故死、とかの可能性はあったりする？」

「事故じゃないわね、「二人には明確な殺意があった」

「復唱要求です、「二人のどちらにもナイフでの傷以外なかった」

「【レミリア、フラン両名にナイフでの刺し傷以外の外傷は存在しない】

「ふむ、どちらかが落下して離れたかと思ったのですが」

「復唱要求、「レミリアとフランにナイフが刺さったのは同時である」

「レミリアとフランにナイフが刺さったのは同時である」、普通なら同時などありえないけどね。まあ解答だって普通じゃないいいわね」

『ナイフには、遅効性の毒が塗られていた。お互いに死なない程度に傷つけ合った後、2人は部屋に戻り、死亡した』どうでしょう」

「それ、即死ではなくってしまっくんじゃないでしょうか？」

「あちゃ、そうでしたね……」

文の指摘に大妖精は顔をしかめる、どうも考えすぎて赤を見落としてしまったようだ。

「そこまで悪くないと思うけれどね、毒で即死。でもまあ、「毒物は用いられていないのだけれど」

「では「二人はナイフによって死亡した」、を復唱要求しておきます」

「二人はナイフによって死亡した」死亡、即死ね」

「二人のパンツは何色か。柄も求む」

「ここまで真面目な雰囲気が続いていたのにこの罪袋は、等といった感じの視線が集まる。」

「だから推理なさいな、…二人のパンツ？ 面倒だから全裸で良いわ」

「雑ですわ……」

「くそ…妄想の手間をはぶかれちゃった」

大妖精のちよつとずれた感想にもツツコミを入れたいが、何よりも阿呆なことを言っている罪袋の方が先であろうか。どっちにしろ、全員がスルーを選択したためにこの話題はここで終わってくれたのだが。

第四盤、解答編及び第五盤、出題編

その妙な空気を最初に払ったのはここまでガンガンきているチルノの青き真実であつた。

『二人は自分の死をお互いになすりつけるように 自殺した』

「既に赤で言っているわ、でもまあ改めて『二人は他殺』よ、自殺なんてしてしないわ」
「あー、そうだったね。ごめんね」

「あ、これはどうでしょう？ 『片方が死んだあと、窓から落下して、10m下の部屋に入った』」

チルノに続く大妖精の青き真実、それに紫は少しばかり考え込む。

「…どうしようかしら……、【どちらの遺体も落下していない】

「むう……」

「落下していない、ね……」

紫の返しにチルノが反応する、紫の言い回しに何か引つかかるものでも感じたのであろうか。

「うーん、落下していたら外傷があるでしょうしねえ」

「下にクツションがあつたかもしれないと思つたので」

「ふむ、なるほど」

「ああ、そういう可能性もあつたわね」

文と大妖精の談義に紫はその手もあつたかと紫は手を叩く、魔女からしてみれば探偵たちの推理は次の謎のヒントともなりえるので実に楽しいものである。とはいえ探偵たちからしてみれば、紫の反応は今回に関しては違うということを指しているも同然であるので悲喜交々ではあるのだが。

「つまりどつちかが上に昇つた可能性があるかもつてことだね」

ボソリとチルノが呟いた言葉に紫はピクリと反応していたのだが、誰もそれに気づくことなかつた。

「復唱要求、「レミリア、フランの部屋は互いに鍵がかかつていた」

「鍵？ 別にこれは密室殺人じゃないわよ、だからそこは気にしないで良いわ」

「密室殺人じゃないって事は…、部屋自体は関係ないんだね」

「関係ないというか…、何というか…」

チルノの感想に紫は悩んだような顔を見せつつ言い淀む、その紫の様子を見た文はここに何かあると追求してみることにする。

「復唱要求です、「部屋は一般的な部屋である」

「…拒否よ」

「ふむ」

やはり何かある、とすると…。と文が考えているとそれを聞いていたチルノがハツとして口を開く。

「『二人のどちらかがエレベーターにいた』」

「…ふふ、グッドよ」

チルノの青き真実を聞いて紫は満足げな笑みを浮かべる、そして広げていた扇を畳みチルノに向ける。

「リザインするわ。皆、チルノに拍手を」

魔女によるリザイン、つまりは探偵側の勝利である。それを魔女に宣言させたチルノに全員がパチパチと拍手を鳴らす。

「ありがとう」

「ああ、なるほど」

「さすがにチルノちゃん！」

「射命丸の要求のおかげだよ」

大妖精の賞賛にチルノはそう返す、他者の推理を聞いて更なる推理につなげることが

出来るのが多人数の強みである。

「説明をしておくわね。ゲーム中どちらか、まあフランにしましょうか。フランの乗ったエレベーターが移動したのよ。そして扉が開いた瞬間に互いにナイフを突き立てる、その後二人は後ろに倒れこみ遺体はそのまま移動したと。ゲーム開始時と終了時は確かに10m離れていたから赤もクリアできるわ」

特にそれ以上の説明は要らないだろう、これが今回の謎の答えである。

「さて、次の謎は霊夢ね。ちよつと呼んで来るからそれまで少し休憩で」

今日の集まりだがGM、つまり魔女は持ち回りだ。紫のほかに霊夢、魔理沙が奥で控えており各々が魔女として謎を出すことになっている。魔理沙はともかくあの霊夢がよくやるな、などと思われるかもしれないが何だかんだ彼女もまた屁理屈推理合戦にはまった一人なのである。

しばしの休憩、そして紫に代わって霊夢が探偵たちの前に現れる。

「じゃあ私の謎を出すわよ、いいかしら？」

「ええ、構いませんよ」

「どんとハイ」

「OK」

探偵たちのやる気は十分、それを確認した霊夢が口を開いた。

「これは紫から聞いた話よ」

あら、どうやら今度は殺人じゃないようね。…たまにはこういうものも良い？　まあ、そうかもしれないわね。

あるところに橙って名前の女の子がいたようね、どこかで聞いたことのある名前だわ。彼女は水に濡れるのが嫌いで、雨を防ぐ為に常に傘を持ち歩いていたそうよ。

ただついいうっかり傘を忘れて外出した時があったの、しかもその日に限って雨が降るといふ不運が彼女を襲ったわ。

どうしようかと悩む橙の元に一人の魔女が現れたそうよ、多分藍とかいう名前なのでしようね。

魔女が杖を一振りすると橙の周りに結界が張られたわ、そのおかげで無事橙は雨に濡れずに目的地まで辿り着けたというお話ね。

さて、赤を宣言させてもらうわ。

「ゲーム開始時、橙は地点Aにいた」

「ゲーム終了時、橙は地点Bにいた」

「地点Aと地点Bの周囲には確かに雨が降っていた」

「橙は雨具の類を所持していない」

「橙は雨で身体を濡らすようなことにはなっていない」

とりあえずはこんなところね、貴方たちの推理を聞かせてもらおうわ。

「私を退屈させないでね、そんなに難しい謎じゃないわ」

「周囲に雨が降っていたんだね…」

「そうよ、式には天敵ね」

そんな雑談を挟みつつ、探偵達は早速思いついた推理を披露していく。

『藍が橙にカッパを貸してくれた』

「橙は雨具の類を持っていなかった」

まずは罪袋、しかしばつさりと切られる。

『AとBの間は建物の中だった』

「地点Aと地点Bは建物の中では無い」

「復唱要求、「A地点とB地点に屋根になりそうな所はない」

「【地点Aと地点Bに屋根になりそうなものは無い】

「ん、そうなのか。分かった、『藍は橙に折りたたみ傘を渡した』橙はもってなくても藍は持っていた」

「【ゲーム開始時から終了時まで、橙は雨具を持っていない】

次いでチルノの連続推理、しかしこれまたばつさりと切られる。

「『地点Aから地点Bまでは地下だった』」

「【地点Aと地点Bは地下で繋がっていたりしない】

再びの罪袋の推理、先ほどまではふざけている面が多く見えたがどうやらスイッチを入れたようだ。

「復唱要求です！「橙は地点Aから地点Bまで歩いて移動した」

「ふむ……」

と、ここで大妖精が放った復唱要求に霊夢はしばし考え込む。

「拒否よ。本当に優秀、と言っておこうかしら」

「復唱要求、「橙は何かの中に居た」

「……………チルノ、拒否してあげるわ」

「妖精組は核心をつくね」

罪袋の呟きにまったくだと霊夢は頷く。先ほどの紫のゲームも裏で聞いていたから分かるが、本当にチルノと大妖精は筋が良い。

「これで砕く、『車で移動した』」

「……………」

しばしの無言、もしやりザインかと全員が注目する。

「…ふふっ」

だが、そんなに甘い問題ではない。

「このゲームにおいて、車の類は存在しない！」残念ね」

「むむむ…」

悔しそうなチルノに霊夢はニヤリと笑う。そう、これこそが魔女の醍醐味なのだ。

「チルノちゃん、惜しいと思ったんだけどなあ」

「それでは、『何らかの乗り物で移動した』」

「何らかの乗り物、ねえ」

「『藍が傘をさしてくれて、一緒に地点Bまで行った』」

文の推理に霊夢が何かを考え込む中罪袋も重ねて推理を放つ、だがそのどちらも霊夢を倒すには至らないようだ。

「じゃあ答えてあげるわ。【橙は地点Aから地点Bまで、乗り物によって移動などしてい

ない！」【彼女自身の力で彼女は移動したのよ！】【登場人物は橙一人！】

「これなら橙が傘をさしてなくても…違うか」

「ふふ、紫とはまた違った魔女、楽しんでくれているかしら？」

まだまだ、この魔女を倒すには推理が足りないようだ。だが、ならばさらに推理を重ねていけば良いだけだ。そう探偵達は改めて謎に向き合ったのであった。

第五盤、解答編

「乗り物でも藍が手助けしてくれるわけでもないってか」

「ここまでの赤を纏めるとそういうことになるのか、と罪袋は言う。

「ええ、そうよ。彼女は乗り物で移動したわけじゃないわ」

「復唱要求、「ゲーム終了時橙の足は汚れていた」」

「汚れてね、割と難しいわ。答えないでおきましょう」

「橙は何も道具を使っていない」復唱要求です」

「それだと服も着ていないことになるわね、だから駄目」

チルノ、文と続けて復唱拒否をする。とはいえその理由は若干異なるようだが。

「『濡れるを通り越して泥でぐちゃぐちゃだった』」

「罪袋さんのそれは…」

「わかっている、こんなわけはない」

笑いながら罪袋はそう言うが、赤を行使しなければならぬ霊夢は若干困り顔だ。

「何か答えづらいわね、赤が切りにくい。「いかに泥にまみれようと、雨をその身で受け

たのならそれは雨に濡れたとみなす」

「服以外の道具を使っていない」復唱要求です」

「復唱要求、「橙の歩いた道は地点Aから地点Bである」

「これはどうでしょう。復唱要求「地点Aに立っている橙には雨がかかる」

「……どうしましょうか」

改めての文、チルノ、そして大妖精の復唱要求に霊夢はしばし考え込む。

「…」

「全部拒否よ、なかなか良い線いつているわ」

チルノが固唾を飲んで見守る中、霊夢は首を振りながらそう答えた。拒否され赤を引き出すところそ出来なかったが、その反応は今の彼女たちの推理がなかなか良い線をついているのであろうと推測できる。

「復唱要求、「地点Aから地点Bは平たい道である」

「この日本、坂くらいはあるでしょうね」

そう言つてチルノの要求に惚ける霊夢、復唱する気は無いということだろう。

「私の考えだと…『濡れない場所である地点Aと地点Bは同じ場所であった。橙は移動などしていなかった』どうでしょうか？」

「【地点Aと地点Bは確かに離れている】【同位置ではない】【これは水平方向、垂直方向、

両方である」

「移動しなかつたら濡れないと思つたんだけどなあ」

『移動距離は一步や二歩の狭い範囲である』

「それでも濡れると思うけれどね、【地点Aと地点Bは十メートル以上離れている】

「ふむ、奇策でいったけれど流石に駄目だったか」

続いての大妖精、罪袋の推理を霊夢は赤を以つてスツパリと切る。見事に推理切られてしまつた二人はがつくりと肩を落とす。

『地点Aから地点Bは建物内であり橙は階段を使って地点Bまで行つた』

「チルノ、それは先の赤で切れるわ」

建物の中で無い、それは先の赤で既に証明済みだ。

『服を脱いで服を傘代わりにして移動した』

「また全裸ね」

「いや、訂正します。『何らかの道具を傘代わりにして移動した』」

「橙は雨具の代わりになりそうな道具を所持していない」ついでに、【橙は全裸ではない
な】

ふむ、と自分の青を切られた文はしばし考え込む。しかしこれだけでは終わらないとさらに青を提示していく。

「『雨が降っていない道を選んで移動した』」

「【地点Bを中心として十メートル以上の範囲で雨が降っていた】まあ実際はもつと広いでしょうけど」

これも駄目、と。ならばと次なる推理を披露しようとする文よりも一瞬早くチルノが自身の青を示す。

「『橙は飛行機の中に居た』」

「おっと」

「『地点Aと地点Bは雲の上だった』」

「良いわ、チルノ、そして文」

二人の青き真実を聞いた霊夢は軽く肩をおとし、諦めたように口を開く。

「私はリザ……」

ごくり、と探偵達はつばを飲み込む。これで終わりかと皆が思った、その時だ。霊夢はその諦めたような空気を霧散させ、にやりと笑う。

「なんてするわけないでしょう！」

「えええええ!!」そこはリザインで良いじゃないですかー」

大妖精の反応にさらに笑みを深める霊夢。そうだ、これこそが魔女の求めていた反応なのだ！

「本ゲームにおいて、乗り物の類は一切登場しない!!」【橙は確かに雨雲よりも下の地点に居た!!】「つまり、山の上が舞台などでは無い!!」

「うーん、難しいなあ…」

「むむむ…、潰されちゃったよ」

「いいわ、二人とも。私の筋書き通りの答えをくれて」

余談ではあるが霊夢が最初にこの謎を考えた時その二つが真相の候補であった、山の上だから雨は降らない、あくまで飛行機の中を歩いているだけ、などの真相にするつもりであったのである。しかし調べてみたところ雨雲の下端というものは冬場で五千から一万メートル、夏場ともなると一万五千メートルの高さになるとのこと。そうであるならばこの二つは真相としては少々問題があるか、と判断した霊夢によつて変更されたのである。

つまりこの二つはもとより予想できた推理であり、それをチルノと文がまんまと出してくれたことに内心霊夢はとても満足していた。

「復唱要求、「橙が居たのは紛れも無く地上である」

「…さすがね、復唱拒否よー」

「おおー」

我がことのように喜ぶ大妖精、彼女自身の推理もすごいがチルノの推理もなかなか

良い。これはチルノが当てるか？ などと霊夢は対峙しながらそう思った。

『橙は雨雲より上空から落下して移動した』

『雨雲の中を通った場合、それは雨に濡れたとみなす！』

『地点A、地点Bは地上である』、復唱要求です

「拒否！」

文からの青き真実、そして復唱要求に全力で対応する霊夢。これは文かチルノか、どちらが本命となるかわからなくなってきた。さらにチルノも続いて青を提示してくる。

『『橙は宇宙にいた』』

「橙はオゾンよりも下にいた！」

「橙は怪我をしていない」復唱要求です

「？」

「??？」

霊夢、ついでにチルノも文の復唱要求に首を傾げる。とはいえ答えるか、と霊夢は口を開く。

「橙は外傷を負っていない」

「いや、何かしらの方法で高速で移動したら怪我するかなーって」

ああ、とその文の返答に納得する。そういうことなら分らないでもない推理だ、た

だまあ今回に限ってはまったく違うのであるが。

「そろそろヒントを出しましょうか」

良いところまで行っているがそこから先にすぐにいけるかどうか少々微妙、そう判断した霊夢はヒントを出すことに決める。時間が良い頃合になってきたというのもおそらくは理由の一つであろう。

「雨には濡れていない、よ。正直な話、罪袋の泥云々は悪くなかったわ」

ラッキーヒットだか何だか知らないが、ふざけているように見えて実際良いところをついているあの推理は実に困った。ある意味でああいう推理が一番魔女にとって厄介かもしれない。

「つまり全……」

「チルノちゃんそっちじゃないわ!」

たぶんふざけているのだろうが、こういうところは実に妖精らしいと思う。しかしこれでかなり良い推理をするのだからこの妖精達は侮れないものだ。

「服は着ているわよ」

まあ何時ぞやの赤で既に否定済みなのだが、そもそもそんな赤がある時点で霊夢もちよつとおかしい。

『泥で屋根を作った』

「屋根は無いわよ」

これもまた既にある赤で斬つてある。と言うかそれは今発言した文当人が引き出した赤だ。

「霊夢、橙は一切濡れていない、だったよね？」

「ん？ 雨では濡れていない、そんな風に言わなかったかしら？」

「なるほど」

『『橙は水中を移動した』』

「あ」

先に言われた、そんな風にチルノが声を漏らす。そして

「どうですか？」

「文」

名を呼び文の目をじっと見る霊夢、そしてフツと苦笑をもらした後パチパチと拍手を鳴らす。

「リザインを認めるわ、おめでとう」

「やりましたー！」

「そら、皆拍手なさい」

パチパチと拍手をしながら罪袋たちは今回の真相について感想を漏らしていく。

「なるほど、その手があつたか」

「辿り着いたけど文に先に言われちゃった」

「海水には濡れた、でも雨には濡れていない。これぞ屁理屈。悪く無いと思つてくれるかしら？」

海を泳いでいれば海水には濡れるだろう、しかし潜つていればその上で降る雨に濡れることは無い。それが今回の謎の真相、濡れているのに濡れていない、そんな屁理屈な謎であつた。

さて、実は今回、この謎を最後にお開きとなつている。理由としては単純だ、予想より時間がかかつてしまいそれ以上ゲームを続ける時間がなくなつてしまつたからだ。こうして新たなゲームは日を変えて行われることとなつたのであつた。

第六盤、出題編

別日、博麗神社にて。

「お邪魔します」

「いらつしやい」

「私も来たわよ、霊夢」

「あら、あんたも来たの?」

大妖精、天子が霊夢の元を訪れていた。目的は勿論屁理屈推理合戦である。

「ええ、紫にこつちに混ざりなさいって言われたからね。私も紫と一緒にするのは勘弁願いましたかったしちやうど良かったわ」

「そう、そういうことならいいんだけれど」

などと話していると神社の縁側に一人の男性が現れた。

「すみません、博麗神社というのはここであっていますか?」

「ええ、あっているわ。どちらかしら?」

「おれは命蓮と言います。彼、罪袋の代わりとしてきました」

「罪袋？」

「前回の参加者さんです、紫さんがスキマから適当に連れてきたようでした」
「なるほどね」

前回のことを知らない天子に大妖精が軽く説明する、その横で霊夢は首を捻っていた。

「…命蓮？ 確かそれって聖の弟と同じ名前じゃなかったかしら？」

「ええ、その命蓮です」

「とつくの昔に死んだって聞いているけれど、幽霊の類かしら？」

「その通りです、あの世から帰ってきて彷徨っているところを彼に助けられました」

しかし、と霊夢はやはり首を捻る。

「あいつ、外から紫が適当に連れてきたんじゃなかった？」

「少なくとも彼は外の出身のはずですがね、彼とは外にいたときからの付き合いなので」
「は？」

聖の話からしても命蓮が外にいたのは数百年前のことのはず、そのころからの付き合いということとは少なくとも今の罪袋は人ではないということになる。

「あれ、罪袋さんも人間じゃなかったんですかね？」

「そういうことになりそうね、まあどうでもいいけれど」

どうせ気にしたところでどうなるというものではない、分からなくても問題ないものは放つておいても構うまい。ということとでそのあたりの詳しいことは丸つきり無視することにした霊夢であつた。

「まあそんな感じで、よろしくお願いします」

「はいはい」

「よろしく」

「よろしくお願いします」

と、こうして新顔は揃つたというのである。

「しかし来ないわね、魔理沙の奴。今日はアイツが謎を出すつて話だつたのに」

場所は博麗神社であるが今回魔女役をやるのは魔理沙である、しかしその当人がさつぱり来ない。魔女がいなければいくら探偵がいたところで謎は始まらないというのに。

「チルノちゃんも来ませんねえ、湖にいなかったのてつきりもう来ているものだと思つたのですが」

「それに文も来ない、こつちは仕事でも長引いているのかしら」

などとしばし話しているとようやく烏天狗と氷精がやって来た。

「失礼、遅れました」

「ごめんね皆、遅れちゃつた」

「あら、噂をすればね」

「もう始まっていましたか？」

「いえ、魔女役の魔理沙が来ていないからまだよ」

「そうでしたか」

「じゃあぎりぎりセーフかな」

「どうするの？ 正直のんびり待つか退屈なんだけれど」

「そうねえ…」

適当に謎でも考えてみようか、などと霊夢が思っていると命蓮が口を開いた。

「ではおれが出しませうか？ 彼に言われて予習ついでに簡単な謎を考えてきたので。しかしこうなると魔理沙がいないのは都合が良かったですね」

「ふむ？ まあなんにせよ、そういうことなら頼むわ」

「そうね、期待しているわ」

まあ、初心者ではあるが少なくとも魔理沙が来るまでの場つなぎにはなるだろう。そういうことで命蓮が謎を語るようになったのであった。

「まあ、行きますよ」

先日おれが香霖堂に陰陽術の本を買いに行ったときの話なのですが、店に着くと泥棒に入られました。

入り口のドアは店主がいるのであれば入れずに入るのとは不可能。

本が保管してあった部屋の窓はカギがかかっています。

しかし、泥棒はカギを開けずに部屋に侵入し本を奪って行ったのです。

泥棒はどうやって本を盗み出していったのでしょうか？

では、前提の赤を。

【部屋に入れる場所は店の中の扉、窓のみ】

【窓には鍵がかかっていた】

【泥棒は鍵を開けずに本を盗んでいった】

さて、泥棒はどうやって本を盗んだでしょう？

「なるほどねえ」

なんとも分かりやすい、密室侵入と脱出の謎だと霊夢は思った。どのような謎になる

か期待していたが、なかなかどうして楽しめそうな予感がする。

「鍵を開けずに入ったのなら鍵云々はあまり考えなくて良いかしらね、さてさて」

とりあえず適当に、始めてみるようか。

「復唱要求しようかしら、「犯人は貴方と店主が居た時間に犯行に及んだ」

「【いたのは店主のみ、命蓮は盗まれた後に来店した】」

「ま、とりあえず進めていきましようか。まずは復唱要求「盗まれた本は、部屋の中にあつた。泥棒は部屋に侵入し、本を持って部屋から出ていった」

「【本は部屋の中にあつた、泥棒は部屋に侵入した、泥棒は本を持って部屋から出た」、天
子さんのおっしゃるとおりです」

「ほう」

少なくとも部屋に入ったのは事実、と考えていいだろう。となれば問題とすべきはど
うやって部屋に入るかだ。

「それではまず手始めに『扉を壊して入った』」

「【扉は壊れていない】」

「『泥棒が店を壊して盗んだ』」

「【店は壊れてはいない】」

「『窓を壊して入って盗んだ』」

扉、店、窓と文は壊れている場所がないか確認していく。がここで霊夢が口を挟む。

「窓が壊れたら店も壊れたことになるんじゃない？」

「そうだよね」

「そうなるんですかね？　いくらでも曲解できると思いますが……」

首を傾げつつも霊夢とチルノの言い分に納得したのか文は引き下がる、その様子に命蓮も答える必要は無いと考えたのか特に赤を行使することはなかった。

「ふむー。復唱要求、「店主は本を盗まれたことに気がつかなかった」

「【店主は盗まれたことに気がついている】」

「私も復唱要求しましょうか、「このゲームにおける本、とは特定のものを指し、複数存在しない」

「【本を一冊のみ】」

「【本は普通の本である】」

「一応魔導書の類ではあるのですが、それを言ったらこの話し終わっちゃいますからね。まあ【本は普通の古びた本】とだけ」

「復唱要求、「部屋は一つのみである」

「【部屋は複数ある】」

「あらそうなの？」

まあ本が一冊な以上問題となる部屋も特定の一部屋と考えて良いだろうか。とりあえずはそう考えてさらに推理を進める探偵たち。

「復唱要求、「犯人は本を店の外に持ち出した」

「【犯人は本を店の外に持ち出した】」

「復唱要求、「店は2階建て、もしくは地下がある」

「【店は一階のみ】」

「泥棒は本があつた部屋以外に侵入していない」復唱要求よ」

「【本のあつた部屋以外には侵入していない】」

「さらに復唱要求、「窓は施錠されていた。泥棒は侵入する際に窓を開錠した」

「天子はせめるな」

チルノの言うとおり、初参加である天子がガンガン前に来ている。これはなかなか頼れる探偵仲間となるかもしれない。

「天子さんの、開錠した、は返答に悩みますね。ここは拒否で」

「ふむ、前半部分だけでも復唱できない？」

「前半部分ですか…、【扉は施錠されていた】」

「ん、OK」

ふむ、とこのやり取りに思案顔を浮かべる者もいるが、この時点では特に何も思いつかないのか自分の推理を進める事としたようだ。

『犯人は裏口から入って盗んだ』

「犯人は裏口から入っていない」

『普通に正面から本を盗んでいった』

『犯人は普通に店に入って本を盗んだ』

「意味被っているわね、二人のやつ」

文とチルノの青に霊夢が突っ込む、確かに細部が違うだけで大体同じような推理に見える。

「犯人は正面から入っていない」 「犯人は普通に店に入っていない」

「普通にはか……。前も駄目、後ろも駄目……。となると」

つまり正面や裏口からではない、普通でないやり方で室内に侵入したということであろうか。

「復唱要求です。「犯人は、命蓮さんでも香霖さんでもない第三者である」

「犯人はおれら二人ではなく第三者」

「ふむ、『穴などから手をつ突っ込んで盗った』というのはい？」

「穴から手を突っ込んではいない」

「ま、そんなもんでしょうね」

そう単純でもないか、と霊夢は肩をすくめる。それならそれで別に推理を出すようだ。

「復唱要求、「部屋とは一般的なそのことである」手提げ金庫とかじゃないわよね？」

「部屋は一般的な部屋である」

「泥棒は窓から部屋に侵入した」

「泥棒は窓から入って盗んだ、カギはかかっていた。施錠もされていた」

「窓から入った、でも施錠されていた、と」

「即バレると思ったけど、思いのほかみんな引つかかってくれていますね」

その言葉に皆は少しばかり考え込む、一体何に引つかかっているのだろうか。それから抜け出さない限りどうやっても真相には辿り着かないだろう。

「復唱要求、「入ったというのは全身を入れたということを目指す」

「全身入った」

「ほーう」

先ほどの穴に手を、ではないが少なくとも隙間に手を突っ込んだというような物ではないということか。となると大分限られてきそうな気もするのだが。

「犯人は一般的な人間の体格、体の大きさである」

「復唱要求、「このゲームに出てくる犯人は人間である」

「【犯人は人間で小柄な少女】」

「小柄？ 小柄ねえ、魔理沙だったりするのかしら」

「香霖堂、本、小柄な少女、ええ魔理沙ですよ」

道理で、魔理沙がいなのは都合が良いというわけである。

「『窓のカギは外から解錠できて、それで中に入って盗んだ』」

「まあ通らないと思うけれど、「ゲーム中、窓の鍵は一度も解錠されていない」

「解錠と言われると少し悩むんですよね…、「ゲーム中、窓のカギは一度も解錠されてい

ない」

「なのに入ったと」

どうにも色々引つかかる話だ、このあたりに見落としていることがあるのであろうか。

「【窓に隙間はなかった】」

「隙間、それも少々返答に悩みますね」

「へえ？」

「言い方次第でしょうか、【窓に隙間はなかった】」

「ふむ、木枠だけでガラスを嵌めていなかったとかとか思ったのだけれど、隙間はないのね」

窓は窓、そう思った方がいいのであろうか。

「開錠せずに窓を通り抜けることは可能である」

「開錠せずに窓を通り抜けることは可能」

などと思っていると命蓮から爆弾発言が飛び出した。

「えっ」

「ん!？」

「入れるんですか!？」

大妖精が叫ぶ、あまりにも予想外であったのだろう。しかしこうなると鍵に関して考えるだけ無駄となってしまう。どういふことなのであろうか。

「可能ならそこからはいいったでいいよな」

「その方法を楽しみましょうって話だからね」

天子のその呟きに霊夢が突っ込む、そこを言ってしまうと屁理屈推理合戦は途端に退屈になってしまうからだ。以前文と紫の屁理屈で部屋の本体に辿り着かず、魔女がリザインした物があつたと思うが、あれもおなじである。確かにそれで終わってしまいますが、それでは何も面白くない、それをどうやったのかを推理するのが醍醐味なのだ。

「具体的にどう可能だったか当ててみる、そういうことね？」

「そんな感じ」

「ええ、どうやって入って持ち去ったか…です」

さて、しかしこれはまた、一体全体どのようなトリックなのであろうか。探偵達はいっそう思考を重ねるのであった。

第六盤、解答編及び第七盤、出題編

ふむ、と霊夢が口を開く。

「『実は鍵穴が大きかった』、具体的には人間大」

「【鍵穴は普通の大きさ】」

「ふうん、こうなると窓に集中した方が良いのかしらね」

「窓から侵入したと明言してはいますからね」

「復唱要求よ、「侵入方法と脱出方法は同じである」」

「【侵入方法、脱出方法は同じ】」

「実はいいところまでいっていたんですが、序盤にチャンス潰れているんですよ」

「序盤、ね」

さて、何があっただろうか。しばし霊夢は黙って自分達が何を言ってきたのか、記憶を手繰り始める。そして一つの可能性を思いついた。

「復唱要求、「ゲーム終了時、窓は原形を保っている」」

「霊夢さん、お見事」

「ほう?」

「ここは拒否で…いや、応えるべきですかね。【ゲーム終了時、窓は原形をとどめていな
らう】」

「どうやら、何か糸口をつかめたようだ。」

「あれ? 窓は破壊されていないって赤で言われてなかったつけ?」

「私が止めちゃって、結局答えが返ってきてないわ」

天子の疑問に霊夢は苦々しげな表情でそう答える。そう、あの時霊夢がついそのこと
について自分の解釈を話したために結局お流れになっちゃってしまっていたのである。

「止めてなきや、進んでいたんじゃないですか…」

「ごめんなさい、ミスったわ」

文の残念そうな言葉に霊夢は謝罪をする。こればかりは言い訳のしようもない。

「まあ切り替えていきましよう」

と、文の一言に全員が頭を切り替えて考え始める。

「復唱要求、窓は一般的な窓である」

「【窓は一般的な窓】」

「ならこういうのは? 【犯人は窓のガラスを溶かして侵入した】」

「溶かす…、その発想はありませんでした」

「ガラスは溶けていない」

「違うか」

『犯人は窓を外した』

「窓は外してはいない」

「復唱要求、「ゲーム中、窓は作り直されていない」

「ゲーム中、窓は作り直されていない」

霊夢とチルノが交互に青を出すものはいまいち切り返せない。と、ここで天子が口を開く。

「ならあの白黒らしく素直に。『犯人は窓をぶち破って侵入した』」

「天子さん、ドンピシャです」

命蓮の言葉に、皆、お？ という表情を浮かべる。皆の視線の集まる中命蓮はパチパチと天子に向かって拍手をする。

「天子さん、リザインします」

「よしー」

見事正解を当てて喜ぶ天子をひとしきり称えた後、少しばかりの反省会の流れとなる。

「それにしても、分かってしまうと素直すぎる真相だったわね」

「難しく考えすぎましたねえ」

「余計なことをしたわ、まったく」

「最初にもっと突っ込めば良かったですね」

「人が多いと混乱しちゃうね」

「多人数戦の思わぬ混乱つてところね」

そう各々が感想を述べた後、未だ反省中の霊夢が頭をかきながら立ち上がる。

「とりあえず私は休憩させてもらうわ、どうやら来たみたいだしね」

その言葉に皆が外を見てみると、そこにはこちらに向かつて飛んでいる白黒魔女の姿があったのであった。

「悪い、待たせたな」

「いえ、命蓮さんの謎で時間は潰せましたので」

「ありや、それは私も聞きたかったな。ま、いいけどさ」

と、霊夢の代わりに座った魔理沙はパンと軽く手を叩く。

「さて、本題もそこそこにして、私の謎を始めるとするか」

「今度こそ活躍しますよ！」

「アタイだって！」

「今度こそ当ててみせますよ」

「やるだけやってみます」

「今度も頑張ってみるわ」

「ま、頑張ってくれよ」

探偵たちの決意をうんうんと聞いた魔理沙は、さてと不敵な笑みを浮かべる。

「では改めて、物語を始めようか」

そして、魔理沙の魔法が始まった。

さて、今回お話しする物語は何と密室殺人だ。ミステリーにおいては花形って奴だろ
うぜ。

命蓮寺、は知っているよな？　そこで事件が起こってしまったんだ。

「…返事が無いわね、どうしたのかしら？」

「一体どうしたんだい、聖？　そこはご主人の部屋だけだよ」

星の部屋の前で困った様子の聖にナズーリンは声をかけた、それに対して聖の返答は
「うだ。」

「ああ、ナズーリン。実は星にちょっと用があつたんですが返事がなくて、鍵がかかつているから部屋にはいると思うのですが」

「え、そうなのかい？　ちよつと、ご主人？」

それを聞いたナズーリンが声をかけながら扉を叩くけれどまったく返答は無い、内からかける鍵である以上部屋の中にいるはずなのにな。そんなことを繰り返していると、少しずつだが二人の心の中に良くない想像が浮かんでくる。

「まさか、とは思うのだけど」

「…破りましょう、下がっていでてください」

決意した聖が星の部屋の扉を破る、するとそこにあつたのは。

「星?!」

「ご主人!?!」

首を吊つて死亡している、寅丸星の姿があつたのさ。

それじゃ、赤を言っておくぜ。

【星はロープで首を吊つた状態で死亡していた】

【星の死因は窒息によるものである】

【星の部屋は確かに密室であつた】

さあ、あんまり難しい問題じゃあないが、魔女として少しは楽しませてもらうぜ。

最初に口を開くのは文だ。

「では手始めに、『星は自殺だった』」

「【星は自殺じゃない】」

「星だとうっかりで死んだかもしれないからねー」

「うっかり寅か」

と、チルノのからかいに魔理沙も苦笑する、まあ流石にそこまでドジではないだろう。
…ないはずだ。

「復唱要求、「星は誰かに殺された」」

「復唱要求、「星は他殺である」」

「あ」

「おっと、被っていますね」

「とりあえずこれを聞かないとですねー」

「そうだな、【星は殺された】」

仲良く被った大妖精と文の復唱要求に、基本だなど魔理沙もすぐに赤を使う。

「犯人の凶器はロープのみ」

「ほー、そいつはどうしようかな。…よし、拒否で」

「ふむ…」

「そうねえ…、「星は自室で死亡した」

「自室、ねえ。ぶっちゃけどっちでもいいんだが」

ふむ、と少しばかり考えた後魔理沙は口を開く。

「星は自室で死亡した」【章の体は死後移動されていない】

「復唱要求、「窓は閉じていた」

「窓は確かに閉じていた」いやあ、やっぱり魔女は楽しいねえ」

赤を切りながらそう魔理沙は笑う、探偵とはまた違った楽しさが魔女にはあるものである。

「星の窒息は首吊りによるものである」

「星の部屋には星以外の人物、犯人になりえる存在、は存在していなかった」

「部屋は誰も出入りできない完全な密室である」

「ほーう」

三連続の復唱要求に魔理沙は楽しげな声を漏らす。

「大妖精のそれと天子のそれは、まあ拒否しておこうか。私は意外と決め付けない女だからな。文のそれは受けてもいいんだが、そうだな……」

意味深に誤魔化した後、魔理沙はちよつと考えて口を開く、

「扉が破られるまで、部屋は密室だった」

「ロープは部屋にぶら下がっていた」

「ロープは部屋の中にあつた」

「なら青をぶつけてみましょうか。『犯人は星を絞殺した後、見室が破られるまで部屋にずっと潜んでいた』」

「青で言われちゃあしようがないな。『扉が破られた時、犯人は部屋の中にいない』付け加えておくが開いた瞬間に出た、とかはないからな?」

「星は二人が部屋に入るまでは生きていた」

『扉にはロープが引つ掛けられてあり、開けると首が絞まるようになっていた』

「扉が破られる前に星は死亡している」
「扉に仕掛けはない」

「ふむ、破られますか」

「速攻切られたわね、「星の死因は絞殺である」」

「んー、天子のそれは拒否しておこうか」

「あら、こっちは拒否るのね」

「でもロープで首を吊っているんだぜ？」

「そんなの違う殺し方をした後引っ掛ければいいことだよ」

「ま、それもそうかもな」

チルノの突っ込みに魔理沙はそう言っただけで肩をすくめる、明確に否定する気はないようだ。

「ロープに仕掛けはない」

「他に外傷は無かった」

「ロープに仕掛けはない」【他に外傷は…あった】

とここで魔理沙が放ったなげやら切れ味が僅かに悪い赤に、当然ながら皆の意識は向く。

「なるほど、刺されたり殴られたりしていると…」

「そりゃあまあ？ 首が絞まったらロープのあたりを引っかくかもな？ それなら外傷になるわな」

「赤字じゃない魔女の言葉なんて信用できないですー！」

大妖精の突っ込みにうんうんと魔理沙は頷く。

「それが正しいわな、なら頑張って赤を引き出してみるんだな」

確かに、その通りである。青でもって赤を稼ぎ、それをもって更なる青を紡ぐ。それ

がこのゲームの醍醐味なのだから。

第七盤、出題編及び第八盤、出題解答編

「星は他の凶器で殺された後、首を吊られた」

「【ロープ以外の凶器は使用されていない】」

「【その外傷は殺される際についたものである】」

「際、かあ、まあそうかもな。【外傷は死亡する際についたもの】」

「ダメ押ししておこうかしら、【外傷は死亡後についたものではない】」

「ふむ、死亡後、か。これで遊ぶのも止めにするか。【傷は星がつけたものである】」

「また回りくどい切り方をしてきたわね」

「まあ答えてみてもいいんだがなあ」

とは言うものの、あまり断言するつもりはないらしい。

「ちよつと質問なんだけど、ロープってどんな感じなの？」

「ふむ？ というと？」

「天井辺りに結んであったかそうじゃなかったってことだよ」

「なるほどな、なら【ロープは天井から吊り下げられていた】」

「外傷は死亡の直接的原因である」、復唱要求です」

「まあ十分か、【外傷は星の死亡に一切関与していない】外傷に関しては私が遊んでいただけさ、本当に苦しくて引っかかりただけ」

「ああ、なるほど…」

妙な方向に話が進んだからちよつとばかり茶目つ気で遊んだけである。

「星の身体は確かに浮いている」

「【星の身体は確かに浮いている、踏み台等はない】」

「…」

「？ チルノはどうした？」

「ちよつと思いついたんだ、『星は何かを直して命綱をつけていた。それで落下して縄が首に引っかかった』星ってドジだし…」

「死因、うっかり」

…そこまで、妖精に言われるほどに星はドジっ子なのだろうか？

「おー、その発想はなかったな。【ロープは命綱ではない】」

「【星が浮いているのはロープで吊り下げられているからである】一応ね」

「【星はロープのみで身体を浮かせている】【星は殺意を持って殺された】【しかもかなりの殺意である】」

ということとは若干引つかかる点はあるものの、星は確実に何者かによつて殺されたと断言していいのだろうか。

『部屋の外から星の首にロープをかけて殺した』

「【ロープは部屋の外に出ていない】

とここで、魔理沙がちよつと待てと手を上げる。

「肝心なことをいい忘れたような気がする、何だっけ？」

一体何だと皆が見ている中、そうだったと魔理沙はボンと手を叩く。

「ああ、そうだった。【星は密室内で死亡した】【章の死亡時から発見時まで、部屋は密室であつた】

要は、これが密室殺人だと断言するのを忘れていたということか。

「さて、これでどうやって犯人は逃げたのかな？」

「そんなの簡単だよ、生きているときに部屋を出て施錠すればいいんだよ」

「ふんふん、確かにそうだな」

確かにそれしかないのだが、そうやって同意されると邪推もしたくなつてくるものだ。

「【星が死亡した時、犯人も同じ室内にいた】

「おつと良い質問だ、【星が死亡した瞬間、犯人は部屋の外に居た】

「首を吊られてから、死ぬまでにタイムラグはなかった」

『犯人は星の首を吊ってから死ぬまでの間に部屋を出て、外から鍵をかけて密室を作った』

「うーん？ どうしたものかな…」

ここで大妖精の復唱要求と文の青に、魔理沙はしばし考え込む。

「この赤は慎重にやらないとマズいな」

「ふむ」

「…よし。〔星は一般的な人間である〕〔一般的な人間の首に全体重がかかった場合、即死する〕ちよつと微妙だが、まあこれで」

「ふむ？ 苦しくてもがいたなら即死はしていないはずですが」

「おおつと？ そいつもそうだな、やつぱり変な遊びはするもんじゃないな。ただまあ、ロジックエラーは起きていないはずだ」

回りくどい魔理沙の赤に、先ほどまでで分かった情報でもって文は突っ込む。そのことに対して魔理沙は若干驚いたような表情を浮かべるものの、本人の言うとおりロジックエラーを起こしたかのような焦りの表情は浮かべていない。

『犯人は星を気絶させたあと、首に縄をかけて踏み台として大きな氷を置いた。それで氷が溶ける前に外に出た』

「おお、大妖精のトリックもいいな」

「それだと犯人はアタイに…」

「ごめんね？ チルノちゃんが悪いってわけじゃないんだよ…？ ただ思いついたから

一応…」

「ま、【氷は使われていない】から安心しろ。ついでに【その他固形から液体になる物質は使われていない】」

「【星の足元には何もなかった】復唱要求です」

「【星の足元に足場となりえるものは存在しない】」

「では【部屋の中に段差はない】」

「【部屋に段差はない】」

「【部屋は一つである】」

「【部屋は一つ】」

「…ねえ魔理沙、星は間違いなくロープで殺されているんだよね？」

「んー？」

チルノの質問に、魔理沙はニヤニヤと笑って答えない。

「確か拒否していたと思うよ」

「あー、そうか…」

「私はロープ以外の凶器は使われていない、とは言った。でもロープで殺したとは言っていないぜ？」

何とも、悩まされる魔女の発言である。

「まあそろそろヒントを出していくか。【ゲーム開始時を犯人が部屋を出た瞬間とする】
【ゲーム開始時から扉が破られるまで、かなりの時間が経っている】
【部屋は少々特異なものであった】」

さて、と改まって出されたヒントに皆は考え込む。

『犯人は眠っている星の首に縄をかけて天井に結び、梁に寝かせた』

『犯人は星の首にロープを巻きつけ、高いところから突き落とされた』

「【犯人が外に出た時、星は確かに吊り下がっていた】
【犯人は星を突き落としてなどいな
い】」

「んー、潰されちゃった」

「あれ？ 【犯人が外に出た時、星は確かに吊り下がっていた】なら 【星が死亡した瞬間、
犯人は部屋の外に居た】はおかしくありませんか？」

「おっと、良いところに気づいたな、文」

文の疑問に魔理沙はうんうんと頷く。

「もう言っちゃうか、【ロープは一本ではない】
【星は首、そして胴体をロープで吊るされ

ていた」首は吊っているさ、ただそこだけで吊っているとは言った覚えがないな」

「確かにそうだね」

「だがまあ、これはこれで変だよな？ それならどうして星は死んだんだ？ 【首のロー

プは星の呼吸の障害はするが、それだけで死亡するほどではない】」

「犯人は胴体のロープに切れ目を入れておき、部屋を出た」

「【ロープに仕掛けはない】【ロープに仕掛けなどは存在しない】」

「『犯人は、ハンモックで寝ている星の首に、天井から下がったロープをくくりつけてか

ら部屋を出た。星が起きてハンモックから降りた瞬間、首が締まって死亡した』」

「【首にロープが巻かれた段階で星は直立の状態だった】」

「むう」

「言ってしまおうか。【ロープはあくまで犯人が星を苦しめる為に行ったものである】

【ロープだけでは星は死なない】」

「むー？」

「ま、そういうことだ」

「かなりの殺意がある、がこの辺で関係するのですか」

「そういうこと、殺意の表れさ」

大妖精の言葉に魔理沙は我が意を得たりと同意する。

「素手は凶器に入らない」復唱要求です」

「【別に犯人は手で星の首を絞めたわけじゃない】」

「では、『部屋の中を犯人が真空にして星を殺した』」

「つと…」

文の青に、魔理沙は押し黙った後、パチンと指を鳴らす。

「それは正解とみなさせてもらうぜ、リザインだ」

おー、とその言葉に皆は正解を導いた文に拍手を送る。

「そう、絞殺じゃないのさ。あくまで窒息死だ。ただ真空とかではなく、ただ単純に気密性の高い部屋っていう設定だ。外と空気が混ざらずどんどんと酸素が消費されていく。首がある程度絞めた状態なら意外と早く死んじまったかもな」

「なるほど」

「しまった…、絞殺を切らなかつたらから絞殺なんだと思い込んでいたわ。迂闊だったわね」

「ま、それを狙っていたからな」

「ロープは逃げられないようにする為の物ですか」

「そうだな、無用な苦痛を与え自由を奪う、そういう意図だったのさ」

「なるほど、納得です」

「これが殺意云々、そして特異な部屋の理由さ」

「完全な密室、つて最初に言い切られちゃって突っ込むだけ無駄と思っちゃったわね」

「完全な密室、だからな。そりゃ空気も通らんわ」

「完全な密室＝密閉空間つてことですか」

「そうそう」

そんな風に少しばかり感想戦を行った後、その日は仕舞いとなる。

：はずだったのだが、まだまだ物足りない探偵たちのために、魔理沙に代わって霊夢が謎を提出することになるのであつた。

「さて、前置き無しでいくわ」

とある部屋、そこに村紗は閉じ込められていたわ。

ドアもなく、食料もなくただただ閉じ込められていたの。

あるのは手に届かないほどの高さにある天窓だけ。

そんな彼女だったけれど、ある日魔法に目覚めたわ。

そしてその力を使って天窓から脱出したのよ。

そんなところで、赤いくわ。

【部屋と外部をつないでいるのは天窓のみ】

【天窓は地上五メートルの位置にあった】

【室内に足場になりそうなものは無い】

【村紗は天窓から部屋を出た】

以上、来なさいな。

「足場になりそうなものはない……。つまり、「部屋には何もなかった」んだね」

「まあないと言つてもいいかもね」

ただし無いとは断言しない。

『部屋が無重力下にあり、それによって部屋から脱出した』

『壁にくぼみがあった』

『部屋の床は天窓に普通に届く高さにあった』

【部屋は重力下に存在する】【壁にくぼみの類はない】【天窓は部屋の床から五メートル

の高さにある」どうかしら？」

続きさまの青に霊夢はそう笑って返す、まだまだ余裕の表情だ。

「部屋は一般的な、特殊な要素のない部屋である」復唱要求です」

「ふむ、拒否しておきましようか」

『部屋自体が球体みたいに丸かった』

『部屋は球体であつたりしない』

『天井からロープやはしごがかかっている』

『ロープやはしごの類はない』

『部屋の壁を駆け上がって天窓まで到達した』要は、壁が駆け上がれるくらいの傾斜だった」

『部屋の壁は垂直』「人力で昇るのは不可能』

『回転する部屋だった』

『部屋の回転するような仕掛けはない』

『部屋がプールだった』

『部屋はプールではない』

『部屋の中に生き物がいて、それを踏み台に使った』

「数を撃つてみるわ。纏めて青二つ、『床がトランポリンになっていた』『ホッピングに類

する物で高くジャンプして天窓に到達した』

「何か細々した推理が多いから一気に切りましようか」

ポンポンポンと、続けざまに放たれる青に霊夢は面倒になってきたようだ、ここで全ての前提を打ち崩すような重要な赤を放つ。

「ゲーム開始時点で村紗は死亡している」

「えっ」

まさしく、探偵たち全員がそのような表情を浮かべてしまう。

「村紗以外の登場人物は登場しない」

「考えていたのが吹き飛んだ……」

「てことは何？ 死体が天窓から出ていったって？」

「そうなるわね」

そうなるわね、じゃあない。そのようなことを思いつつ、探偵達は推理を改めて考え直す。

「部屋の中には何もなし」復唱要求です」

「村紗の死体はあるわねえ、まあいいわ。【ゲーム開始時点で、部屋の中に村紗の遺体以外は存在しない】【ゲーム終了時点で、部屋の中に物体は存在しない】」

「復唱要求です、死体は移動した」

「村紗の遺体は確かに部屋の中から移動した」

「『部屋に爆弾が仕掛けてあって、その爆発の反動で外に出た』」

「【部屋に爆弾の類は仕掛けられていない】」

「『部屋自体が移動して、それで天窓から村紗が出た』」

「【部屋に仕掛けはない】」

「復唱要求よ、「村紗の死体は液体に浮く」」

「先んじて切るわ、【部屋の水位が上がって外に出たわけではない】」

「むう、考えていたことを読まれて赤で切られた」

などと、少しばかり悔しげな天子に霊夢はほくそ笑んでみたり。まあ続けてくる青や復唱要求に対応しなければならぬ魔女のちよつとした茶目つ気だ。

と、ここでチルノはボソリと呟く。

「発想を逆転してみようかな…」

「そうしなさい」

そう軽く流したものの、内心霊夢は思った。これはチルノが正解を導くか、と。

「ややくそで、『壁が倒れてきて、ちょうど天窓の位置に遺体があった』」

「【壁は壊れていない】」

「『村紗がいたのは天井で、床の天窓から落ちた』」

「う、ん？」

先ほどの眩きから思いついたのか、チルノが切った青に霊夢は若干動揺してしまう。

「天井にあるから天窓って言うと思うんだけど。一般的な日本語の定義は流石に崩してないわよね？」 固有名詞ならともかく」

「別に定義は崩していないわよ。それはそれとして、うーん……」

少しばかり悩んだ後、うんと軽く頷いて霊夢は赤を切る。

「『村紗を天井に固定させる仕掛けなどない』……うん、これで頼むわ」

「『天井が落ちてきて、村紗の身体が天窓から出た』」

「『天井は壊れていない』ついでに『部屋は壊れてなどいない』」

どうにも繋がっていないのか？ そう感じた霊夢はボソリとヒントを呟く。

「正直、チルノの発想はすごくいいわ」

「あー……、『部屋は船の中で、船が転覆した』」

「あー！」

「つつふ……」

そしてそのすぐ後に放たれたチルノの青に、霊夢は満足げに笑う。

「さすがね、チルノ」

そう言つて霊夢は、パチパチとチルノに拍手を送る。

「リザインを宣言するわ、おめでとう。本当に良い発想が出来るわね」

「さすがチルノちゃん！」

「うん、これは脱帽。チルノお見事」

「一応設定上は小さな船のつもりよ、嵐が何かで転覆してその勢いで外に投げ出された
と。部屋に仕掛けはないといったけれど回転しないとは言つてないわ」

口々にチルノを皆が褒めた後、霊夢はぎつくりと今回の舞台について話す。その後は
まあそのことだったり他の事だったりを話し、適当に解散の流れとなるのであった。

第九盤、出題編

——屁理屈推理を、始めましょうか？

「あん？」

「久々に聞いたわね、その言葉」

「だな。……で、自分から言ってきたことは、紫が魔女役ってことでいいのか？」

ええ、それは勿論。それで、二人は探偵役になつてくれるのかしら？

「ま、暇つぶしにはなるわね」

「少しぐらいなら付き合つてやるぜ」

素直にありがとうと言つておきましようかね。

……ごほん。では、始めましょう。魔女が織り成す幻想を、見事打ち破つてみなさい、二人の探偵さん。

「いいから」

はいはい。まったく、無粋なんだから……。

——ある部屋に萃香が閉じ込められている。いえ、いた、と言わなければならない。何故なら、既に彼女は生きていないのだから。

横たわる萃香の遺体と、その胸に突き立っている一本のナイフ。それ以外には何も、その部屋の中にはなく、ドアの鍵もしつかりと閉まっている。

そう、彼女は密室にして死亡した。誰も入れぬ、絶対の密室の中で。

……幻想はこんなところでしょうか。

「また身近な奴を被害者にするのね」

「次があったらたぶん幽々子あたりなんだろうな」

五月蠅いわね。別に縁遠い相手でもいいけれど、パツと思いきや浮かんだのだから仕方がないじゃない。

「はいはい。じゃ、早速頼むわ」

……まったく。では、赤を述べさせてもらおうわね。

【萃香は即死】

【凶器はナイフ】

【ゲーム開始時から終了時まで、ドアは開けられていない】

「ゲーム終了時、部屋には生きている人物は存在しない」

……と、こんなところでしょうか。難易度はそれほど高くないはずだから、頑張つて頂戴ね。久々の屁理屈推理、勘は鈍っていないと信じているわよ。

「そんなもの、やれば分かるわ。とりあえず復唱要求、「萃香は他殺」

【萃香は他殺】当然ね。

「んじゃ、私も復唱要求だ。「ゲームの登場人物は、萃香と、萃香を殺した犯人のみ」

まあ、認めても構わないわね。「ゲームの登場人物は、萃香と萃香を殺した犯人のみ」

おまけで言っておきましょうか。「このゲームにおいて、萃香と犯人以外の生物は一切存在しない」

「ん、他者を考えなくてすむのはありがたいわね。じゃあそろそろ密室に触れましょうか。復唱要求、「部屋の出入り口はドアのみ」

受けるわ。【部屋の出入り口はドアのみ】

「窓の類はない、でいいんだな?」

構わないわ。部屋にあるのはドアだけよ。

「ふうん。じゃ、そろそろ青でもいってみるか。『犯人は萃香を刺し、その後何らかの理由で室内にて死亡した』単に部屋の中にとずっと居たつてことだな」

そんなに簡単じゃないわよ。「ゲーム終了時、犯人は生存している」

「ま、そりやそうか」

それはね。

「ふーむ……。じゃ、『萃香は犯人の仕掛けたトラップにかかり、死亡した』例えば足をすくつて、こけた先にナイフが固定されていてグサリ、とかな」

「犯人は自らの手で萃香を刺した」トラップじゃないわ。

「まだまだ。『犯人は自分の手を切り落とし、ナイフを握った状態の手をトラップに組み込んでいた』これなら自分の手で刺しているぜ」

「ゲーム終了時、犯人の肉体に損傷はない」ちゃんと五体満足よ。

「むむ、違ったか。ドアが開かれていないんだからトラップ系かと思っただがな」

どうかしら、ね。

「ならば私がいくわ。『実はゲーム開始時点で萃香は死亡しており、部屋の密室化もその際に行われた。その後、ゲームが始まった』これならゲーム中にドアが開いていなくても関係ないわ」

中々いい答えね。でも、「萃香はゲーム中に死亡した」のよね。

「ん……。ドアが開いてないというのが地味に難しいわね」

「だな。いつもなら鍵が閉まっているとかなんだが、開閉していないって断言されるときついな。……本当にドア以外に出入り可能な場所はないんだな？」

ないと言ったじゃないの。【室内に、ドア以外に外部と接触可能な場所はない】わ。
「あ、くそ。接触ときたか。出入りできなくても腕さえ通ればいけるんだが」

それこそ、そんな手は通さないわよ。

「上手いことを言ったつもり？ ……どうしましょうかね」

案外難しい物かしら？ ……ふむ、ちよつと意外ね。

「認めたくないけれど、勘が鈍っていたりするのかもね」

「……あー、一応聞くが紫、実は萃香と犯人が二重人格だったりしないよな？」

はい？

「……犯人の人格が自分を刺して、それで萃香の肉体が死んでしまったから他殺という
ハナッ。」

「いや、うん。一応な」

そもそも、【ゲーム終了時、犯人は生存している】と言ったじゃないの。

「ああ……。そうだったな」

まだ呆ける年齢じゃないでしょう？

「ああ、お前と違ってな」

失礼ね。私にそんなことを言っている暇があつたら素直にメモを取りなさいな。

「反論の余地がねえ……」

「ともかく、真面目に考えるわよ。アンタも敗北を認めてすごすごと真相を聞く、なんて嫌でしょう?」

「そりや当然だぜ」

ふふふ。頑張りなさいな、二人とも。

「じゃ、頑張るついでに一つ確かめておくか。復唱要求、「ゲーム開始時から終了時まで、ドアは確かに閉まっている」

……? いいけれど、「ゲーム開始時から終了時まで、ドアは確かに閉まっている」既
に私は赤で言っておいたわよね?

「ん、いやな、ドアが開けられていない、だからドアが開きつばなしならいいかなって」

「……あー、開いている状態からさらに開けるのは不可能とか、そんな感じ?」

「そうそう。そんな感じ」

ああ、成る程ね。確かに、それなら通すかもしれないわ。あくまで私の場合は、
れど。

「一口に屁理屈って言っても、どこまでそれを認めるかは魔女次第だしな」

「ちなみに今回の謎はどうなの?」

まあ、それなりに屁理屈だと思うわよ。……そうね、今の魔理沙の考えとそれなりに
近いかもしれないわ。

「へえ？」

「言っておくもんだな。過信は出来ないが、一応覚えてはおくか」

「そうね。頭の片隅に置いておくくらいはしておきましょうか。……さて、じゃあお茶のおかわりでもいれてきましょうか。頭を切り替えないとね」

「ああ、私も頼むぜ」

私も、お願いするわ。

「言われなくても分かっているわよ。紫、ついでにお茶菓子でも持ってきてなさいよ」

はいはい、少し待っていなさい。

「……さーて、考えるか、ね」

【現時点で、解決に必要な赤は既に出揃っている】

第九盤、解答編

——さて、そろそろ再開しましょうか。

「だな」

「そうね」

一応、ここでもこれまで出した赤をまとめておくわね。

【萃香は即死】

【凶器はナイフ】

【ゲーム開始時から終了時まで、ドアは開けられていない】

【ゲーム終了時、部屋には生きている人物は存在しない】・

【萃香は他殺】

【ゲームの登場人物は、萃香と萃香を殺した犯人のみ】

【このゲームにおいて、萃香と犯人以外の生物は一切存在しない】

【部屋の出入り口はドアのみ】

【ゲーム終了時、犯人は生存している】

【犯人は自らの手で萃香を刺した】

【ゲーム終了時、犯人の肉体に損傷はない】

【萃香はゲーム中に死亡した】

【室内に、ドア以外に外部と接触可能な場所はない】

【ゲーム開始時から終了時まで、ドアは確かに閉まっている】

はい、じゃあ推理を始めてちょうだい。

「……んあ？」

どうしたの？

「何よ、急に。馬鹿みたいな声を出して」

「馬鹿みたいは余計だろ。じゃなくて、紫、ちよつと確認したいんだが」

何かしら？

「萃香が死んだのは部屋の中だよな？」

え？ ……ああ、成る程。そう言えば赤で言っていなかったわね。【萃香は部屋の中で死亡した】わ。宣言しておくのを忘れていたわ。

「ああ、そつか。普通に部屋で死んだことを前提として話していたわ。注意力が落ちたかしら、やあねえ」

「いやまあ、どつちかと言うと慣れじゃないか？ 紫ってそういう引つ掛けはあんまりやらないから」

「そうね。私が密室を出すときは基本的にはそこ以外をだすことはないものね。……しかし、そうね。そういうのもありね。」

「やべえ、余計な知恵をつけさせた」

「そのぐらいのほうがいいと思うけれど。屁理屈推理合戦でこういう思考をするのはあの意味当然のことだし」

「と言うより、まるで私が子供か何かのような言い方はやめてくださる？ 余計な知恵って。」

「ああ、悪い悪い」

「まったく……。」

「ま、それはそれとして、よ。推理を始める前に、状況を整理しておきましょうか」

「だな。どういう方向で推理をしていくか、それを決めてから青を考えていこうぜ」

「そうね。——まず、舞台は密室。被害者の死因は刺殺」

「それも犯人が直接殺していて、トラップの類ではないらしい。で、肝心の密室はと言う

と」

「出入り口はドアしかなく、そのドアはずっと閉まっていた。……こうなると本気で難しいわね」

うーん、そんなに難しくしたつもりはなかったのだけれど……。

「となるとあれか？ あることに気付けば、ってタイプか？」

ええ、そのつもりよ。

「何かを見落としているってわけね、一体何かしら」

「ま、とりあえず推理を続けるか。前提として、私達は何を考えるべきだ？」

「おそらくは、密室の破り方でしょうね。たぶんだけど、殺し方からでは解決しないと思うわ」

「同意だな。なら、続いては、どうやって密室を破るか、ってことになる」

「出入り可能な場所がドアしかない以上、考えるべきはドアの突破方法かしら？」

「いや、一応確認しておいた方がいいな。紫、青を使うぜ。『部屋の壁を破壊して、犯人は室内に入った』」

【ゲーム開始から終了時まで、部屋の天井、床、壁に損傷はない】そこじゃないわ。

「駄目か。となると、やっぱりドアだな」

「ドアがずっと閉まっていた、というのが問題なのよね。これは、鍵が閉まっていた、と

「いう意味でいいの？」

別に、そのままの意味よ。ゲーム中、ドアは閉まったままだった、というだけ。

「鍵がかかっていたから閉まっていた、じゃないのか？」

……そうね、言っておきましょうか。【このゲームにおいて、ドアの鍵が開いていたかどうかは関係がない】

「は？」

「どういう意味だ？」

つまり、ドアは閉まっていたけれど、ドアの鍵が閉まっていたかどうかはどうでもいいって事よ。重要なのは、ドアが閉まっていた、ということだけ。

「えーつと……、鍵は開いていたけどドアは閉まっていた、とかそういうことか？」

その可能性もあるってだけね。

「……要は、ドアが閉まっていた理由はいつでもいいって事ね。鍵が開いていようといなかろうと、密室だったことには変わらない。このゲームにおける遊びの部分ね」

そういうこと。別にずっと閉まっていたことにしてもいいのだけど、どっちでもいいからこういう風に赤を切っただけよ。

「それに意味があるのか？」

「まあ、なくもないわね。少なくとも、鍵を使ったトリックというわけではないのは分

かったし。ま、閉まったままのドアをどうやって鍵で開けるのか、って話だけど」

正直意味はないわね。分かり難いなら、今から鍵は閉まっていたに赤を変えましょうか？

「いや、別にそのままでもいいぜ。関係ないなら別にいい。……しっかし、どうするかな。どうやればドアを閉めたまま中に入れるのかね」

「……………ああ」

「何か思いついたか？」

「一つね。紫、犯人は室内に全身を入れたの？」

……………つまり？ せつかくだから青で頼むわ。

「そうね…………、『ドアにはのぞき窓、あるいは手紙の入れ口のようなものを取り付けられており、犯人はそこから腕を入れ萃香を刺した』ってところかしら」

「ドアは一枚板で、物を通すことの出来るような穴は存在しないタイプだった」と言っておきましょう。

「——タイプ？ ちょっと回りくどい言い方ね」

……………そうかしら？

「素直に言うなら、ドアに手を通せる穴は空いていない、で済むじゃないの。それなのに、アンタは妙に回りくどく言った。さっきの鍵の件とはまた違うタイプの切り方、そ

「ここには理由があるんじゃないの？」

「——私も一つ思い出したことがある。さつき、お前は壁を壊したという青に対してこう言つたな？ そこじゃない、と」

言つたわね。それが？

「そこじゃないということとは、逆に言えば何処かは壊したつてことになる」

「そして、アンタはドアに身体を通すことについて、妙な切り方をした。——この二つを踏まえると、思いつく推理が一つある」

聞きましようか。

「つまり、こういうことだな。『犯人はドアを、何らかの方法で破壊し、身体が通るだけの穴を開けた！』」

「『おそらくはその際、ドアの枠を残すような穴の開け方をしたのよ。そうすればドアを通りつつも、ドアそのものは閉まったままと言える。さらに、ドア以外に出入り口はないという赤にも違反しない！』これが、私達の青き真実よ！」

「どうだ!!」

……………お見事、リザインを宣言するわ。

「よっしゃあ!! やつたな、霊夢！」

「そうね、久々に頭を使った感じだわ。中々悪くない謎だつたわよ」

ありがとう。しかし流石ね、あの言い回しに気付くなんて。

「ああ、じゃあそこじゃないってのはわざと言ったのか」

ええ、そう言えば気付くと思ったから。もともと、霊夢は別から気付いたようだったけれど。

「アンタがああいう言い回しをするときは、そこが確信をつけているってことだと思っただけよ。しかし成る程、ドアの穴という可能性に気付けばすぐに解決できたわね、これは」

「だな。そうすれば一応、ドアは閉まったままだつてことになるし」

「ドアを一枚板と表現していたのも、壊しやすくする為つてことでしょ？」

そういうことよ。想定では、チェーンソーなりで四角に切った、というもの考えていたから。

「蝶番を切るのとどつちが楽なんだろうな、それ」

「どちらかというと、中に閉じこもっていたのであろう萃香を怖がらせたかったんじゃない？ ドアからチェーンソーが出入りすれば怖いでしょうし」

「ああ、そういう可能性もあるのか」

その辺りは好きに補完して頂戴な。……ふう、久しぶりに魔女をやると疲れるわね。すこし、ゆつくりさせてもらうわ。

「いつでもそうしているでしょう。ま、いいけど」

「私もそうするか。ついでに、久しぶりに謎でも考えることにするぜ」

あら、じゃあ纏ったら言つて頂戴。探偵役に立候補するから。

「私も」

「あんまり期待されても困るんだがなあ……」

ふふつ、期待して待っているわよ、魔理沙。

第十盤、出題解答編

——それじゃ、屁理屈推理を始めろぜ、つてな。

「纏まったの？」

ま、何とかな。あんまり自信があるわけじゃないから、まあお手柔らかに頼む。

「気が向いたらね」

「探偵も魔女も、手心は無粋というものよ」

「その割には甘いけどね、あんた」

「そうかしら？」

私も霊夢に同意しておくぜ。……ま、その辺はいいか。

さて、幻想を始めようか。

——彼女は閉じ込められていた。窓はあるが、自分の体を通せるほど大きいものではない。いや、そもそも、今の彼女は満足身動きも取れないのだ。出口の有無など、現状

では意味がなかった。

どうしたらいいんだ、うなだれる彼女の元に、一人の魔女が現れた。

——助けてあげましょうか？

魔女の言葉に、彼女は一も二もなく頷く。他に選択肢などなかったからだ。

しかし、そんな彼女の懇願に、魔女はニタリと意地の悪い笑みを浮かべる。いつの間にか、魔女の側に水球が浮かんでおり、それはゆつくりと彼女の顔へと近づいている。

どういふつもりだ、と彼女が怯えの混じった声で叫ぶ。それに対し、魔女は言う。

——私はね。

魔女は言った。

——助かると思った人間を、絶望に落とすのが大好きなの。

その言葉に、彼女は絶望した。

……ま、こんなもんでいいか。じゃ、赤いくぜ。

【にとりは部屋の中で死亡した】

【死因は溺死】

【ゲーム終了時、水はにとりの膝までの高さしかなかった】

とりあえずこんなところだな。

「……水がにとりの膝までの高さしかないのに溺死したってことでいい？」

それでいいぜ。

「河童が溺死とは、全くおかしな話ね。まあそれはそれとして、単純に『水は一度二トリの顔のところまで来て、その後水が抜けた』ということじゃ、まさかないわよね？」

まさかな。【水の高さはにとりの膝の高さ以上にはなっていない】

「ふむ」

「その、にとりの膝の高さっていうのは、厳密に何センチって言える高さ？」

まあ言えなくはないけどさ、厳密に決めるのもアレだからしないぞ。高さが知りたいのなら、立ち上がって自分の膝を見ろ。

「そこまではしないわ。まあ、三十センチから五十センチくらい、ってところかしら」「一応聞いておくけれど、その高さは一定よね？」

別ににとりの膝が急に高くなったりしないぞ。膝下を手術で伸ばした、とかはない。

「いえ、そうではなくて。『にとりがうつ伏せの体勢になった』とか、そんな場合の話よ」

そうしたところで膝がにとりの顔より高い位置になるわけでもないけどな。……ああ、でもうつ伏せならまだいけるかもしれないのか。じゃ、言っておくぜ。【ゲーム中、にとりは床に垂直な体勢で縛られていた】【ゲーム中、にとりは身動きが取れない状態だった】

「垂直……？」

立った状態で縛られているって感じだ。分かるよな？

「……なら立ったままって言いなさいよ、全く」

回りくどいのが魔女だろ。

「全くもって言い返せないわね」

「本当にね。一応聞いておくれけど、床の定義は？」

【床とは、重力が存在する方向である】って感じで。厳密にどうかってのはあれだから、

この程度の定義で勘弁してくれ。

「はいはい。どうでもいいけれど、重力下の話でいいみたいね」

別に宇宙での話じゃないぜ。

「身動きが取れないという話だけど、他者からの干渉で動くことはできなかったの？」

【このゲームにおいて、ニトリ以外の登場人物は存在しない】って言っておけばいいか？

あ、でも別にいいか。「ゲーム中、にとりの体は、誰の手によっても動かされていない」ということで。

「なるほどね。ということは水の流入は自動と」

まあ、そういうことだな。別にどうでもいいことだからいちいち赤では言っておかないけれど。

「んー……、水はどこから出ているの?」

あん? 水の場所か?

「ええ」

何でだ?

「『にとりの顔の近くに管か何かがあつて、一度にとりの顔に当たつてから水が部屋の中に入ってきた』とか、そういう推理」

シャワーを浴びながら風呂を溜めているみたいなイメージか?

「そうよ。水の勢いが強ければ溺死も可能だと思ふのだけど」

まあ、出来そうではあるな。でも、「水の流入口は、床から十センチ程度の場所にある」からな。

「思いの外低いわね。にとりが立った状態で縛られている以上、それで死ぬのは無理か」
「みたいね。じゃあついでに聞くけれど、排出はどうなっているの? それとも流した

まま排出はしていないということ？」

んー？ いや、流しっぱなしのイメージだったな。だからまあ、【にとりの膝の高さと同じ場所に、水の排出口

はある】ってこと何だろうな。

「まあ、それ以上になっていかないんだから、道理と言えば道理ね」

「……そうね」

ん？ どうした、霊夢？

「いえ、何かが引っかかっているのだけ……」

「引っかかっている？」

「……ああ、そっか。ねえ、魔理沙」

何だ？

「おそらくだけど、トリックが分かったわ」

げ、マジか。まだ全然時間が経っていないぞ。

「あら、もうトリックが分かったの？」

「まあ単にトリックというよりは、叙述トリックに近いみたいだけど」

ああ、その口ぶりだと分かっているっほいな。んじゃ、張り切ってどうぞ。

「はいはい」

『にとりは逆さまになった状態で縛られていた。その状態だと、膝の高度はにとりの顔よりも高い位置にある。従って、その高さまで水を入れるとニトリの顔は完全に水没することになり、結果溺死した』どうかしら？」

……やれやれ、リザインだ。

「ふふつ、やったわ」

「ううん、先を越されたわね。思いの外、簡単な真相だったわね」

ぶつちやけ、前回のお前の謎以上に、気付かれたら即終了の謎だったからな。気付かれなくなかったから言わなかったけど。

「そうね。たぶんそう言われていたら、もつと早く気付いていたと思うわ。にしても、案

外簡単な謎だったわね」

死体蹴りをするなよ、おい。しょうがないだろ、結構即興で考えたんだから。

「まあそういう時もあるわ。次でもっといい謎を考えればいいってだけの話よ。じゃあ
霊夢、次はよろしくね」

「え？　なんで私が」

「だって私も魔理沙ももうやったもの」

そうだそうだ。お前もやらないと不公平だろ。

「面倒なの فقط」

「私も探偵として謎を解きたいのよ。今回は貴女に先を越されたから、貴女の謎を解く
ことでリベンジしたいわ」

私も、だいたい紫と同じだ。お前に勝って、雪辱を晴らしてやる。

「雪辱っていうほど大層なものでもないでしょうに。……ま、いいわ。考えおくから、
ゆっくりと待っておきなさい」

言ってみるもんだな。

「よろしくね、霊夢」

「はあ、やれやれ……」

第十一盤、出題編

……これで行きましようか。

「お、出来たのか？」

まあね。

「結構かかったわね」

仕方ないでしょう？ そうポンポンと謎を考え付くわけじゃないんだから。一応は思いついてはみたけれど、いつものようにほほほほアドリブでいくわ。

「ぶっちゃけ、アドリブでいいしなあ。よっぽどややこしい奴をやるんなら別だけど」

「そうね。時間的な謎なんかも含めるような奴ならともかく、そうでないならある程度は大雑把に出来るもの」

まったくね。じゃ、早速始めましようか

「——だったら、私も混ぜてもらえないかしら？」

え？ ……ああ、睽夜じゃない。

「珍しいな、お前がこっちに来るなんて。しかも一人で」

「たまにはいいでしょう？」

「あのお嬢様はどうしたのかしら？」

「そのお嬢様の命令で、今日はここに来たのよ」

「どういう意味？」

「今しがた始めようとしていたでしょう？　屁理屈推理合戦。それに参加させてもらおうということよ」

「屁理屈のことよ」

「屁理屈の？」

「やりたいならパチュリーに頼んだらいいんじゃないか？　確か前に私とやったよな」

「私が魔女をやった時の話ね」

「まあ、それが原因なのよ。実は、お嬢様たちが屁理屈推理をやるうと言われてね。魔女

はパチュリー様でいいんだけど、探偵の方にも経験者がいたほうがいいでしょう？」

ああ、そういうことね。だから一度屁理屈推理を経験する為に、まあよくやっている

方の私達のところに来たよ。

「ええ。一応ルールその物は把握したから、後は実際のそれを体験したくて。それで、霊

夢は結構回数を重ねていると聞いたから、とりあえずここに」

「で、ちようどよく私と、紫がいたって訳か」

「しかも都合よく、今まさに屁理屈推理を始めようとしていたと。幸運ね、貴女」

「そのようね。それで？　私は参加してもいいのかしら？」

私はいいわよ、別に。

「私もいいぜ」

「魔女役がよしとするなら私も文句は無いわ」

「じゃあよろしくお願いするわ」

ええ。……ま、今回はあんまり、初心者向けじゃないつもりなんだけど。

「あら、そうなの？」

ちよつとね。たまには意地悪な魔女になってみようと思ったのよ。いいわよね？

「文句は無いわ、当然」

「だな」

「同じく」

じゃあ、始めるわよ。……幻想、いる？

「何だ、準備してないのか？」

面倒になっちゃった。

「いや、頑張れよ」

……はいはい、やってみるわよ。

彼女——レミリアはその部屋にいた。

彼女を縛る物など、そこには何も無かったわ。

だけど、彼女は部屋から出るとは出来なかった。

どうしてって？ それは魔女が魔法をかけたから。

魔女がレミリアに魔法をかけて、彼女の意思を奪ったの。

だから彼女は部屋から出なかった。部屋から出ないままに、彼女はとうとう死んでしまった。

そんな彼女の死に様を、魔女はけらけらと笑ったわ。

……こんなところで、赤といきましょうか。

【レミリアは部屋の中で死亡した】

【部屋のドアに鍵はかかかっていなかった】

【部屋に留まったからこそ、レミリアは死亡した】

ま、こんなところで。頑張りなさい、探偵さん達。

「……おいおい、こんだけか？」

そうよ。

「成る程、確かにこれは意地悪ね。貴女にしては珍しく」

そつちから動かないと私は赤を出さないから、今回はそのつもりでよろしく。

「仕方ないな、まあ頑張ってみるか」

「こういう場合、まずどうするのがセオリーなのかしら？」

「セオリーって言うてもな、別にそういうもんは無いと思うぜ。というか、私らだってそこまで入れ込んでいるってわけじゃないし」

「とりあえず、この場合は状況の把握からじゃないかしら。死体か、あるいは部屋の情報のどちらから先に把握していきましよう」

「そうだな。じゃあまずはレミリアの死因から探るか」

「それだけど、何故お嬢様を？」

アンタが来たから、そこからの連想。

「……分かつてはいたけれど、お嬢様を殺さないで欲しいわね」

いいじゃない。確かもう二回目ぐらいのはずだし。

「……お嬢様の前ではやらないでね」

覚えておくわ、たぶんね。

「……もういいか？　じゃあ霊夢、復唱要求だ。「レミリアの死因は刺殺である」

復唱は拒否。だけどこう答えるわ。【レミリアの身体に刺し傷は無い】とね。

「……………回りくどいな、えらく」

「これが貴女の言う意地悪な魔女ということ？」

そういうこと。今回私はそれほど素直に赤を出さないだろうから、そのつもりでいな

さい。復唱要求にも何処まで答えるかしらね。

「来るタイミングを間違ったかしらね、私は」

「これぐらいの方が逆にいいんじゃないか？　生温いよりはいいだろ」

「かしらね」

「とりあえず、今回はそういうやり方ということで行きましょう。復唱要求、「レミリア

の死因は絞殺である」続けてもう一つ、「レミリアの死因は撲殺である」

復唱は拒否、だけど【レミリアの首に絞殺の痕はない】【レミリアの身体に打撲痕は無

い】と答えておくわ。

「……………やっぱり、何かやりにくいな。いつもならこういう時は外傷はないで済ませてく

るんだが」

「こういうのも時にはいいでしょう。それにしても霊夢、その赤だと絞殺と撲殺の死自体を否定しきれないように思えるのだけど」

かもね。でもアンタがやったのはあくまで復唱要求、それに対しどう答えるかは魔女役の私次第よ。

「まったくね。それは一切否定できないわ」

だから好きに考えなさいな、……色々かね。

「ふむ……」

「じゃあ私も聞いておこうかしら。あ、ゲームとはいえ流石に主の名前を呼び捨てにするわけにもいかないから、私はお嬢様と呼ぶけどいいわよね？」

ええ、アンタの言うお嬢様はレミリアのことだと解釈してあげるから安心なさい。

「なら復唱要求よ、「お嬢様は毒殺された」」

当然のように拒否、だけど「レミリアは毒を飲んでいない」と答えてあげる。

「これで殺し方は結構潰したか？」

「ざっと思いつくのは、というところかしらね。ああ、でも前提を聞いておかないといけなかったわね。復唱要求、「レミリアは他殺」」

拒否、でも「レミリアの死は、第三者の意思が介在した結果である」とは言っておこ

うかしら。

「……どうでも考えられる赤ね、それ」

「意思が介在って、それだと悪意を持つてお嬢様を死に追い込んだのかが分からないんじゃないかしら」

「じゃあ聞くのが早いな。復唱要求、「その第三者はレミリアを殺すつもりだった」

——復唱拒否。赤も出さないわ。

「ん？ 答えてくれないのか？」

遊びの一つぐらい持たせないと、ね。

「本心か、それ？」

どうかしら、ねえ。

「そこを考えてもしょうがないわね。……一旦部屋の状況の把握に移る？」

「そうしましょうか。互いにある程度把握していかないと分からないこともあるでしょうから」

「じゃあ、そうだな。復唱要求、「このゲームにおいて部屋は一つしかない」

そうねえ……、「このゲームにおいて、部屋と呼称されるものは一箇所しかない」

「部屋以外の場所は出てくるのか？」

さあ？

「……オーケー、ちゃんと聞かないと答えないと訊かないで」

「とりあえず今は部屋が一つであると分かっているとわかっていなければいいわ。復唱要求、「部屋にドア以外の出入り口は無い」」

たまには答えてあげるわ、「部屋にドア以外の出入り口は無い」

「で、そのドアに鍵はかかかっていないと」

ええ、既に出した赤の通りよ。

「それでいて、レミリアは室内に留まった？」

そうなるわね。

「レミリアは自分の意思で部屋の外に出ることは可能だったのか？」

彼女の意思は魔女が操っていたから、無理でしょうね。その際にレミリアの意思など全く存在していなかったと言えるわ。

「……何かあれだな、魔法での否定を聞いたのは久々な気がする」

「何だかんだと言って、物理的なトリックを前提として魔女をやっていたものね、私達も」

これが本来の魔女役の振る舞いだと思うのよね、多分。

「それよりも、今重要なのは赤を引き出すことじゃないの？」

「おっと、そうだったな。じゃあ普通に青で、『レミリアは縛られていて動けず、だから

部屋から出る事が出来なかった』

「レミリアは縛られてたりなどしていない」おまけよ、「レミリアは自由に四肢を動かす事が出来た」

「一応身動きは取れていたって感じのようだな」

「でもそうなるよ、何故お嬢様は部屋を出なかつたのかしら」

「こういう可能性は？ 『レミリアは室内に留まることで自分が死ぬということに気付いておらず、結果死亡してしまつた』」

残念、「レミリアは部屋から出なかつた場合、自分が死ぬ事を理解していた」わ。

「自覚はあつたと。では『部屋を出てもレミリアは死亡するようになっていたので、レミリアは諦めて室内での死を選んだ』」

違うわね。「部屋から出さえすれば、レミリアは死亡しなかつた」もの。

「それをレミリアは知っていたのか？」

ええ。「レミリアは部屋を出れば自分が死ぬことはないと理解していた」から。

「それなのに出来なかつた？ 身体の自由も利いていて、鍵もかかつていなかったのに？」

そういうことよ。さて、一体どうしてレミリアは外に出なかつたのかしらね？

「ふうん……。コイツは結構、厄介な屁理屈らしいな……」

今回出た赤の纏め

【レミリアは部屋の中で死亡した】

【部屋のドアに鍵はかかかっていなかった】

【部屋に留まったからこそ、レミリアは死亡した】

【レミリアの身体に刺し傷は無い】

【レミリアの首に絞殺の痕はない】

- 【レミリアの身体に打撲痕は無い】
- 【レミリアは毒を飲んでいない】
- 【レミリアの死は、第三者の意思が介在した結果である】
- 【このゲームにおいて、部屋と呼称されるものは一箇所しかない】
- 【部屋にドア以外の出入り口は無い】
- 【レミリアは縛られたりなどしていかない】
- 【レミリアは自由に四肢を動かす事が出来た】
- 【レミリアは部屋から出なかつた場合、自分が死ぬ事を理解していた】
- 【部屋から出さえずれば、レミリアは死亡しなかつた】
- 【レミリアは部屋を出れば自分が死ぬことはないと理解していた】

以上

第十一盤、解答編

当ゲームにおける基本ルール

1. 〔で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
2. 『で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。なお、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
3. 魔女は提示された青字に対して赤字を使って反論する義務を持つ。青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、人間側の勝利となる。なお、赤字での反論が有効かどうか、人間はよく検証する必要がある。
4. 人間側は、〔で囲われた文章を赤字で復唱することを魔女側に要求できる。ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。

以上

「……こいつでいってみるか。『レミリアは何らかの病気で身体を動かす事が出来ず、結果として死を理解しながらも部屋を出る事が出来なかった』それと『レミリアにはそもそも自殺願望があり、部屋に留まって死を受け入れた』つてところでどうだ？」

残念。「レミリアは病気ではなかった」「レミリアはその最期の瞬間まで生きたいと思っていた」病気でもないし、ましてや自殺でもないわ。

「やっぱな。第三者の意思云々があったから多分違うんだろうとは思ったけど」

ま、それでも一応試すのが屁理屈だから、そこはね。

「そうね。じゃあ私も試しておきましょうか。『レミリアは首輪で繋がれており、四肢は自由に動かせるが脱出は不可能な状態であった』というのはどう？」

「レミリアの身体を一所に縛るような枷は存在しない」吸血鬼を飼う趣味はないわ。

「ふむ、そう」

「じゃあこういうのはどうかしら？ 『ドアは施錠されていなかったけれど、別の方法で固定されていた』あるいは『ドアは天井、または室内から通常届かない位置に設置されており、ドアを通る事が出来なかった』もう一つ、『犯人がドアを外から押さえていた』

という三つの推理を投げさせてもらうわ」

いい青ね。ドアへの三連発、見事よ。だけど、「ドアを開かぬように固定化する仕掛けは存在しない」「ドアは日常的に使用されており、ゲーム中も位置は変わっていない」「ドアを外から押さえていた人物は存在しない」その全てを赤で以って斬るわ。

「……全部斬られるか。やはり初心者には難しいわね」

「いやあ、初めてでそれだけ出るなら上等だぜ。しかしそうか、こうなるとドアに問題はないのか？」

「いえ、こういう可能性もあるわよ。『ドアは小さすぎて、レミリアはドアを通る事が出来なかった』」

「ドアは一般的な人類であれば通れる程度の大きさ」「レミリアは一般的な人類である」で斬らせてもらおうわ。

「ふむ、斬られましたか」

「……なんか、レミリアが人類ってことになったのが地味に面白いな」

「そこ？ まあ、分かるけれど。……今のところ部屋にばかり注意がいつているけれど、お嬢様の死因はあまり気にしなくていいのかしら？」

「難しいところね、それは。どうも、今回はどちらも真相への道に繋がっているような感じがするわね。……そうね、死因にも少し触れましょう。復唱要求、「レミリアは餓死

していない」「レミリアは衰弱死していない」

復唱は拒否だけど、【部屋の中には食料となるものが十分にあった】と返しておきましようか。

「食料があつたのか。じゃあ餓死は無理だな」

「でも無いんじゃない？ 食料、例えば米とかがあつても、それを炊く方法が無ければ食べることは出来ないわ」

「あ、それもそうだな。じゃあ霊夢、復唱要求だ、「部屋の中の食料はそのままの状態です」
食べる」ことが出来る」

……………拒否よ。

「……霊夢、少しだけ沈黙が長くなかったかしら？」

そう？ 気の所為じゃないかしら？

「いや、私もそう感じた。となると、案外これが本線か？」

「いえ、だとしても外に出られなかった方法が分からないと無理よ。ドアを閉じ続けているものが見つかからない以上、それだけではリザインにまで持っていけないわ」

「ううむ、そうなるか……」

「じゃあ、こういうのはどう？ 『部屋の中は非常に広大であり、お嬢様はドアまで辿り

着く事が出来なかった』」

……そうね、「部屋の広さは一般的な学校の教室の面積よりも狭い」とでもしておきましようか。

「となると……どれくらいだ？」

「縦横、最大でも十メートル程度つてところじゃないかしら？」

「そのぐらいなら普通に辿り着けそうね」

「いや、待て。霊夢、それは部屋の床全ての面積の話か？」

……？ どういう意味？

「例えば、だ。『部屋は階層構造になっており、一種の迷路化していた。そのため、レミリアはドアにまで辿り着けなかった』ってことだよ」

「部屋の中がビルみたいな構造になっているってこと？」

「それもうビルじゃない、部屋じゃなくて」

「ビルを囲っている部屋なんだよ」

面白い説だけど、「部屋の高さは十メートル以下」とでも返しておきましょうか。

「……二階、三階といった所かしら？」

「その大きさに迷う、というのはちよつときつそうね」

「いや、まだだ。その程度の階層でも迷う可能性はないわけじゃない」

面倒になってきたから言っておけるけど、「部屋は階層構造ではない」わ。魔理沙が哀

れだからおまけしてあげる。

「……駄目か。やっぱり無理あるよな、これは。というか誰が哀れだ、誰が」

「貴女が、に決まっているでしょう」

「……いえ、魔理沙のおかげで一つの可能性が生まれたわ」

「え？」

へえ？ 紫、一体どんな可能性が生まれたというのかしら？

「そのためにも霊夢、一つ聞いておくわ。復唱要求、「レミリアはドアの位置を把握していた」」

……成る程ね。

「復唱は？」

拒否。それ以外に無いわ。

「どういう意味だ？」

「つまりはこういうことよ。『レミリアはドアの位置を把握しておらず、自分の死を自覚しながらも部屋を脱出する事が出来なかつた』」

……精々十メートル四方の部屋のドアの位置を把握していなかつたって言うの？

「否定はしないのかしら、霊夢？」

……。

「でも、どうやったたらその程度の広さで迷うんだ？」

「……そういうこと。紫、貴女はお嬢様の目を疑っているわけね？」

「正解」

「どういうことだ？」

「紫はこう言いたいのだよ。『お嬢様は目が見えず、そのためドアの位置が分からなかった』とね」

「レミリアは病気ではなかった」と言っただけだよ。

「視力を失う原因は病気ばかりではないわ。事故などで傷を負って見えなくなった可能性がある」

「あ、そっか！ だから霊夢は頑なに、レミリアに外傷はないって言わなかったんだな
！」

「そういうこと」

でも、それでどうやってレミリアを殺すつもりなのかしら？

「それは勿論、餓死よ」

言っただけだよ。【部屋の中には食料となるものが十分にあった】って。

「食料があってもそれを食べられるとは限らないわ。先ほどの問答、忘れたとは言わな
いわよね？」

………だけど、それでも数時間もかければドアの場所を探ることぐらい出来るんじゃないかしら？ 餓死と簡単に言うけれど、それには相応の時間がかかるはずよ。

「問題ないんじゃない？ ゲーム開始前からお嬢様は餓死寸前の状態であつたのかなら」

「そうね。つまり、最終的な青はこうよ。『レミリアは視覚に問題があり、ドアの場所を探す事が出来なかつた。さらにレミリアはゲーム開始前から餓死寸前の状態であり、周囲の食品も即時に食べられる物ではなかつたので、最終的に彼女は部屋の中で餓死した』」

………。

「どうかしら？」

………。

「霊夢？」

——ふっふっふ、はっはっはっはっは!!!

「レミリアは餓死していない!!」

「えっ!？」

「レミリアはドアの位置を把握していた!!」【ゲーム開始時、レミリアはドアのすぐ近くに居た!!】「レミリアの五感に一切の支障などない!!」

「……………おいおい」

……………ふふ。紫、今の気分はどうかしら？

「……………やるじゃない。この私を引つ掛けるなんて」

「演技だったってこと？ あの不自然な間から」

ええ。ああすればあんた達は引つかかると思ったから。いいわね、たまにはこういうのも。魔女として、実に清々しい気分だわ。

「ちっ、やられた。本当にこれで終わりだと思っていたぜ」

「まったくね。この私とした事が、まんまと乗せられてしまったわ」

——さあ、考えなさい、探偵さん達。

今回出た赤字纏め

【レミリアは病気ではなかった】

- 【レミリアはその最期の瞬間まで生きたいと思っていた】
- 【レミリアの身体を一所に縛るような枷は存在しない】
- 【ドアを開かぬように固定化する仕掛けは存在しない】
- 【ドアは日常的に使用されており、ゲーム中も位置は変わっていない】
- 【ドアを外から押さえていた人物は存在しない】
- 【ドアは一般的な人類であれば通れる程度の大きさ】
- 【レミリアは一般的な人類である】
- 【部屋の中には食料となるものが十分にあった】
- 【部屋の広さは一般的な学校の教室の面積よりも狭い】
- 【部屋の高さは十メートル以下】
- 【部屋は階層構造ではない】
- 【レミリアは餓死していない!!】
- 【レミリアはドアの位置を把握していた!!】
- 【ゲーム開始時、レミリアはドアのすぐ近くに居た!!】
- 【レミリアの五感に一切の支障などない!!】

前回出た赤字纏め

【レミリアは部屋の中で死亡した】

【部屋のドアに鍵はかかっていたいなかった】

【部屋に留まったからこそ、レミリアは死亡した】

【レミリアの身体に刺し傷は無い】

【レミリアの首に絞殺の痕はない】

【レミリアの身体に打撲痕は無い】

【レミリアは毒を飲んでいない】

【レミリアの死は、第三者の意思が介在した結果である】

【このゲームにおいて、部屋と呼称されるものは一箇所しかない】

【部屋にドア以外の出入り口は無い】

【レミリアは縛られてたりなどしていない】

【レミリアは自由に四肢を動かす事が出来た】

【レミリアは部屋から出なかつた場合、自分が死ぬ事を理解していた】

【部屋から出さえずれば、レミリアは死亡しなかつた】

【レミリアは部屋を出れば自分が死ぬことはないと理解していた】

以上

【部屋はとある特殊な用途の為に作られたものである】

第十一盤、真相編

当ゲームにおける基本ルール

1. 〔で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
2. 『で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。
なお、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
3. 魔女は提示された青字に対して赤字を使って反論する義務を持つ。
青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、人間側の勝利となる。
なお、赤字での反論が有効かどうか、人間はよく検証する必要がある。
4. 人間側は、〔で囲われた文章を赤字で復唱することを魔女側に要求できる。
ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。

以上

「——さて、頭を切り替えていくか」

「とは言っても、どうするの?」

「レミリアがドアを開けられなかった理由について全力で考えるのさ。死因はもう思いつくのは出尽くしただろうし」

「そうね、それで行くのがいいでしょうね。ただ、一体どういう方法があるかしら?」

「今ドア関係で出ている赤は、鍵はかかかっていない、ドア以外に出入り口は無い、ドアを開かないようにする仕掛けは無い、日常的に使用されている、位置は変化していない、外から抑えていた人物は居ない、通れない大きさじゃない、と言ったところだったわね」
「そうね、大体あっているわ。」

「ふうむ……どうやったたら開かないように出来ると思う?」

「開かないようにする仕掛けがないというのがネックね。これがある限りドアに手を出し難いわ」

「外部から固定化するのが無理なら、元からそうなっているとかどうかしら?」

「元から?」

「例えばだけど、『ドアノブが非常に高い位置にあった』とか。要は、お嬢様には元々ドアを開ける事が不可能だったってこと」

「元の仕様からおかしいって話か。霊夢、どうなんだ?」

「ゲーム開始前の時点で、レミリアは問題なくドアを開閉させる事が出来た」わ。

「じゃあ、ドアノブが開始後に移動したとかは？」

面白い構造のドアね、と言ってもられないか。【ドアの構造はゲーム開始前から変化していない】と言っておきましょうか。

「はあん、駄目か」

「となると、ゲーム開始後に何かドアに起こったと考えていいよね。『部屋の中に水が溜まって開かなくなった』というのはどうでしょう？ 水自体は仕掛けでもないし、ついでにレミリアを殺す原因にもなれるわ」

【このゲームにおいて水という存在は重要ではない】わ。ついでに言っておくと、【レミリアの気道は何にも塞がれていなかった】

「ふむ、窒息の可能性も無いと……いえ、酸欠による窒息はあるわね」

「酸欠？ となると、宇宙とかか？ あ、一応地中つてのもあるか」

「いえ、それだと部屋から出れば死ななかつたという赤に接触するんじゃないかしら？」

「あ、それもそうか」

補足してあげるけど、【部屋は地上にある】し、【部屋は地中や海中にはない】わ。

「部屋の位置はあんまり関係ない感じだな、こりや。なあ霊夢、ヒントないか？」

え？ 聞くの？

「……まあ、それなりに詰まってきた感じはあるわね、悔しいけれど」

「確かにねえ」

「じゃあ、そうね……【部屋とはある特殊な用途の為に作られたものである】」

「特殊な用途？」

それと、さつきまでの青が結構よかったからもう二つ追加してあげる。「このドア、及び部屋の作成者は安全意識に欠ける人間であった」(ドアはスライド式)

「スライド式？　じゃあ先ほどの私の推理は元から無理だったようね」

「というか、スライド式なんてのも重要なのか？」

まあそれなりにね。安全意識に欠けるつてのと同じく、解答を聞けば納得できるんじゃないかと思っているわ。

「特殊な用途に、安全意識……エレベータに閉じ込められたとかかしら。『部屋というのはエレベータであり、故障などでお嬢様はその中に閉じ込められた。死因は空気がなくなったことによる窒息死』とかはどう？」

【部屋はエレベータではない】わ。おまけで、「レミリアの死因は窒息死ではない」とも付け加えてあげる。

「ふむ」

「だが、故障でドアが開かないつてのは良い線行っている気がするな。それならたぶん、開かないようにする仕掛けは無い、という赤にも接触しない気がする」

「開ける部分が壊れているだけだし、確かに納得できるわ」

「となると、とりあえずそこだけ抜き出すか？ 『ドアは自動ドアで、レミリアが開けようとしたときは故障して開かなかった』 スライド式って言っていたし、たぶんそういうことだろ。あと、安全意識の欠如の所為で、非常口みたいなドアが故障した場合の措置を考えていなかったとかじゃないか？」

「……………『ドアは故障していない』わ。」

「……………あれ？ 違うのか？」

「いえ、方向性としては多分間違っていないわ。故障が駄目なら、後はもう一つだけ」
「停電、ね。『停電によってドアが開かなくなり、お嬢様は部屋から出る事が出来なかった』ということでしょう。どう、霊夢？」

「……………はあ。いいわ、それに関してはリザインよ。」

「よっしやー！」

「やつと分かったわね、長かったわ」

「二人とも、まだ死因は分かかっていないわよ」

「おっと、それもそうだった」

「でも、一体何が死因なのかしら？ 選択肢は多分まだあると思うのだけど、パツと思いつかばないわね」

「そう？ 私は何となく分かったけれど」

「そうなのか、紫？」

「ええ、話の流れからこういうことじゃないかと思っっているわ」

じゃあ、聞かせてもらいましょうか。

「ええ。私の青は次のとおりよ。『部屋とは冷凍倉庫のことであつた。レミリアが倉庫内に入った後、犯人が何かを行ったことで停電が発生し、ドアが開かなくなつた。作者の安全意識の欠如が原因で倉庫内には非常口の類もなく、さらに言えば何か問題が起ころつても倉庫内の温度を保つようにもなつていた。そのため、レミリアは倉庫から出ること出来ず、ただ凍死するのを待つのみであつた』これでどうかしら？」

——お見事。ここに完全なりザインを宣言するわ。おめでとう、探偵さん達。

「成る程、そういうことだったのか」

「大概な構造の倉庫ね。事故の想定なんかまるでしていなかつたと。でも、自動ドアつてそんなに重いものなの？」

「どうなんだろうな。意外と重いつて聞いたような気もするけど、詳しくは知らん」

「軽かつたとしても、スライド式のドアなら多分掴む場所が無いだろうから、案外開けるのは難しいんじゃないかしら」

「ああ、それもそうね」

一応、今回のドアはかなり重いドアってことにしてあるわ。ドアを開ける手間を自動にして省いているというよりは、自動にしないと開けられないようなドアといった感じ。紫の言うとおりに持つ所もないし、人間一人ではどうやっても開けられないでしょうね。

「何でそんなごついドアを冷凍倉庫に取り付けたんだか」

さあね。案外別の用途の為に作られたものを冷凍倉庫に変えたただけかもよ。真相的に倉庫内に別電源があつたわけだし、機材を持ち込んで作り変えたのかも。

「何にしても、杜撰な話だよ」

「まったくね。……さて、じゃあそろそろ私はお暇させてもらうわね。一つだけだったけど、貴重な体験が出来て助かったわ。中々面白かったしね」

ま、そう言ってもらえるならいいけど。

「今度は咲夜の魔女っぷりを見てみたい、ってな」

「そのうちね。とりあえず私はお嬢様たちとのものを済ませないといけないし。——じゃあ、また会いましょう」

ええ、またね。

第十二盤、出題編

当ゲームにおける基本ルール

1. □で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
2. 『』で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。ただし、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
3. 魔女は提示された青字に対して、赤字を使って反論する義務を持つ。青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、探偵の勝利となる。なお、赤字での反論が有効かどうか、探偵はよく検証する必要がある。
4. 人間側は「」で囲われた文章を提示することで、魔女に対しその文章を復唱することを要求できる。ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。

5. 探偵は、復唱要求や青き真実を使うまでもない疑問、質問を魔女に問うてもよい。ただし、魔女側はそれに答える義務を負わない。

以上

「——さあ、屁理屈推理を始めましょうか」

「それ、私の台詞なのだけけれど」

堂々と、開始の宣言をしたレミリアに、パチュリーがやる気なくツツコミを入れる。

「いいじゃないの。こういうことは館の主たる私が宣言するものでしょう?」

「まあ、確かに主催者はレミイみたいなものだけけれど、今回魔女をやるのは私なのだから、言うなら私だと思っただけだね」

「どつちでもいいから、早く始めようよ」

「そうおっしやらずに。こういうことは、何かと雰囲気が大変なのですから」

じれつたい、と肘をつき、手の甲に顔を寄せながらぼやくフランを、その隣に座る咲夜が苦笑と共に宥める。

まあ、そもそもとして、今回のゲーム自体予定を前倒しで始めているのだから、待てないというのにはある意味自然な流れであるのだが。もつとも、その所為で参加予定であった美鈴と小悪魔は仕事がまだ終わっておらず、後から参加することになってしまっているのもまた事実である。

「まあいいわ。それじゃパチエ、よろしくね」

「はいはい。二人も、準備は良いわね？」

話がついたようで、開始の確認を取ってきたパチユリーに対し、フランと咲夜は頷きを返す。それに自身もまた一つ頷いて、パチユリーは口を開いた。

「それじゃあ、これより屁理屈推理合戦を始めるわ。魔女はこの私、パチユリー・ノレッジが、探偵はレミリア・スカーレット、フランドール・スカーレット、十六夜咲夜の三名が担当すると。では、これより事件の概要を説明するわ」

——目の前にあるのは、美味しそうな無数の料理。パーティーの参加者達はそれぞれ思い思いに料理を選び、その味に舌鼓を打っている。

そんな中、一人の男が料理を選ぶ。他のものにも負けず劣らず美味しそうなその料理を、男は口へと運ぶ。しかし、その至福の味に男が満足を覚えたのは一瞬。

うめき声と共に、男が地に伏す。そのまま、男は何が起こったのかも分からぬままに、その命の鼓動を止めた。

男の死にざわめく他の招待客達は、ふと魔女の高笑いのような声は何処かから聞こえたような気がしたのであった……………

ふう、と語り終えたパチュリーは一つ息を吐き、そして再び三人を見やりながら述べる。

「では、これより赤の宣言を始めるわね。【パーティー会場にて、男が死亡した】【死因は

毒殺】「毒は会場に準備された料理の中にあつた」【男以外に毒で死亡した者はいない】
【男が食べた料理は誰しもが食べる事が出来る状況にあつた】

さて、とパチュリーは不敵に微笑む。

「何故、男のみがその毒の料理を食べてしまつたのか。これを私は『魔女が男以外には料理を見えなくしていたから』と主張するわ。さて、貴女達はこれをどのように人間のトリックによるものだと思ひして推理してくれるのかしら、ね」

屁理屈推理合戦、その開幕である。

そうね、とまず口を開いたのはレミリアだ。彼女は咲夜を見ながら言う。

「咲夜、この場合まずはどのような事を聞くべきだと思ふ？」

「そうですね、まずは状況の把握でしょうか。例えば……復唱要求、「食事の形式は立食形式である」

「復唱を認めるわ。【食事の形式は立食形式である】」

「分かりました。これで、毒の入った料理がフルコースの一品であつた、などという可能

性は消えたということですよ」

「成る程ね。フルコースであるならば、意地汚い話ではあるけれど、他人の料理を勝手に食べてしまうことは可能だから、誰でも食べられる状況にあったという赤に抵触しない、と」

「はい、ですが今の赤によってその可能性はほぼなくなったということですよ」

ふむふむ、とレミリアとついでにフランが幾度か頷く。初めての屁理屈推理合戦、いくら事前知識があるとはいえ、吸血鬼姉妹からすればまだ何もかもが手探りの状態であった。

しかし、何だかんだといって二人とも頭の回転は速いほうであるので、すぐさまのその姉のほうに魔女に対し口を開いた。

「じゃあ、私も復唱を要求するわ。復唱要求、「男以外に毒の入った料理を食べた者はいない」」

「復唱を認めるわ。〔男以外に、毒の入った料理を食べた者はいない〕」

「分かったわ。そうなると私達は基本的に料理を隠す、あるいは男のみに見せる方法のみを考えればいいということになるのね」

「……………どういふこと？」

首を傾げるフランに、レミリアが説明をする。

「この赤で男以外が料理を食べた可能性が無くなった。つまり、全員に食べさせた後で解毒剤なりを男以外に飲ませた、みたいな可能性も同時になくなつたということよ。だから、どうやって男だけにピンポイントで料理を食べさせたのか、その方法だけを考えれば良いわけ」

「ふーん……」

でもさ、と説明を聞いたフランは頬杖を崩さずに口を開く。

「偶々その男が料理を食べちゃつただけって可能性はないの？ 犯人からすれば誰でもよかつたってやつ」

「それじゃゲームにならないでしょうに」

「でも成り立つじゃない」

「まあまあ、そう言い合わずに。妹様の意見を纏めると、『本来犯人は無差別殺人を狙つており、男だけが死んだのは偶然的の産物である』ということですか？」

姉妹を宥めながら、咲夜がフランの推理を纏めて青にする。その青に対し、パチユリーは特に動じることなく首を横に振る。

「残念ながら、『犯人は意図して男を殺そうとした』『犯人は男以外の参加者に対し、特に殺意を持つてはいなかった』わ」

「んー、そうなんだ」

「……それ、無差別殺人を許容していた可能性は否定していかないと思うのだけれど、違いかしら？ 結果的に男が死ぬなら、他の人が死んでも構わないと思っていた可能性はあるんじゃない？」

「ふむ、じゃあ【犯人に無差別殺人を行うつもりはなかった】【犯人は男のみがその毒の入った料理を口にするだろうと考えていた】とも付け加えておくわ」

「ふむ………そこまで言うなら、他を巻き込むつもりはなかったと考えて良いのかしら………」

腕を組み、レミリアは考え込み始める。代わりと言わんばかりに、今度は咲夜が口を開いた。

「では今度は私が。パチュリー様、誰でも食べられる状況にあった、というのはゲーム中を通してのことでしょうか？」

「と……？」

『毒入りの料理はゲームが終了する間に男の目の前に運びこまれたものであり、結果誰よりも早く男が料理を口にし、そのまま死亡してしまった』という可能性があるのではないかと」

成る程ね、とパチュリーは咲夜の青に対し、頷いてみせる。

「だけれど、その可能性は無いわ。【ゲーム開始時から終了時まで、毒入りの料理は会場

内にあった」「ゲーム開始時から終了時まで、毒入りの料理は誰しもが食べる事が出来る状況にあった」のだから」

「そうでしたか」

「本当に誰でも食べられる状況にあつて、だけど何故か他の人は食べなかつたんだね」

うーん、とフランは天井を見上げながら考え込む。その後、ポンと手を叩いてパチュリーへと視線を戻す。

「こんなのはどう？ 『事前に男以外の全員に、その毒の入った料理を食べないようにという指示が出ていた。結果、その指示を知らなかつた男だけが料理を食べてしまい、死んでしまった』」

「いい青だけれど、『特定の料理を食べるな、という指示は参加者に出されていない』ついでに『特定の料理を食べろ、という指示は参加者には出されていない』」

「うーん、そっかー……」

違うのかあ、と呟いてフランは再び考え込み始める。それは他の二人も同様であり、そんな三人の様子を見ながら、パチュリーは紅茶を一口味わうのであつた。

今回出た赤字纏め

【パーティー会場にて、男が死亡した】

【死因は毒殺】

【毒は会場に準備された料理の中にあった】

【男以外に毒で死亡した者はいない】

【男が食べた料理は誰しもが食べる事が出来る状況にあった】

【男以外に毒の入った料理を食べた者はいない】

【食事の形式は立食形式である】

【犯人は意図して男を殺そうとした】

【犯人は男以外の参加者に対し、特に殺意を持ってはいなかった】

【犯人に無差別殺人を行うつもりはなかった】

【犯人は男のみがその毒の入った料理を口にするだろうと考えていた】

【ゲーム開始時から終了時まで、毒入りの料理は会場内にあった】

【ゲーム開始時から終了時まで、毒入りの料理は誰しもが食べる事が出来る状況にあった】

【特定の料理を食べるな、という指示は参加者に出されていない】

【特定の料理を食べる、という指示は参加者には出されていない】

以上

第十二盤、解答編

当ゲームにおける基本ルール

1. 〔〕で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
2. 『』で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。ただし、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
3. 魔女は提示された青字に対して、赤字を使って反論する義務を持つ。青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、探偵の勝利となる。なお、赤字での反論が有効かどうか、探偵はよく検証する必要がある。
4. 人間側は「」で囲われた文章を提示することで、魔女に対しその文章を復唱することを要求できる。ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。

5. 探偵は、復唱要求や青き真実を使うまでもない疑問、質問を魔女に問うてもよい。ただし、魔女側はそれに答える義務を負わない。

以上

「……じゃあそろそろ行かせて貰いましょうか」

考えが纏ったのか、レミリアはパチュリーに視線を移しながら言う。

「何か思いついた？」

「一応ね。いくつか、料理を男以外が食べなかった理由を考えてみたわ」

「聞きましょうか」

「二つ目は『料理はひどく高い場所に設置されており、長身であった男以外は手を取る事ができなかつた』」

「背が高いねえ、どれだけ長身だったのか」

「じゃあついでに逆の可能性も言っておくわ。『男以外の参加者は子供で、毒はわさび入りのお寿司のような子供は手を伸ばさないような料理に入っていた』」

「成る程ねー。子供と大人なら身長差も出るもんね」

「まあ、どちらも斬るわ。『毒の入った料理は誰でも手の届く場所にあった』【参加者には成人している者もいる】とね」

「じゃあその逆はどうでしょうか？ 『男は乳幼児であり、大人は食べないような子供用の料理に毒が入っていた』」

「【男は成人している】し【会場に用意された料理に、年齢による制限等はない】」

「……ん、ついでに聞いておくけれど、参加者の人数は何人？ 『参加者が男一人だった』という可能性もあるけれど」

「【参加者の人数は十名以上百名未満】よ」

「そう」

まあそれはいいわ、とレミリアは腕を組む。

「そろそろ本命とかも聞いて行きましようか。『毒の入った料理は隠されており、何らかの理由で男のみがその存在に気付き、食ってしまった』あるいは『ゲーム開始時では料理は会場になく、開始後に男の目の前に料理が出されたので、結果として男が一番に食すことになった』というのはいかがでしょうか？」

「そうね。【料理は誰しもが視認可能な場所にあった】さらに【料理はゲーム開始時点から会場内に準備されていた】わ。おまけで【ゲーム開始時から男が死亡するまで、他の人間が料理に手を伸ばすだけの十分な時間があつた】とも付け加えておきましょうか」
「ならばもう一つ、『実は会場は複数存在し、毒の入った料理があつたのは男が一人だけである会場であつた。会場内はそれぞれ自由に移動できるので、料理は誰しもに視認可能だつた』」

「面白い解釈だけれど、【このゲームにおいて、会場と称される場所は一つしか存在しない】ついでに言えば【会場内は壁などで仕切られたりしていない】から、会場内を分割するのは不可能よ」

「ふむ……」

違つたか、とレミリアは顎に手を当てながら虚空を見やり推理を再開する。続いて声を上げたのはフラン達。

「今度は私ね。私は、料理は隠されていなかったけれど他の人が食べなかつたことに注目して考えてみたわ」

「聞きましょうか」

「うん。『被害者と参加者では食文化が異なり、他の参加者が食べない料理を食べた』つてのはどうかな？ 納豆みたいな」

「良い推理ね。でも【被害者とその他参加者の間に大きな食文化の違いは存在しないわ】」

「関連してこつちも。【被害者以外の参加者は全員宗教上の理由で食べる事が出来ない料理があり、その中に毒が入っていた。結果、しがらみのない男だけがその料理を食べることになった】」

「【参加者達は特の食事を制限されるような宗教を信奉していない】」

「じゃあ最後、『被害者以外の参加者はアレルギーがあり、その原因が含まれている料理を食べる事が出来なかった。そんな中、そのアレルギーを持っていない男だけが毒の入った料理を食べた』という推理なんだけど」

「うーん……ばつさり斬っちゃいましょうか。【このゲームにおいて、アレルギーの有無は関係がない】」

「違うのか……」

「じゃあ私が、と手を上げたのは咲夜だ。」

「お嬢様方の推理を聞いていて思いついたのですが、その毒の入った料理というのは一定以上の調理がされている物でしょうか？」

「どういう意味？」

「例えば付け合せや飾りとしてのパセリなど、通常であれば食べないだろうものに毒が

あつたのではないか、と思ひまして。青で言うのであれば、『毒は料理に彩りを添えるなどして用意された、一般的にはあまり食べないものに入っており、男はそういったものも食べるタイプであつたので結果として毒を摂取してしまつた』といったところでしょう。少々回りくどいですが」

「んー……」

咲夜の青に対し、パチュリーは困つたように腕を組みながら考え込んだ後、

「そうね……『毒の入つた料理は手の込んだしつかりとした料理である』『毒の入つた料理はメインとして十分に通用するものであつた』と答えれば大丈夫、かしら」

「特に探偵として反論はありませんが、随分と歯切れが悪い返答ですね？」

「そう見える？」

「ええ」

パチュリーの赤き真実の斬り方に咲夜は何かを感じ取る。それはレミリアとフランも同じだつたようで、二人はよりいっそう考え込む素振りを見せる。

「うーん、今の咲夜の青の何が重要だつたのかな」

「一般的には食べないもの、あるいは飾りといったところ、かしら？ 前者から考えると

……『料理はゲテモノ料理だつた』とか、あるいは『昆虫食だつた』とかが思いつ

くけれど」

「料理はゲテモノ料理でもなければ、昆虫を使った料理でもない」

「これはすぐさま否定してくるのか。面白いわね」

「料理自体は関係ない感じなのかな？」

「いえ、関係あると思いますよ」

「どうしてそう思うの？」

フランの問いかけに対し、咲夜は勘ですが、と前置きをして、

「料理自体を隠す方法はもう結構出てきたと思うんですよ。ですがその中のどれに対してもパチュリー様はあまり大きな反応を見せていません」

「でも料理には反応していた感じだったから、やっぱりそこが重要なんじゃないか、つてこと？」

「おそろく」

「納得は出来るけど、だからといってピンとは来ないんだよね……食べる物だと認識しない料理って何なのかな」

「——それじゃない？」

ハツと、フランの眩きに対しレミリアが声を上げる。え？ とフランと咲夜が視線をレミリアに向けると、彼女はパチンと指を鳴らして、

「つまり、重要なのは『飾り』だったのよ。料理の飾り、食べる物だとは思わないもの」

「と、言いますと?」

「時々あるでしょう? 誕生日ケーキだとかに乗っている人形飾り。あれ、砂糖とかで食べられるように出来ている場合もあれば、普通に人形で食べられるものではない場合もある。普通の参加者は後者だと認識していて、男だけが前者だと認識していれば男だけが食べることも可能なんじゃないかしら?」

「あ! そっか!!」

ポンとフランが手を叩く。そんな彼女に、ええ、と相槌を打った後、レミリアはパチュリーに向き直り、

「そういうわけだからパチエ、今から貴女の謎に止めを刺させてもらうわ」

「いいわ、自信があるのでしよう?」

「当然よ」

「お嬢様、自信があるのであれば力強く宣言するのが探偵の務めかと提言します」

「ええ、私もそのつもりよ」

ふう、と息を吐いた後、大きく息を吸って、

「——これが私の青き真実よ! 『毒の入った料理というのは一見すると料理とは思えないような代物であった!』しかし男はそれが食べられる物だと知っていた、あるいは気がついた! よって、他の参加者よりも前にその料理を食べ、結果として死んでし

まったー!」

「ならば私も全力で返しましょう。【誰も男に料理に関する情報を教えていない!】そして【男は観察力が低い人間であった!】料理がレミイの言うとおりの代物だったとして、男にはそれを知る機会もなければ知る能力もない!」

「教える必要などないわ。『料理を作っている最中を男が勝手に見ていれば知る事が出来る!』いくら馬鹿でもキッチンで作っているところを見ればそれが料理だと気付く事が出来る!」

「いくら見たからといって本当に男がその料理を食べるかしら?」

「そんなもの、『料理が男の好物であれば良い』し、その逆でも良い。その程度ではまったく持って反論にならないわ。悪あがきになっていない、美しくないわね」

しばし、互いににらみ合ったまま二人は沈黙を続ける。それがどの程度続いたであろうかというところで、ふっとパチュリーが肩の力を抜いた。

「……そうね。これは確かに美しくないわ。——リザインを宣言するわ、勝者を探偵達と認めましょう」

「よし」

「流石です、お嬢様」

「ちえー、お姉さまに負けちゃった」

ふう、とパチュリーが息を吐き、レミリアが満足そうに頷く。咲夜は主を称えるように拍手をし、フランは悔しそうな表情を浮かべる。

「それでは、謎の解説でも行いましょうか。レミイたちは結局指定できなかったけれど、料理は飴細工の像よ。鳥か何か、と私としては想定しているわ」

「成る程、飴細工だったのね。確かに物によつては見事過ぎて食べられるものだとは思いにくいものもあるわね」

「他の参加者はガラス細工とかと誤認していたつて感じかな」

「そういうことよ。丸テーブルの中央、他の料理に囲まれるようにしてそれは置かれていたわ。一応お皿にも乗っていたし、ポキンと折つて食べる事が可能だったのだけけれど、パツと見てもそうは思わないだろうし、思つても中々手を出し難いでしょう」

「確かにそれだと手を出すには勇気が要りそうですね。本来であればその辺りも通達があつたのでしょうか」

「本来ならね。ただ、今回の犯人——ああ、料理長だとかを想定しているわ——がその情報に参加者たちに回らないようにしていたの。でも、男にはわざわざ細工をしているところを見せ、会場で食べるように誘導していた。レミイの指摘通り、男の好物は飴だったからね」

「好物を知っているし、知り合いだったのかしら？」

「深くは決めていないけれどね。知り合い故の殺意の芽生えであったし、だからこそそのキッチンでの誘導も可能だったと言うことよ」

「まあ、そもそも知り合いじゃないと調理の様子を見せるの難しいしね」

色々と、事件の真相や背景などを四人が話していると、コンコンと戸を叩く音が響く。ついで部屋の中に入って来たのは、仕事がようやく終わった様子である小悪魔と美鈴だ。

「お待ちせしました、パチュリー様」

「こつちも時間になったので、ようやくこつちに来る事が出来ました。今は推理中ですか？」

「いえ、ちょうど一段落した所よ。人数も揃ったことだし、二回戦を頼んでもいいかしら？」

「ええ、いいわ。小悪魔、さっき頼んだとおり、私の補佐をお願いね。」

「はい、畏まりました」

「それじゃ、私はこつち側に、つと」

探偵と魔女、それぞれの側に一人ずつ参加者が増える。休む間もない、二回戦の始まりであった。

第十三盤、出題編

当ゲームにおける基本ルール

1. □で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
2. 『』で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。ただし、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
3. 魔女は提示された青字に対して、赤字を使って反論する義務を持つ。青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、探偵の勝利となる。なお、赤字での反論が有効かどうか、探偵はよく検証する必要がある。
4. 人間側は「」で囲われた文章を提示することで、魔女に対しその文章を復唱することを要求できる。ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。

5. 探偵は、復唱要求や青き真実を使うまでもない疑問、質問を魔女に問うてもよい。ただし、魔女側はそれに答える義務を負わない。

以上

では、と皆の準備が整った所で、パチュリーが口を開く。

「人数も揃ったということ、いよいよ本番を始めるのでしょうか。早速だけれど皆、ここで私から追加ルールのお知らせがあるわ」

「追加ルール、ですか？」

小さく首を傾げる美鈴に、パチュリーは頷く。

「ええ。初めてやる美鈴には悪いけれど、今回は試験的に私の考えたルールを追加してみたいの。今回のゲーム盤限定のルールだけれど、今回の結果如何では後々にも使うか

もしれないわね」

「中々面白い話ね。で？ そのルールというのは何かしら？」

「名称としては《証言》というルールよ。大きなルールとしては次の通りね」

と、パチュリーは新ルールについて説明を始める。

以下が、その内容をまとめたものとなる。

一・《》で囲われたものを証言とする。証言はゲーム盤の登場人物から得る事が出来る。

証言の内容は、その証人にとって主観的な事実である。

ただし、証人にとって主観的な事実が現実の事実と同一であるという保証はない。

二・証言は赤字と同様の働きを持つものとする。魔女側は探偵の青き真実に対し、

証言を用いて反論しても構わないものとする。

三・証人が証言に主観的な偽りを述べることはない。

ただし、犯人のみ証言に嘘を混ぜる可能性がある。

「……と、まあ、この三つが証言ルールの根幹ね」

「質問と確認、いいわね？」

「当然。何かある人は発言どうぞ」

「じゃあ私から。証言の具体例はどんな感じかしら？」

「証言は基本的に、補佐役の小悪魔に使ってもらうことになるわ。小悪魔」

「はい。証言の形式としては、『メイド・御主人様は私とずっと行動を共にしていました』のような形になります」

「証言者と、その証言の内容を纏めて、という感じね。これは私達から要求できるの？」

「基本的には復唱要求のそれと同じようなものだと思っただけだよ。貴女達の要求に答えることもあるし、答えないときもあるわ」

「ふむ」

「私も一つ質問が。一と三の、主観的な真実、偽りとはどういうことでしょうか？」

「そうね、こつちも具体例を使って説明しましょうか。例えばだけれど、咲夜、貴方が霊夢あたりに、レミイの年齢が百歳であると教えたとするわね」

「それだとフランよりも年下だねー」

「そうね。だから咲夜は霊夢に対し嘘をついたことになる。ここまではいいわね？」

「はい、問題ありません」

じゃあ次、とパチュリィは指を立てて説明を続ける。

「昨夜の嘘を聞いた霊夢が、魔理沙に同じ事を言ったとするわ。レミィの年齢は百歳だと。この場合、結果として霊夢は嘘をついているけれど、霊夢自身にはその自覚がないわね？」

「まあ、そうですね。霊夢さんとしては聞いたこと、つまりは本当の事を言っているつもりですから」

「ああ、そういうことですか。つまり、この場合霊夢は彼女自身の主観的には嘘をついていない、ということになる。同様に、証言においても自覚なく真実と異なる事を言ってしまうことがあるということですね」

「ええ、主観的にはあっているけれど、客観的な真実とは異なる証言を証言者は述べる可能性がある。それが一のルールの意味合いということ。勿論、まったくの事実を述べていることもあるけれどね」

「誠実な証言者であっても、必ず真実を述べているわけではない。そして、その偽りと意図的に行えるのが犯人だけなのね？」

「ええ、犯人のみ、証言において嘘を述べる事が出来るわ。基本的に大体のゲーム盤において、犯人とは実際に犯行を行ったただ一人であるという定義がされていることが多いから、基本的に一人だけ嘘をついている可能性があるということね。まあ、まったく嘘

をつかない可能性もあるけれど」

「中々面白いルールね。上手くやれば証言から犯人を導き、それを推理の前提とすることが出来るし、逆に犯人が分かったことから証言の嘘を暴く事が出来るかもしれない。なるほど、これはこれで楽しそうな新ルールだね」

「納得いただけただけで何よりね。皆も、他に質問はないかしら？」

「私は特に」

「私も同じかなー」

「私も、今は何も無いですね、気になったことがでてくれば、その時は聞きますけど」

「ええ、質問は自由にしてちょうだい。では、そろそろ今回のゲーム盤の紹介をしましうか」

こほん、と一つ咳払いをして、パチユリーは語り始める。

——そこは、とある富豪の持つ屋敷であった。その屋敷にて、一つの遺体が発見される。容疑者は六名。屋敷の主人、執事、メイド、客人、修理工、掃除婦。彼らから話を聞いた探偵は、どういうことだと首を捻る。どう考えても、誰にも犯行を行うことが出来ないのだ。

必死で頭を働かせる探偵の脳裏に、一つの言葉が浮かぶ。

——魔法。

普段であれば一笑に付したであろうその言葉を、探偵はどうしても否定する事が出来ない。

——ハハハハハハハ!!!

悩む探偵の耳に、何処かから魔女の高笑いらしきものが聞こえてくるのであった……

「……まあ、こんな感じね」

「何ともあつけない幻想ね。察するに、やはり証言主体の謎と見るべきかしらね」

「となると、やはりアリバイ崩しとなるのでしょうか」

「さて、どうかしらね。じゃあ、基本の赤を述べるわよ。【ゲームの登場人物として、主人、メイド、執事、修理工、客人、掃除婦、探偵が存在する】【登場人物は、被害者を含めて八名】」

そこまで言って、パチュリーは一旦言葉を区切る。ついで、傍らにいる小悪魔へと視

線を向ける。

「ここで一旦、証言を挟ませてもらうわ。小悪魔、手はずどおりをお願いね」

「はい、分かりました。では、これより証言を行います。《主人：十二時から十三時半まで執務室にいた。そして十三時半にメイドを呼んで三十分ほど打ち合わせてしていた》《執事：十三時半に御主人様に紅茶をお運びしました。その後はお客様のお世話をしておりました》《メイド：十三時から十三時半までは掃除婦の手伝いをしていました。その後三十分ほど執務室にいました》《修理工：悪いが今手が離せないんだ。用があるなら十五時を過ぎてからにしてくれ》《客人：十三時から主人と執務室で三十分ほど話した後、客間に移動してゆっくりしていたよ》《掃除婦：十二時からボイラー室前の廊下を掃除してましたよ。十三時半からは探偵さんと話してましたよね。三十分ぐらいだった》……と、初期の証言としてはこんなところでしょいか」

これでいいですか？ と小悪魔がパチユリーに確認を取ると、彼女は大丈夫と頷いて返す。

「さて、これが証言よ。今回の証言はゲーム盤において、実際に探偵が登場人物たちから得たものという体になっているわ。故に、「探偵は犯人ではない」という前提をここで提示しておくわ」

なるほど、と美鈴が頷く。

「ということとは、容疑者が一人減ったということですか」

「そうなるわね。ついでに探偵の証言——まあ、独り言だけれど——も追加しておきましようか。小悪魔、執事に関しての探偵の証言を頼むわ」

「はい、分かりました。《探偵：そういえば、十三時から十三時半までだが、私が執事さんと一緒にいたから、少なくともその間はアリバイありだな》」

「ありがとう。さて、これらを踏まえた上でさらに赤を追加するわ。【被害者は撲殺された】【被害者は十三時から十四時までの間に殺害された】【犯人は一人】【共犯者は存在しない】」

まずはこれで、とパチュリーは探偵たちに言う。

「それじゃあ、ここからは貴女達主導で、存分に事件を推理してもらいましょうか」

「では遠慮なく。まずは状況の整理から行いましょうか」

「証言全てに嘘がないと考えた場合、修理工以外にはアリバイがありそうですね。相互で証明しあっていますから、嘘も何もない気もしますが」

「パチエ、掃除婦は修理工の姿を見ていないの？」

「ああ、証言に関しては基本的に小悪魔に聞いて頂戴。拒否権なんかもこの子に与えてあるから」

「ああ、そうなのね。じゃあ小悪魔、その辺りはどうなの？」

「そうですね、《掃除婦 修理工さん？ 十二時にボイラー室に入っていくのは見たけど、出てくるのは見ていないね》と答えさせていただきます」

「となると、パチュリー様、ボイラー室の出入り口はどうなっていますか？」

「【ボイラー室の出入りは部屋前の廊下と繋がるドアを通ることでのみ可能】よ」

「そうになると、修理工は基本的にシロと見ていいわね」

「何で？ 掃除婦が嘘をついている可能性もあるんじゃない？」

「いいえ、とレミリアがフランの質問に対し首を横に振る。

「嘘をつけるのは犯人だけだから、その場合は掃除婦が犯人ということになり、修理工は犯人ではない。そして修理工が犯人の場合、家政婦は嘘をついていないという事になるから修理工は部屋を出ていないことになるもの」

「そっか。あ、でも被害者がボイラー室で死んでいれば良いんじゃないの？」

「いいえ、【被害者の遺体は客室にて発見された】【客室とボイラー室は同じ部屋ではない】わ」

「じゃあ無理っぽいですね。修理工も容疑者から外していい、と」

「となると、とレミリアが顎にその細く白い指を当てながら、

「……全員、何かしらのアリバイがあることになるわね」

「あれ？ じゃあどうやって被害者を殺すの？」

「それを考えるのが私達の役目だと思いますが……」

「あ、それもそうだね」

「どうやら、ゲーム盤の探偵が悩んだのも領ける謎のようですね」

咲夜の纏めに、探偵たちが一様に頷く。それを見て、はてさてと言いたげな表情で、パチュリーは紅茶を一口味わうのであった。

今回出た赤纏め

〔ゲームの登場人物として、主人、メイド、執事、修理工、客人、掃除婦、探偵が存在する〕

〔登場人物は、被害者を含めて八名〕

【探偵は犯人ではない】

【被害者は撲殺された】

【被害者は十三時から十四時までの間に殺害された】

【犯人は一人】

【共犯者は存在しない】

【ボイラー室の出入りは部屋前の廊下と繋がるドアを通ることでのみ可能】

【被害者の遺体は客室にて発見された】

【客室とボイラー室は同じ部屋ではない】

今回出た証言纏め

《主人：十二時から十三時半まで執務室にいた。そして十三時半にメイドを呼んで三分ほど打ち合わせてしていた》

《執事：十三時半に御主人様に紅茶をお運びしました。その後はお客様の世話をしておりました》

《メイド：十三時から十三時半までは掃除婦の手伝いをしておりました。その後三十分ほど執務室におりました》

《修理工：悪いが今手が離せないんだ。用があるなら十五時を過ぎてからにしてくれ》

《客人：十三時から主人と執務室で三十分ほど話した後、客間に移動してゆっくりしていたよ》

《掃除婦：十二時からボイラー室前の廊下を掃除していましたよ。十三時半からは探偵さんと話していましたよ。三十分ぐらいだっけ》

《探偵：そういえば、十三時から十三時半までだが、私が執事さんと一緒にいたから、少なくともその間はアリバイありだな》

《掃除婦：修理工さん？ 十二時にボイラー室に入っていくのは見たけど、出てくるのは見ていないね》

第十三盤、解答編

当ゲームにおける基本ルール

1. 〔で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
2. 』で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。ただし、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
3. 魔女は提示された青字に対して、赤字を使って反論する義務を持つ。青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、探偵の勝利となる。なお、赤字での反論が有効かどうか、探偵はよく検証する必要がある。
4. 人間側は「で囲われた文章を提示することで、
魔女に対しその文章を復唱することを要求できる。

ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。

5. 探偵は、復唱要求や青き真実を使うまでもない疑問、質問を魔女に問うてもよい。ただし、魔女側はそれに答える義務を負わない。

当ゲーム盤における追加ルール

一・《》で囲われたものを証言とする。証言はゲーム盤の登場人物から得る事が出来る。

証言の内容は、その証人にとって主観的な事実である。

ただし、証人にとって主観的な事実が現実の事実と同一であるという保証はない。

二・証言は赤字と同様の働きを持つものとする。魔女側は探偵の青き真実に対し、

証言を用いて反論しても構わないものとする。

三・証人が証言に主観的な偽りを述べることはない。

ただし、犯人のみ証言に嘘を混ぜる可能性がある。

以上

「……とりあえず、本当に相互での証明が成されているかどうか、それを確認しましょうか」

まず、そう口火を切ったのはレミリアだ。

「前提として、殺害時間は十三時から十四時。その間のアリバイを、証言者達は三十分区切りで証言している。それに関して、修理工を除いた登場人物達は、相互で証明をしている、ようには見えるわね」

「そうですね。ただ、まだこの時点では相互での証明が出来ているものはいません。あくまで片方が、誰々と一緒にいたと証言しているだけですから」

「じゃあまずは、そこを一つずつ確認していけばいいわけですね。えーっと、となると、青き真実を一つずつに出していけば良いんですか？」

「パチュリーのおまけを期待しないのであればそうなるね。んじゃ、前半は探偵によって証明されている執事からいつてみよっか。『執事の証言は嘘で、本当は十三時半から

十四時までの間に犯行を行っていた』

『《客人：十三時半から十四時まで、確かに執事さんは私と一緒に客間にいたよ》』

『あつさり証明されたね。まあ、ここで拒否されるとかは思っていなかったけど』

『次は私が客人に対して行くわ。『客人の証言は嘘で、本当は十三時から十三時半の間に犯行を行っていた』』

『《主人：十三時から十三時半まで、確かに客人は私と執務室で会話をしていた》』

『でしようね』

フラン、レミリアと順に青を述べ、それを小悪魔が証言で斬る。それに姉妹は、当然だろうと悔しがる素振りも見せずに頷く。

『順番からすると、今度は主人ですかね。あ、でも主人に関してはメイドも証言していましたか』

『いいえ、メイドの証言はあくまで執務室にいたとしか言っていないわ。主の居ない部屋にただ立っていたという可能性があるわよ』

『ああ、言われてみればそうですね。じゃあ、『主人の証言は嘘で、本当は十三時半から十四時までの間に犯行を行っていた。その際、メイドは誰もいない執務室に待機していた』』

『《メイド：十三時半から十四時まで、確かに御主人様と打ち合わせをしております》』

「ちよつと期待しましたけど、やはり違いましたか」

「では、メイドを。『メイドの証言は嘘で、本当は十三時から十三時半の間に犯行を行っていた』」

「《掃除婦：十三時から三十分間、確かにメイドは私と掃除をしていたよ》」

「ふむ」

美鈴、咲夜とさらに青き真実を提示したが、やはりそのどちらもが小悪魔の出す証言によつて斬られる。

「で、その掃除婦に関しては、残りの三十分を証明しているのは探偵なのよね。小悪魔、面倒だからもう探偵の証言を出してくれない？ どうせ斬れるんでしよう？」

「よろしいですか？」

「問題ないわよ」

「では、《探偵：確かに、私は十三時半から十四時まで、掃除婦さんと話していたな》」

「ありがとう」

札を言つて、レミリアは腕を組む。

「犯人が一人であるという前提がある以上、これで相互でのそれぞれのアリバイは証明されたということになるわね」

「とはいえ、残つた修理工も、掃除婦の証言から犯人とするには難しい」

「そうなのよね……」

ううむ、と四人は難しい顔をしながら考え込む。うーん、とそれぞれに唸り声を上げながら、思いついたものを片っ端から述べていく。

『実は被害者は自殺』とか？』

『被害者は第三者によつて殺害された』

『実は修理工が犯人で、変装をして部屋から出たから、掃除婦から気付かれなかった』というのはどうでしょうか？』

『登場人物たちは他の登場人物がどのような変装をしようとも、その正体を誤認することはない』

『被害者は十三時以前に襲われたがその場ではまだ生きており、その後十三時から十四時までの間に死亡してしまつた』というのはどうかしら』

『被害者は即死』よ』

『実は死亡時刻と証言の時刻で別日を指している』というの、ないですかね？』

『各証言者は被害者が死亡した日と同日の出来事について証言している』

むう、と困つたような声が誰かの喉から漏れ出るのが聞こえる。それぞれに青を飛ばしてみたものの全てを斬られ、しかもそのうちの一つでもかすつていゝという手ごたえすらない。どうしたものか、と四人の内心が一つになつたところで、

「悩んでいるのなら、少しヒントでも上げましょうか」

四人を眺めていたパチュリーが、ふと口を開いた。

「ヒント？」

「ええ。このままだと状況が動きそうにないもの。建前上、魔女は探偵のリザインを欲するということになっていくけれど、かといって謎を解かれぬというのも面白くないものなのよ。屁理屈は好むけど、不条理を好まないのが魔女なのだから」

「パチエの魔女定義もそれはそれで面白いけれど、貴女が出そうとしているヒントというのは、結局なんなのかしら？」

「そうね。レミイ、誰か適当に三人、登場人物を挙げてみてくれないかしら？」

うん？ とレミアはパチュリーの言葉に眉をひそめた後、

「じゃあ、主人、メイド、客人の三人を」

「では、【主人、メイド、客人は犯人ではない】」

『……?!』

パチュリーの赤に、探偵たち四人はぎよつとした目を向ける。わざわざ断った上でのヒントだったので、それなりに構えてはいたつもりだったが、流石にこうも直接的な赤が出てくるとは思っていなかったということだろう。

「ちよつと、パチュリー。そんな直接的な奴、ここで言つてよかったの？」

「これぐらいしたほうが皆の思考も動くでしょう？　待ちつばなしはつまらないわ」
「かもしれないけどさあ……」

いいのかなあ、とフランが呆れたようにパチュリーを見るが、パチュリーはどこ吹く風といった風に紅茶を飲んでいる。それに、まあいいかと結論をつけて、探偵達はまた考え始める。

「とりあえず……これで容疑者が半分になりましたね」

「残った容疑者は執事、掃除婦、修理工の三人のみだもんね。これ、お姉さまが犯人を選択肢に含まなかったのは良かったのかな？」

「おそらくですが、変わらないのではないのでしょうか。その場合は、お嬢様が選んだ三人以外を犯人ではないと言えば良いだけですから」

「確定でシロの探偵を選ばない限り、どっちにしろって感じになるわけですか。マジシャンのトリックみたいですね」

「そういうわけだから、私の選択を元に推理を進めても意味無いでしょうね。だから、素直に執事、掃除婦、修理工の誰が犯人なのかを考えてみましょうか」

とはいっても、と美鈴が渋い顔をする。

「執事、掃除婦は共に三十分は探偵にアリバイを証明されています。残り三十分にしたって、客人とメイドからそれぞれに保証されていますからねえ。修理工にしたって、

部屋から出られないんじゃないでしょうか？」

「そこなのよね……」

「二人二役をしているものがある、という可能性は無いでしょうか？ 例えば、執事と客人が同一人物で、十三時半から十四時までの間に被害者を殺しに行った、とか」

「でも十三時から十三時半まで、執事は探偵と、客人は主人とそれぞれ話していたんじゃないよ。」

「そこは、三人が一緒にいたのでは？ 別に一対一で話したとは言われていませんし」

「でもその場合は人数の都合がつかないわよ。このゲームの登場人物は被害者を合わせて八名と、赤で証明されているもの」

「……被害者が二人いた、というのはどうでしょうか？」

二人？ とレミリアと咲夜が首を傾げる。

「ええ、被害者が二人いて、その他の登場人物は実は六名だった。あぶれた客人を執事が兼任すれば、咲夜さんの推理が通りそうな気もしますが」

「やってみましょうか。『実は被害者は二人おり、執事と客人は同一の人物であった』という青ですが、パチュリー様？」

「面白い発想だとは思いうけれど、【被害者は一人だけ】よ。そうね、おまけに言っておあげらるわ。【主人、メイド、執事、客人、修理工、掃除婦、探偵はそれぞれ一人ずつ存在して

「ん？」

「んー、違いました、か」

「割と良い線行ったと思っただんですけどね」

「ふうむ……」

「じゃあ他に何か、と考え始める三人だったのが、

「え？ もつとシンプルに考えればよくない？」

「というフランの言葉に、素早く視線を向ける。」

「何か思いついたの？」

「思いついたって言うか、単純な話じゃん。咲夜は誰かが名前を兼任しているって思っ

たんでしょ？」

「ええ」

「で、美鈴はそれに被害者が二人いるって発想になったんだよね？」

「はい。そうしないと、登場人物の人数が合いませんから」

「いや、何でそこでそうなるのさ。もつと普通に、もう一人誰か知られていない登場人物、犯人がいるって考えれば良いと思うんだけど」

「……え？ いや、しかし、それは……」

「妹様、登場人物は八名いて、それは主人、執事、メイド、客人、修理工、掃除婦、探偵、

被害者の八名で埋まっているじゃないですか」

「だーかーらー！ 確かにパチュリーは登場人物として主人たちがいるって言ったけど、それだけしかないとは言っていないんだってば！ 八名にしても、被害者を含めて八名なんだから、その被害者を誰かが兼任すればもう一人スペースが出来るでしょ？」

フランの言葉に、当初は怪訝な表情を浮かべていたレミリアたちであったが、その説明を聞くにつれ、段々とその表情は理解から来る驚きに満ちていき、最終的には納得の色へと変化しきっている。

「確かに……その考えならもう一人、犯人を登場させる事が出来るわね。——そういうこと。だから、修理工の証言があの一つしか出なかったのね」

「どういうことですか？」

「おそらくだけれど、あの証言は探偵が、事件発生以前に得たものだと思うわ。師匠や掃除婦にも話を聞いていたみたいだし、その前に修理工にも話を聞こうとしていたんでしょう。でもそれは断られてしまい、結局聞けずじまいで終わってしまったんですよ」

「そういうことですか……」

「他の証言にしたって、嘘を言っていないくとも、本当の事を黙っておくことは出来ますか

らね。おそらく、犯人は堂々と犯行を行ったのでしよう。ただ、証人達がそれを証言しなかっただけで」

「あの幻想も、いつも通りとはいえトラップであつたと。よつぽど犯人が上手い言い訳をしない限り、悩むことなく犯人を特定できるわね」

「……あ、そういえば、ボイラー室と客室は別つて赤がなかつたつけ？」

「そこは問題ないでしょう。確かに修理工は部屋を出るところを見られていないけれど、そのパーツを隠して持ち出すことは出来るでしょうし。適当にバラバラにして、必要であれば往復すればいいわ」

「ああ、それもそうだね。というわけでパチュリー、私達は『実は修理工が被害者であり、事前に述べられていない八人目がそれを殺した』っていう青を出すけれど、どう？」

フランの期待のこもつた視線と、レミアアたちの自信に満ちた視線。それぞれの視線を受けたパチュリーはそつと息を吐いた後、

「——お見事。ここにリザインを宣言するわ」

と、探偵たちに対し、敗北を宣言するのであつた。

「……まあ、おおよそはそつちの推理通りよ」

自身の推理からの勝利ということで、喜びの声を上げていたフランが落ち着いた所

で、パチュリーは今回の謎についての補足を始める。

「皆の言ったとおり、実際は主人たち以外に犯人が存在したの。で、その犯人が修理工を殺し、適当にばらした後客室まで持つて行った、と。まあ、そういうことね。犯行動機とかは、まあどうでもいいことだわ」

「これ、ゲームの登場人物の視線で見ると、犯人はあまりに堂々としすぎね。最初からメタ的な目線で見る事を想定した謎だった、と」

「登場人物目線でも、一部の隙もないゲーム盤つて、案外珍しい気もするけれどね。ところで、今回の新ルールはどうだったかしら？」

「結構面白かったわ。ただ、これって魔女からすると結構な手間よね？」

「ええ、そのとおりよ。試しにやってみただけで、正直そう何度もやりたくはないわ」「魔女と補佐とで、意識のすり合わせを完璧にやっておかないといけませんからね。かといって一人でどっちもやろうとすると、管理が大変だと思います」

「疲れた、とパチュリーと小悪魔が態度で示す。結論から言つて、この証言という新ルールは、そう易々と追加することは出来ないようである。」

「まあ、これはこれで面白かったのも事実だから、いつかまたやってみるのもいいかもしれないわね。ただ、本音で言うとな、今度は私も探偵側で証言に挑みたいわ」

「私も同意見です。ああ、でもパチュリー様、後で今回の反省会と、今後の為に証言ル―

ルの推古を行うべきかと」

「ええ、そうね。上手いこと煮詰めて、烏天狗の新聞に載せさせましょうか」

そうすれば、今度は私達も探偵側に回れるものね。そう、パチュリーはしみじみと眩くのであった。

第十四盤、出題編

当ゲームにおける基本ルール

1. 〔〕で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
2. 『』で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。ただし、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
3. 魔女は提示された青字に対して、赤字を使って反論する義務を持つ。青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、探偵の勝利となる。なお、赤字での反論が有効かどうか、探偵はよく検証する必要がある。
4. 人間側は「」で囲われた文章を提示することで、魔女に対しその文章を復唱することを要求できる。ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。

5. 探偵は、復唱要求や青き真実を使うまでもない疑問、質問を魔女に問うてもよい。ただし、魔女側にそれに答える義務を負わない。

以上

「――では、屁理屈推理合戦を開始しましょうか」

そう、永琳が何処となく嬉しそうに告げたところ、スッと彼女に示すように手が上がった。

「とりあえず、異議があるのだけれど」

と、手を上げた妹紅が永琳に言うのと、永琳は小首を傾げる。

「あら、何かしら」

「もしかして、私と慧音は屁理屈推理合戦の頭数をそろえるために呼ばれたのかしら？」

「ええ、そうよ」

妹紅の問いかけに、永琳は平然とした様子で頷いてみせる。すると、妹紅はちらりと横を見て、

「いや、人選ミスでしょ。というか、どうして私が、輝夜と一緒に推理ゲームをやらなくちゃいけないんだ」

「あら、どうせやるなら、ライバルがいるほうが張り合いも出るじゃない」

「大人しくそれにしたがってアンタ達と遊ぶ理由もないんだけど」

納得がいかない、と妹紅が苦言を呈する中、あらあらと、輝夜は対称的に乗り気な様子で口を開く。

「いいじゃないの、妹紅。暇つぶしになるし、なによりたまにはこういう勝負も面白いというものよ。いつもいつも、戦いで決着をつけるというのも雅じゃないし、時には頭脳勝負としやれ込むのもいいと思うのだけれど」

「それで勝ったところでさして嬉しくないんだけど」

「でも、負けたら悔しいでしょ？ このまま永琳の提案を飲まずに帰った場合も、同じことだと思っけれど」

そう輝夜が諭すと、むうと妹紅は黙りこくる。やや気に入らないところはあれど、輝夜の言葉に一定の納得がいったようだ。

そんな妹紅の様子を見て、宥めるように慧音が口を開く。

「まあいいじゃないか、妹紅。初めてのゲームを姫と一緒にやりたくない、というのも分かるが、むしろ初戦で姫に勝てるように頑張ってみるのもいいんじゃないか？」

「……………慧音がそういうなら、今回ばかりは乗ってあげるわ。手加減はしないよ、輝夜」

「望む所よ」

と、ようやく妹紅が乗り気になったところで、しかし、と慧音が呟く。

「そういうことなら、私が抜けるか、あるいは姫側に誰か一人を追加した方が良いんじゃないか？ このままだと二対一の状況になるが」

「それぐらい、姫にとつてはちょうどいいハンドレよ。アウエイつてところで納得しときなさいな」

「そうそう。このぐらいのほうが面白いわ」

「そちらがいいならいいが、まあそれもそうだな」

どっちにしろ、別にこの勝敗如何で決定的何かが決まるわけでもない。遊びの範疇なら別にいいかと、慧音も慧音で本腰を入れることに決める。

「さて、じゃあ全員が納得できたところで、早速始めて行きましようか。まずは皆様、此度の幻想をお聞きください……」

とうとう狂ったのかな、とドアを見ながらてゐは呟く。そう思う対象は、先ほどまで会話をしていた鈴仙だ。

『私、魔法が使えるようになったのよ！』

今から一時間ほど前、唐突にそんな事を言い出した彼女に、てゐは今まで彼女にやり続けていたイタズラが、彼女の頭に悪影響を与えてしまったではないかと思つた。それぐらい、非常に馬鹿げた妄言としか取れなかつたからだ。

そんなてゐの胸のうちの気付いたのであろう。鈴仙は軽く頬を膨らませて、

『気になるなら証明してあげる！ 今から私がその部屋の中にドアを使わずに入つて見せるから、てゐはそこで見張つていて！』

そう言い残し、鈴仙は何処かへと走り去つてしまった。それから小一時間ほど、てゐは何となくドアを見張り続けているのである。

正直、何をやっているのだろうという思いは、てゐの中に確かにある。だが、自分の所為で狂つてしまったのではないかという考えも僅かばかりあったので、ある意味においての責任感のようなものから、こうして言うとおりのドアを見張り続けているのである。

とはいえ、それももう飽きてきた。これ以上付き合うのはいい加減に面倒だと、てゐが見張りを始めてから、一度も開かなかつたドアを開けると、そこには何故か、鈴仙の姿があつた。

『あ、やつほー。これで私の魔法、信じてもらえた？』

馬鹿な、とてゐは混乱しながら思う。このドアはずっと自分が見張り続けていて、今開けるまで一度も開いていない。だというのに、どうやって鈴仙は部屋の中に入ったのだろうか。

『——これが、魔法だよ』

そんな、鈴仙の勝ち誇つたような声が、混乱するてゐの頭に入りに入り込んで

いくのであった……………

……以上、と幻想を語り終え、永琳は一呼吸を空けた後に続ける。

「では、これを元に赤を述べるわね。まず、「ゲーム開始時において、鈴仙は部屋の外にいた」「ゲーム終了時において、鈴仙は部屋の中にいる」そして、「ゲーム開始時からてゐるがドアを開けるまで、てゐるはドアの開閉を目撃していない」「ゲーム開始時からてゐるがドアを開けるまで、てゐるはドアを確かに見張っていた」

さて、と一先ずの赤を述べた後、永琳は三人の顔を見ながら言う。

「では探偵の皆様。魔女の主張する魔法を、どうか人間のトリックであると見破ってみてくださいな」

屁理屈推理合戦、その開幕だ。

「まずは部屋の確認が必要、というところか」

一番初めに口を開いたのは、やや意外なことに、慧音であった。

「いくつか復唱を要求したい。復唱要求、「部屋に窓はない」「部屋に通風孔の類はない」「部屋に人が通れるような穴は空いていない」

「応じましょう。【部屋に窓は存在しない】【部屋に通風孔の類はない】【部屋に人が通れるような穴は空いていない】」

「……なるほど、非常に素直に考えるのであれば、ドア以外に部屋に入る手段はなさそうだが……」

「そんなに素直な物とは思えないけれどね。というわけで率直に復唱要求、「ドアを通る以外に部屋を出入りする手段は無い」

「残念ながら、拒否させてもらうわ。そのあたりの穴埋めも頑張つてちょうだいな」

「あらあら」

復唱を拒否されたことに対し、要求した当人である輝夜は、しかし何処か嬉しそうな表情を浮かべる。あまりスムーズに行き過ぎても面白くないし、というような雰囲気

だ。

「じゃあ今度は私のターンだな。とりあえず復唱要求として、「鈴仙はドアを通って部屋に入った」

「うーん……拒否、かしら。それを答えてしまうと、姫のそれにも影響が出るだろうか」

「それならそれでいい。青を提示する、『てゐは何らかの外的要因で鈴仙がドアを開けるのを見逃した』」

「斬るわ、【ゲーム中に誰かがドアを開閉した場合、必ずてゐはそのことに気付く】」

「じゃあ開閉しなければいい話だ。『鈴仙はドアを壊して無理やり部屋に入った』」

「それは……そうね、【ゲーム中、てゐは誰かがドアの周囲に来るのを見ていない】と斬りましようか」

「……また、誰か？ 鈴仙じゃなくて、か？」

再び出てきた、誰か、という言葉。しかし、一度目の時と違い、二度目のこれは妹紅たちに引つかかる物を覚えさせる。

「随分と範囲が広まるわね。それだと、鈴仙以外の不特定の間人もドアに近づけなくなるわ」

「その方がそちらにとつても都合が良いんじゃないかしら？ サービスよ、サービス」

ふうん、と永琳の挑発的な返答に、輝夜と妹紅はスツと目を細める。どうやら本腰を入れて推理を始めるつもりになったらしい。その様子を、横で見えていた慧音もまた、二人に触発されるように、より深く考え込み始めた素振りを見せる。

「…………ふいふ」

そんな三人の様子を見て、永琳もまた楽しそうに笑みをこぼすのであった。

今回出た赤字纏め

【ゲーム開始時において、鈴仙は部屋の外にいた】

【ゲーム終了時において、鈴仙は部屋の中にいる】

【ゲーム開始時からてゐるがドアを開けるまで、てゐるはドアの開閉を目撃していない】

【ゲーム開始時からてゐがドアを開けるまで、てゐはドアを確かに見張っていた】

【部屋に窓は存在しない】

【部屋に通風孔の類はない】

【部屋に人が通れるような穴は空いていない】

【ゲーム中に誰かがドアを開閉した場合、必ずてゐはそのことに気付く】

【ゲーム中、てゐは誰かがドアの周囲に来るのを見ていない】

以上

第十四盤、解答編

当ゲームにおける基本ルール

1. □で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
2. 『』で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。ただし、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
3. 魔女は提示された青字に対して、赤字を使って反論する義務を持つ。青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、探偵の勝利となる。なお、赤字での反論が有効かどうか、探偵はよく検証する必要がある。
4. 人間側は「」で囲われた文章を提示することで、魔女に対しその文章を復唱することを要求できる。ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。

5. 探偵は、復唱要求や青き真実を使うまでもない疑問、質問を魔女に問うてもよい。ただし、魔女側はそれに答える義務を負わない。

とりあえず、と妹紅が口を開く。

「密室を崩せるかどうか、を試してみるか。『部屋に穴はないと聞いていたが、それはゲーム終了時のことであり、実際はゲーム中に一度穴が作られ、その後修復された』というのはどうだ？」

「【ゲーム中、壁、窓、天井、床、ドアのいずれも破壊されていない】わ」

「じゃあ、そうだな。『実はてゐが見張っていたドアのほかにもう一つドアがあつて、そこから鈴仙が入った』」

「【部屋にドアは一つしかない】」

「ん、んん。なら『実は壁というのはウォーターカーテンのことで、簡単に突っ切る事が出来た』というのはどうだろう？ 通れはするが、穴は空いていないってことになるんじゃないか？」

「面白いとは思うけれど、【壁はウォーターカーテンではなく、そのままの状態を通り抜けることは不可能】よ」

「そのまま、つてのは？」

「壊さなかったら、という意味よ。赤じやないから、信じなくても構わないけれどね」

ふうむ、と妹紅は腕を組み考え込み始める。また新たな可能性を模索する彼女に代わり、口を開いたのは慧音だ。

「一つ、確認したいのだが、ドアの開閉というのは開けただけ、または閉めただけの場合も含むと考えていいだろうか？ それと、内開き、外開きだけでなく、スライドさせるタイプのドアの場合も開閉に含むのか？」

「そうね、【押そうが引こうかスライドさせようが、ドアを開く、または閉じると呼称される現象が起きたのであれば、それはドアが開閉されたとみなす】としておくわ。これなら十分でしょう？」

「感謝する。となると、やはりてゐるがいる限りドアを開けるのは不可能であり、また『最

初からドアは開いており、てゐは鈴仙が閉じた後にドアを開けた』というのは無理なわけだな？」

「そうね。【ゲーム中、誰かがドアを開閉した場合、必ずてゐはその事に気付く】【ゲーム開始時からてゐがドアを開けるまで、てゐはドアの開閉を目撃していない】加えて言えば【ゲーム中、てゐは誰かがドアの周囲に来るのを見ていない】という既存の赤たちがある以上、その青は簡単に切れるわ」

「やはり、か。となるとそもそもドア以外の出入り口を探すのが真実への道なのだろうか……」

ぶつぶつと慧音が呟きながら虚空を眺め始めたところで、順番だと言わんばかりに、今度は輝夜が口を開く。

「そろそろ私も動きましようか。一先ず確認として、復唱要求、「鈴仙はてゐがドアを開ける前から部屋の中にいた」のよね？ まさか開けたあとから入ったとか、一緒に入ったとかではないと思うけれど」

「その通り。【鈴仙はてゐがドアを開ける前から部屋の中にいた】わ。それと、まあ後から聞かれるかもしれないから先に答えるけれど、【てゐがドアを開けたのは一度だけであり、その時点で既に鈴仙は室内にいた】」

「二度目に入って、二度目についてのはないわけね。ついでに、てゐがドアを開けて招きい

れた可能性も無くなったと見ていいかしら。となると、そうね……無茶苦茶かもしれないけれど、『鈴仙は当初 “部屋の外” という名前の場所について、その後 “部屋の中” という場所に移動した』というのはありかしら？」

流石に、自分でも突拍子もない事をいつているのは理解しているのだろう。やや躊躇いがちに発された輝夜の推理に対し、永琳は面白そうな表情を浮かべ、口を開く。

「非常に屁理屈っぽい推理だとは思うけれど、『部屋の中、部屋の外というのは部屋と呼ばれる空間の外部、内部という意味であり、“部屋の外” や “部屋の中” という名前の場所があるわけではない』と返すわ。ついでに、『部屋は一つしかない』とも言っておきましようか。本当に面白いとは思うけれどね」

「面白いだけじゃ意味がないのよね。まあ、無茶苦茶ついでに、『実はドアは非常に分厚く、その中に鈴仙が入っていた。ドアの中にいるため閉まっているときは室内におらず、てゐるがドアを開けたことで室内に入った』というのは……てゐるが開ける前から部屋にいたという赤に引っかけかりそうね」

「まあ、そうね。ついでに言っておくけれど、『ドアは人が入れるほど分厚くはない』し、『ドアが外開きであろうと内開きであろうと、真相には影響を及ぼさない』とも答えておくわ」

「流石に無理やりすぎたかしらね。とはいえ、いまいちピンと来るものがないわね……」

『実は天井がなく、上から簡単に入る事が出来た』とか?」

「【部屋に天井はある】し、【部屋に床はある】わ。ついでに言っておくけれど、【床、壁、天井、ドアは取り外し不可能】だから、そういうのもなしね」

流石にそうよね、と永琳の赤に対し輝夜は呟く。ピンと来るものがないというのは事実のようで、そのまましばし黙り込んでいたのだが、

「……これまでの赤から考えるに、やっぱりドアに突破口がある気がするわね」

と、誰に言っているのかも分からぬ調子で呟く。すると、それに対し慧音と、不承不承な素振りであるが妹紅も頷く。

「同感だな。こちらがあまり触れていないのもあるのだろうが、ドア関連と比べて壁などへの赤は割と気軽に出している気がする」

「同じく。勘だけど、どうにもドアに仕掛けがあるようにしか思えないな」

「そうになると、一体何があるのかという話だけれど、まさか『ドアに人間大の大きさの穴が空いている』わけでもないだろうし」

「どこかで聞いたような気がするけれど、【ドアに人間が通れる大きさの穴は空いていない】わ」

「……………そこが引つかかるんだよな」

ふと、妹紅が口を開く。

「穴関連に関して、度々、人間が通れるって表現が出てきているんだよな。どうもそれが引つかかる」

「人が通れない大きさの穴ならあるかもしれないということか？ いや、だとしてもどうやって部屋の中に入る？」

「ああ、ああバラバラにするという方法はあるんじゃない？ 『誰かが鈴仙の身体をバラバラにして放り込んだ』とか」

「血なまぐさい推理だな……」

「いや、屁理屈推理ってそういうの多いじゃない……なんで私が輝夜の肩を持たなきゃならないんだ」

「どつちにしろ、『ゲーム終了時に鈴仙は生存している』わよ。ヒントで言っておくけれど、今回はそういう系の真相じゃないから」

「あら、そうなのね」

「となると、小さい穴が空いていても無理なのだろうか。そもそも、誰も見ていないという赤がある以上、ドアに近づけないじゃないか」

「それもそうね。ううん……?」

「——あ、分かったかもしれない」

唐突に、妹紅がボンと手を叩く。彼女の発言に対し、輝夜と慧音は驚いたような表情を彼女に向ける。

「え? 分かったの?」

「いや、あくまで可能性の話なんだが……鈴仙って実は人間じゃないんじゃないか?」

「それはそうでしょ。あの娘はウサギなんだから」

「いや、そういうリアルの話じゃなくて。『実は鈴仙は人間よりも小さい動物で、だからここ人間には通れない大きさの穴を通って室内に入った』ってのはどうだろう?」

「【ドアは破壊されていない】わ」

「元から空いていれば仕様だろ? ほら、あのドアにつけて猫とか犬を通す、ペットドアって言うのか? ああいうのがあればいいと思うんだけど」

どうだろう? と妹紅、そして慧音と輝夜は永琳を見る。三人の視線に、平然とした素振りを見せる永琳であったが、その間を空けずしてため息をついてみせる。

「——お見事。ここにリザインを宣言するわ」

「よー!」

リザインの宣言に、妹紅は思わずガツツポーズを決める。そんな彼女に、慧音と輝夜はパチパチと拍手を送る。

「そういうことだったのか。凄いな、妹紅」

「その考えはさっぱり頭の中から抜け落ちていたわね。上手く思いついたものだけ、褒めてあげる」

「相変わらず何処か引つかかるなお前は……!」

「まあまあ、いいじゃないか。それで、真相としてはどうなのだろうか?」

「そうね。まあ説明することもあまりないけれど、一応語っておくならば、鈴仙という名前の猫がペットドアを通って部屋の中に入ったという話よ。何故かドアを見張っていたてゐの前で、堂々とそこを通って入ったというだけ。ドア自体は開けていないから、開閉はてゐの一回だけとしているわ」

「誰も見ていないというのも、今から考えればヒントでもあるのね。確かに、猫に対し、誰か」とは言わないもの」

「ああ、それもそうか。妙に引つかかるなとは思っていたんだが、そういうことだったのか」

「まあ、そういうことよ。正直、もう少し早く解かれると思っていたんだけど、そこが想定外といえば想定外だったわね」

「案外出てこなかったからな、鈴仙の正体への疑い。普通に人間だと思っていたから」
「まったくだな。まさか猫だったとは思っていなかった。というか、鈴仙がモデルならウサギのほうが良かったんじゃないだろうか？」

「その辺は単に、猫の方が自然だと思っただけよ。一般家庭でウサギを放し飼い、というのもあまりピンと来なかったから」

「ああ、まあ、それもそうかしらね」

ややこしいのは事実だけど、と輝夜は最後にそう呟くのであった。

第十五盤、出題編

当ゲームにおける基本ルール

1. 〔で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
2. 『で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。ただし、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
3. 魔女は提示された青字に対して、赤字を使って反論する義務を持つ。青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、探偵の勝利となる。なお、赤字での反論が有効かどうか、探偵はよく検証する必要がある。
4. 人間側は「で囲われた文章を提示することで、魔女に対しその文章を復唱することを要求できる。

ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。

5. 探偵は、復唱要求や青き真実を使うまでもない疑問、質問を魔女に問うてもよい。ただし、魔女側はそれに答える義務を負わない。

以上

「さてそれじゃ、第二問を始めましょうか」

少しの休憩を挟んだ所で、永琳がそう宣言する。すると、輝夜と慧音、そして意外と乗り気になってきたのか、妹紅もまた特に何か不満を言うでもなく、自然と永琳に視線を向ける。

そうすると永琳は、きちんと自分に注目が向いていることに、満足そうに一つ頷いて、

「ではまずは、いつもの幻想から始めましょうか——」

『ああ、失敗したっ!』

道を全力で走りながら、焦ったように阿求が叫ぶ。体が弱く、普段は絶対にこんな事をしないだろう彼女が、何故息を切らしながら全力で走っているのか。

『何でこういう時に限って寝坊する!?! これじゃ小鈴に本当に怒られるじゃないの!!』

待ち合わせに遅れてしまう。それが、彼女が本気で焦っている理由であった。その程度、と思うかもしれないが、今回ばかりは、本当に遅れてはいけない待ち合わせであつ

た。それこそ、普段はどちらかというところ、小鈴を叱る立場である阿求が、逆に滅茶苦茶に叱咤されてしまうことが目に分かるほどに、重要で絶対に遅れてはいけない待ち合わせなのだ。

しかし、現実は無情と言うより他ない。ちらと阿求が時計を見れば、既に待ち合わせの時間まで十分を切っている。まだまだ待ち合わせ場所までの距離は遠く、運の悪いことに近くにはタクシーの一台も走っていない。そもそも、本来であれば使う予定であった車が、当日になって故障してしまった時点で、もうお仕舞いだったのかもしれない。

『間に……合わない……!』

体力を使い果たして立ち止まり、荒い息を吐きながら、阿求は万事休すとうなだれる。もうどうしようもないと、彼女が諦めてしまった、その時だ。

『——助けてあげましょうか?』

『え?』

謎の声に、阿求が頭を上げてみると、そこには一人の女性が立っていた。長い金髪と紫の衣装、そして大きな日傘を持ったその女性は、荒く息を吐く阿求に向かって、妖艶な笑みを浮かべて言う。

『貴女、何処か遠くに行きたいんでしょう? よろしければ、私が連れて行って差し上げますわ』

『ありがたい……申し出ではありませんが……もう、時間がないですから……』

疑うよりも先に、阿求は時間がないことを理由として、女性の申し出を断つた。疲れと焦りから頭が回っていないが故の返答であったが、それに対し女性は、クスクスと笑つて、

『大丈夫ですわ。今からでも、十二分に間に合いますもの——こんな風に』

『え? ——わっ!?!』

パチン、と女性が指を鳴らす。次の瞬間、阿求の足元に、何やら穴のようなものが空き、その中に吸い込まれるように阿求は落下した。一瞬の浮遊感の後、阿求の体は再び地面に足をつけた。

すると、

『……阿求? え、あれ? いつの間に来たの?』

『…………は?』

いつの間にか目の前に、友人である小鈴の姿が現れていた。何故と思ひ、そして周りの景色から気付く。小鈴が急に現れたのではない。自分の方が、彼女のいた待ち合わせ場所に現れたのだと。

『一体……何が……?』

怪訝そうな表情を浮かべる小鈴を無視して、阿求は周囲を見渡す。一体、何が起こつ

たというのか。その答えが、さっぱり彼女には分からない。分かるのは、あの女性が何かをしたのだろうということくらいだ。

『……これが魔法ですわ』

はたして、気の所為なのだろうか。驚愕する阿求の耳に、あの女性の声が聞こえた気がした……………

「——以上、これが今回の幻想描写よ」

さて、と幻想を語り終えた永琳は、これからが本番であると言いたげに人差し指を立てながら言う。

「赤を述べましょう。【ゲーム開始時において、阿求は地点Aに存在した】【ゲーム開始時において、小鈴は地点Bに存在した】【地点Aと地点Bは十キロメートル以上離れている】【ゲーム開始から十分以内に、阿求は地点Bに到着した】の、まずはこの四つの赤か

ら、推理を始めてもらいましょか」

永遠亭での屁理屈推理合戦、第二幕の始まりである。

「とりあえず、移動系の謎か。単純に考えると、まあ何か乗り物を使ったってことになるんだらうが」

「最低でも、平均時速六十キロ以上ということになるから……まあ、同じく素直に考えるのならば、『自動車を使った』ということになるが」

「【自動車、及び動力源を持つ乗り物は使用していない】
【でしようね】」

切られた赤に輝夜や妹紅、言い出した慧音自身も頷く。流星に、ここまで単純な話だとは誰も本気で思っていない。

「んじや、また素直に、『阿求は高所から落下した』というのはどう？ ええと……」

「地上から十キロ上空からスタートしたとすると、大体一分と経たずに下まで到達するわね。空気抵抗を考えなければ、ということになるけれど」

「誰も頼んでいないんだけど」

「あら、ごめんなさい」

「まあまあ」

しれっとした顔で暗算をした輝夜に、妹紅が不機嫌そうな表情を浮かべて文句を言い、そんな彼女を慧音が宥める。そんな三人に——正確には二人に対し——苦笑しつつ、永琳は先の青に応えるために口を開く。

「今回のゲーム盤において、重力の影響による物体の加速、ならびに減速は発生しないものとする」わ。これでいいかしら？」

「……まあ、とりあえずは」

「機嫌を治せよ、妹紅。しかし、乗り物も落下も駄目となると、次は水かな。『水の流れを利用した』というの？ まあ、どれだけ激流なんだという話になるだろうが」

「それは……」阿求は水流を利用した移動を行っていないで、いいかしら？」

「ふむ？ まあ、一先ずはそれで問題ない」

「あとは……んー、『実は阿求は運動能力に優れており、自転車でも時速六十キロ以上を出す事が出来た』というの？ 確か、自転車の最高速度のギネス記録って時速で百キロ以上が出ていたんじゃないかかったかしら」

「百キロ？ 人力で？」

「かなり特殊な自転車を使ったらしいけれどね」

「ふむ、自転車……」

輝夜の青に、永琳は少し考えるような素振りを見せて、

「……そうね、【阿求の身体能力は一般的な少女のものと同程度】としておくわ。流石に、いくら特殊な自転車でも、動力がない以上普通の女の子じゃ時速六十キロは出ないでしょう」

「さっきの重力云々は、坂道を下った場合も適用されると考えていいのかしら？」

「勿論」

「ありがとう」

「しかしそうになると、一体全体どういうことになるのか……」

ふむ、と三人が考え込む素振りを見せる中、ふと永琳が口を開く。

「ああ、そうそう。一つ、念のための注釈として、赤を追加しておくわ。【今回のゲーム盤は、現在の外の世界と比べてある程度未来の話である】」

「……未来？」

どういう意味だ、と永琳の赤に対し、三人は怪訝そうな表情を浮かべる。

「ええ、まあ、念のためだけだね。私は外の世界における技術レベルや社会構造なんかを厳密に把握しているわけでは無いから、その齟齬を誤魔化す為の赤だと思って頂戴。ただ、あくまで基本的には現在のものだから、よほど無茶苦茶な真相ではないと思ってちょうだい」

永琳の言葉に、じゃあ、と手を上げたのは妹紅だ。

「無茶苦茶っていうのは、例えば『物理法則がそもそも違う』とか、さっきの『一般的な少女の身体能力というのが現実のそれと違う』とか、あとは『全て仮装空間内の出来事であり、現実離れた現象を起こす事が出来る』みたいなことになるのか？」

「そうね、そういうのは違うってことになるわ。だから、『ゲーム盤における物理法則は外の世界のそれと同じ』『ゲーム盤における人類の身体能力は現在のそれと同じ』『仮想空間内での出来事ではない』という風に切る事が出来る。加減が難しいけれど、まあその辺はもう青を使ってちょうだい。面倒でもちやんと切るから」

「なるほど、把握したわ」

しかしとなると、また色々と考えなければならぬことが増えたということになる。一体全体、真相はどういうものであるのか。三人はより深く、思考の海の中に沈み始めるのであった。

今回出た赤字纏め

- 【ゲーム開始時において、阿求は地点Aに存在した】
- 【ゲーム開始時において、小鈴は地点Bに存在した】
- 【地点Aと地点Bは十キロメートル以上離れている】
- 【ゲーム開始から十分以内に、阿求は地点Bに到着した】
- 【自動車、及び動力源を持つ乗り物は使用していない】
- 【今回のゲーム盤において、重力の影響による物体の加速、ならびに減速は発生しないものとする】
- 【阿求は水流を利用した移動を行っていない】
- 【阿求の身体能力は一般的な少女のものと同程度】
- 【ゲーム盤における物理法則は外の世界のそれと同じ】
- 【ゲーム盤における人類の身体能力は現在のそれと同じ】
- 【仮想空間内での出来事ではない】

以上

第十五盤、解答編

当ゲームにおける基本ルール

1. 〔で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
2. 』で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。ただし、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
3. 魔女は提示された青字に対して、赤字を使つて反論する義務を持つ。青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、探偵の勝利となる。なお、赤字での反論が有効かどうか、探偵はよく検証する必要がある。
4. 人間側は「で囲われた文章を提示することで、
魔女に対しその文章を復唱することを要求できる。

ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。

5. 探偵は、復唱要求や青き真実を使うまでもない疑問、質問を魔女に問うてもよい。ただし、魔女側はそれに答える義務を負わない。

以上

「……んー、じゃあとりあえず二つほど思いついたから言うぞ」

しばしの沈黙の後、まず口を開いたのは妹紅だ。

「はい、どうぞ」

「まずは一つ目、『地点Aあるいは地点Bが自ら移動した』」

「【地点A、地点B共に移動していない】」

「エレベータはなしと。じゃあ二つ目、『動力源を持たない乗り物を使用した』
【具体的には?】」

「人力車とか、馬車とか。前者はともかく、後者なら出来そうだし」

「ふむ、個別に切つてもいいけど、面倒ね。じゃあ……【動力源が外部に接続されている
ような乗り物は使用していない】とするわ。言いたい事は伝わるでしょう?」

「ん……まあ、そうだな」

「もういいかしら?」

「……癪だが一度下がる」

それは良かった、とからかうように言つて、さてと輝夜は永琳に視線を向ける。

「じゃあ、さっきの妹紅と同じく、外部動力の存在を考えて、『歩く歩道の類を使用した』
【時速六十キロの歩く歩道って、歩けなさそうね。まあともかく、【歩く歩道の類は使用
されていない】わ」

「ならスケールを大きくして、『地球の自転、あるいは公転運動によつて阿求は移動した』
というの? 座標を宇宙的に見るのであれば、これもありだと思ふのだけれど?」

「……んー……そうねえ……」

と、輝夜の答えに対し、永琳は少しばかり考えるような素振りを見せたあと、

「いいわ、【阿求は地球の自転、公転運動で移動したわけではない】」

「あら、切るのにちよつと時間がかかったわね？」

「ブラフ、という言葉があるのは知っていますか？」

「……いや、盤外乱闘するなよ」

フフフ、と何やら互いに含みのある笑みを見せあう二人に、妹紅がやや引いたような視線を向ける。無言の殴り合いでもしていそうな二人の空気を吹き飛ばすように、パンと慧音が軽く手を叩く。

「はいはい、そこまでだ。私も先生に青をぶつきたいから、こつちにターンを回してもらえるかな？」

「ああ、ごめんなさい。どうぞ、慧音先生」

「では、ちよつとぶつ飛んでいるかもしれない推理だが、『地点Aでの阿求と地点Bでの阿求は別人だった』というのはどうだろうか？ 名前の継承で、擬似的な移動を行ったという推理なんだが」

「残念ながら、【開始時の阿求と終了時の阿求は同一人物】よ」

「それはあくまで終了時だろうか？ 今回のゲームで、阿求が地点Bに到達した時点でゲームが終了したと聞いていない。名前の継承を二度行えばその赤は無効になると思うが」

「ああ、言われてみればそうね。じゃあ、「ゲーム中、阿求という名前を名乗ったのはたった一名だけ」とすればいいかしら？」

「ふむ、了解した。こちらは復唱要求だが、「今回のゲームにおいて、阿求、小鈴以外の生物は存在しない」

「もう一人の女はいいのかわ？」

「多分魔女だと思うからな。無駄は差つ引く」

「まあそこは当たり。【今回のゲームにおいて、阿求、小鈴以外の生物は存在しない】という赤も提示しておくわ」

「では、馬やらに直接乗るのも無理か……いよいよ移動手段が見つからないな。使えそうな自然現象やら動力やらがいい加減………ん？」

ふと、慧音が首を傾げ、そして何かに気付いたように両の手を合わせる。

「復唱要求だが、「ゲーム開始時の時点で、阿求は停止している」

「何だ、それ？」

「いや、よくよく考えてみれば、最初から加速していた可能性があったな、と。例えば時速六十キロになるように阿求が投げ飛ばされたとかして、ちょうどそれで地点Aを通過したタイミングでゲームが始まったんじゃないか、と」

『……ああ、なるほど』

と、妹紅と輝夜はピッタリ同じタイミングで納得したように頷く。すると、互いに少しばかり嫌そうな表情を浮かべ、全く同じ姿勢のままにらみ合いを始めてしまう。

「何タイミングを合わせているのよ、輝夜」

「それはこちらの台詞よ。妹紅こそ、私の真似なんてしないでほしいわ」

「はい、はい。だから、喧嘩をするな。で？ 結局、復唱要求はどうなんだ？」

「……………拒否するわ。理由は…………」

三人の顔を見渡し、ハアと永琳はため息をつく。

「まあ、そこまで分かっているならもう無理でしょうね。はい、じゃあ後は、その細かい舞台を説明してもらえるかしら。どうせなら、三人それぞれに言ってみて頂戴」

「三人それぞれに？」

「ええ、その方が面白そうだから」

「じゃあ言い出した私からかな？ 一応私は、『氷上をスケートなどで移動した』イメージだった」

「そうねえ。なら私は、『宇宙空間で宇宙服を着た状態で加速していた』という場面が浮かぶかしら」

「…………その二つ以外に思い浮かばないんだけど。じゃあもう、『直接爆風を受けて空中を飛んだ』ってことで」

正解は、と三人が永琳を見ると、彼女は手を輝夜へと向ける。

「はい、姫正解。今回の真相としては、宇宙空間で時速六十キロ以上に加速した阿求が、止まることなく移動したというものになるわ」

「当てたけど、あんまり嬉しくないわね。慧音先生のいいところ取りをしただけだし」

「あら、素直ね」

「……貴女は私をなんだとと思っているのかしら？」

「性格ひん曲がり姫」

またもやにらみ合いを始めた二人に、慧音は呆れたように頭を押さえる。もう宥めることも諦めたのか、二人は無視して永琳に対し話しかける。

「そう言えば、未来云々というのは何だったのだろうか？」

「ああ、ほら、いくら宇宙でも時速六十キロ超の加速なんて、今の外の技術で軽減できるのか私には分からなかったから、その予防線よ。それと、阿求の身体能力を普通の少女としたから、宇宙飛行士扱いは無理だと思って。気楽に宇宙にいける時代、というバツクボーンが必要になったということよ」

「ああ、そういうことか。加速の理由は？」

「突発的な事故の類よ。少なくとも自発的な加速ではないつもり」

「そんな未来になっても、そういう事故は起きるといふことか」

さもありなん、と呟いて、慧音は視線を、本格的に喧嘩を始めた二人に向ける。

「……この二人も、いつまで経っても変わらなそうだな」
「まったくね」

と、何処か保護者染みた視線を向ける二人であった。

第十六盤、出題編

当ゲームにおける基本ルール

1. 〔〕で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
2. 『』で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。ただし、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
3. 魔女は提示された青字に対して、赤字を使って反論する義務を持つ。青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、探偵の勝利となる。なお、赤字での反論が有効かどうか、探偵はよく検証する必要がある。
4. 人間側は「」で囲われた文章を提示することで、魔女に対しその文章を復唱することを要求できる。ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。

5. 探偵は、復唱要求や青き真実を使うまでもない疑問、質問を魔女に問うてもよい。ただし、魔女側はそれに答える義務を負わない。

以上

「——では、屁理屈推理を始めましょうか」

静やかに、紫が言葉を紡ぐ。博麗神社の縁側で、だらりとしていた霊夢と魔理沙であつたが、紫の宣言を聞いてすぐに身体を起こし、面白そうな視線を向ける。

「何だ、久しぶりじゃないか」

「なるほど、急に来た理由の一つはそれだつたつてわけ。いいわよ、私は。久しぶりに頭を使うのも悪く無いわ」

「良い返事。魔理沙はどうかしら？」

「顔を見てくれよ、顔を。これが断る顔に見えるか？」

見えないわね、と楽しげな魔理沙の表情を見て笑い、では、と紫は居住まいを正す。「それでは、魔女は私、八雲紫。探偵は博麗霊夢と霧雨魔理沙。久しぶりの屁理屈推理合戦を、ゆるりと始めていきましよう」

そのような前口上の後、紫は幻想を語り始める……………

「——ああもう、なんでだい!？」

小野塚小町の声が響く。見渡す限り、土、土、土。圧迫感しかない洞窟の中、小町は苛立ちと共に叫ぶ。

「歩いてても歩いてても、何処まで行っても出られない! 地図通りならもう出ていてもおかしくないはずなのに!？」

持っていた地図を投げ捨て、小町はその場に蹲る。いい加減にしてくれと嘆く小町の脳裏に、洞窟の前に座っていた老婆の言葉が過ぎる。

「この洞窟には魔女がいる……………まさか、そんなはずが……………」

ありえるわけがない。だが、そうであるならば何故、自分は出られないのだ? それこそが、魔女の存在証明ではないのか?

「勘弁してくれよお……………」

絶望する小町を嘲笑うかのように、魔女の笑い声のような音が洞窟内を走るのであった……………」

「——以上」

コホン、と幻想を語り終わったところで、紫は人差し指を立てる。

「では、これより赤を述べましょう。〔ゲーム開始時から終了時まで、小町は洞窟の中に居る〕〔小町は洞窟から出るのに十分な装備を所持している〕〔小町には洞窟を出る意思がある〕〔ゲームは小町が洞窟を出るのに十分な時間行われた〕」

しかし、と紫は二人の顔を見渡す。

「そうでありながら、小町は終ぞ洞窟を出る事がなかった。手段も、意思も、時間も、十分にあったと言うのに。それは何故か。それは、魔女が惑わせたから」

さあ、と紫は楽しげに笑う。

「探偵さん達。小町を襲った魔女の幻惑を、見事晴らして御覧なさいな」

それが、新たななる屁理屈推理合戦の始まりの口上であった。

「まずは定番どおり、状況を見極めるか」

口火を切ったのは魔理沙だ。

「復唱要求だ、「小町は健康体である」「小町は光源を所持している」

「小町は健康体である」「小町は光源を所持している」

「もう少し要求するぜ、「小町は移動を制限されていない」「洞窟内は小町が移動するのに十分な広さがある」

「小町は移動を制限されていない」「洞窟内は小町が移動するのに十分な広さがある」

「ふむ……少なくとも移動の邪魔はされていない、かな？」

「聞いた限りは、だけどね。私も復唱要求、「ゲーム終了時、小町は生存している」

「それに関しては……そうね、「ゲーム終了時、小町は生存している」わ。小町が死亡したから洞窟を出られなくなった、というわけではない」

「なるほど。しかし、どうにも良く分からないわね。何を取っ掛かりにしていいいかも、いまいちゃふやだし」

確かに、と霊夢の言葉に魔理沙が頷く。

「出られないってのは密室関係と同じだが、だからといって同じ考えが出来るって感じでも無いしなあ。まあ、幾つか復唱要求や青き真実を重ねていけば多少は分かるんじゃないや

ないか?」

「それがこのゲーム、か。じゃあ、そろそろ青でも考えましようか」

ふむ、と少しばかり考え込むような素振りを見せた後、霊夢はピツと人差し指を紫に向けながら言う。

『『洞窟がかなり複雑で、小町は出るに出不れなかった』というのはどう?』

「小町は洞窟内を完璧に記した地図を所持している」わ。これも装備の内と思ってくださいな」

『『その地図が汚れていたりして読めなかった』という可能性があるわ』

「【地図に汚れや損傷の類は無い】」

「……地図は大丈夫と。じゃあ、そうね、さっき言った光源。『光源が途中で切れた』というの?」

「【ゲーム中、光源は十分に機能していた】し、【光源は洞窟内を視認可能にするだけの十分な光量がある】わ」

「んー、明るさも問題さなそうか?」

「たぶん、だけれど」

「まあ方向は間違っていない気もするし、このまま行ってみるか。どうして小町は迷っているのか、あるいは動かなかったのか、をとりあえずの疑問として考えることにしよ

う」

「そうね……『小町は健康体だったが、お腹が空いて動けなかった』というのは？ 本人が動けないだけで、移動が制限されているわけではないとか」

「良い屁理屈だけれど、『ゲーム中、空腹により小町が動けなかった』ということは無い」
わ」

「無理か……」

と、考え込み始めた霊夢の肩を叩き、今度は魔理沙が口を開く。

「じゃあ、次は私の番だな。『小町の脱出を邪魔する奴が居た』ってのはどうだ？」

「そうねえ……『このゲームにおいて、小町以外の生命体は登場しない』としておきましよう」

「一気に切られた、か。うーん……なら、『洞窟内に罠があつて、小町は解除が出来なかった』」

「【小町は移動を制限されていない】けれど？」

「それだと微妙かなって思うんだぜ」

「じゃあ、『洞窟内に罠の類は無い』としましよるか」

「……今回、結構簡単に赤を切っていないか？」

「割と面倒くさいだろう答えなのよ、今回。だからやや甘く答えているの」

「面倒くさいだろう、か。そりやまた、大変だ……」

さて、と魔理沙もまた考え込み始める。二人の探偵が推理を積み重ねているこの一時間の間に、紫は出されていたお茶を一啜りする。もう少しもしたら水分補給の暇もなくなるだろうからという、これまでの経験からの魔女の休憩であった。

今回出た赤字纏め

【ゲーム開始時から終了時まで、小町は洞窟の中に居る】

【小町は洞窟から出るのに十分な装備を所持している】

【小町には洞窟を出る意思がある】

【ゲームは小町が洞窟を出るのに十分な時間行われた】

【小町は健康体である】

- 【小町は光源を所持している】
- 【小町は移動を制限されていない】
- 【洞窟内は小町が移動するのに十分な広さがある】
- 【ゲーム終了時、小町は生存している】
- 【小町は洞窟内を完璧に記した地図を所持している】
- 【地図に汚れや損傷の類は無い】
- 【ゲーム中、光源は十分に機能していた】
- 【光源は洞窟内を視認可能にするだけの十分な光量がある】
- 【ゲーム中、空腹により小町が動けなかったという事は無い】
- 【このゲームにおいて、小町以外の生命体は登場しない】
- 【洞窟内に罠の類は無い】

以上

第十六盤、解答編

当ゲームにおける基本ルール

1. □で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
2. 『』で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。ただし、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
3. 魔女は提示された青字に対して、赤字を使って反論する義務を持つ。青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、探偵の勝利となる。なお、赤字での反論が有効かどうか、探偵はよく検証する必要がある。
4. 人間側は「」で囲われた文章を提示することで、魔女に対しその文章を復唱することを要求できる。ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。

5. 探偵は、復唱要求や青き真実を使うまでもない疑問、質問を魔女に問うてもよい。ただし、魔女側はそれに答える義務を負わない。

以上

そろそろか。そう紫が思ったと同時に、霊夢が頷きの後に口を開く。

「いくつか青を出すわ。『洞窟内にアスレチックのようなものがあり、小町はそれを突破できなかった』『小町は出口まではたどり着いたものの、出口が何らかの要因で塞がっていた為に脱出できなかった』『小町は実は子供ないしは幼児であり、成人ならば脱出できない』『地図は特殊インクのようなもので描かれており、特定条件

化でないと解説が出来なかった」と、こんなところでどう？」

「二氣に来たわね。でも残念、『洞窟内にアスレチックのようなものはない』し、『小町の身体的理由から脱出できなかつたわけではない』これで子供云々も切れるわね。そして『ゲーム中、洞窟の出口は常に開放されていた』【地図は一般的なインク等で描かれており、あぶり出しや夜光塗料などは関係がない】」

「じゃあ出口じゃなくて、『通路に障害物があつた』」

「【洞窟内の通路は常に通り抜けられる状態にあつた】わ」

「『そもそも小町は他の通路から切り離された場所にいた』という可能性は？」

「【小町の居る地点から出口までのルートは常に存在していた】わ」

「なら、『洞窟が桁外れに広く、小町はゲーム時間内に脱出できなかつた』あるいは『ゲーム時間が極めて短かつた』というのとは？」

「ふむ……纏めて斬りましょうか。【ゲームは小町が脱出するだけの十分な時間行われた】加えて、【小町は常に脱出の可能性を有していた】わ」

「それはつまり、その気になれば小町は脱出できたと？」

「そうね。ああ、言っておくけれど、【小町には脱出する意思が常に在つた】わ。別に小町のやる気がなくて出られなかつたわけじゃないということね」

「となると装備の不足……いや、でもそれは十分な装備があると赤で提示されているし

……」

ふむ、と霊夢は顎に手を当てながら考え込み始める。代わり、今度は魔理沙が口を開く。

「じゃあ、今度は私が。ちょっと地図関連で攻めてみるぜ。『実は小町は地図を地図だと認識しておらず、洞窟から出るのに用いることができなかつた』とか『小町は地図上において、自分が今何処にいるかを認識できなかつた』あるいは『光源が暗かつたので地図が見られなかつた』というのはどうだ？ ……まあ、三つ目に關しては洞窟内を照らせるのに地図は見られないってのはどういうことだつてなりそうだが」

「そうね。『小町は地図を地図として認識していた』し、『誰であろうとも、地図を適切に用いれば現在位置の把握は可能』な上に、『光源は地図を見るに十分なものであつた』から、最後の言葉だけは間違つていないわ」

「おうおう、言つてくれるぜ」

嫌味つたらしく言われた最後の文に肩をすくめた後、魔理沙は思い出したように手を叩く。

「あ、そういうや確認していなかつたが、洞窟つて普通の洞窟だよな？ 洞窟つて名前の建物とかじゃなくて」

「ええ、『洞窟』とはその言葉が示す通りの場所であり、洞窟という名の異なる施設、場所

ではない」わ。世間一般における洞窟、まあ穴が掘られていて曲がりくねっていて、とああいうので間違いないと思って頂戴」

「合っていたようで良かったよ。じゃあ改めて、こういうのはどうだ？ 『地図は複数存在しており、小町はどれが正しいものかを当てられなかった』あるいは『実は洞窟は二箇所あり、地図の洞窟と小町が居る洞窟は別のものである』とか」

「【地図は正しいものが一つだけある】し、【このゲームにおいて、洞窟と呼ばれる場所は一つしか存在しない】と切りましょう」

「駄目か。んー、じゃあ『地図はとても高い所に設置されていて、小町は見る事が出来なかった』とか、『地図の縮尺が出鱈目で読み取れなかった』ってのは？ あ、『そもそも小町には地図を読む能力がなかった』とか！」

「【小町は地図を見ることが出来ることも出来た】し、【地図の縮尺は読み解くのに適切なもの】だったわ。加えて、【小町は地図を読む能力を有している】上に、【地図は小町に解読可能な言語、描写で成されている】ものよ」

「まだまだ！ 『地図には出口が書かれていなかった』とか、『地図を動かす事が出来なかったからルートが分からなかった』という可能性が——」

「【地図には出口も含めた洞窟内の全通路が記されている】し、【小町は使用可能な状態のカメラないし携帯電話の類を有していた】わ。勿論、【小町は先にあげた道具を使用でき

る知識がある」

「……………うえーい……………どれも違うのかよー……………」

途中からぐったりとした様子になりながら、魔理沙は大きく肩を落とす。そんな彼女に対し、呆れたように霊夢が言った。

「こんな所でへこたれていちや謎なんて解けないでしょ？　というか、なんでそんなに地図に拘るのよ」

「私の魔女としての勘が、地図が一番怪しいって言うからだよ。甘く答えるって宣言があるのに、地図に問題はないみたいなの斬り方をしないのも変だし」

「そこは分かるけれど……………いや、言われてみればそうか」

「どうかしたのか？」

「このゲームにおいて、小町は常に脱出の可能性を有していたのよね？　だったら、例えば道が塞がっていたとか、そういうのじゃないと考えるのが自然だわ。である以上、小町が地図を読み取れなかったとか、そういう類の答えになる可能性があると思うのよ」

そう霊夢が言うと、魔理沙もだらけていた顔を真剣なものに戻した。彼女は霊夢の言葉に納得したように頷くと、気合を入れるかのように居住まいを直す。

「そういうことなら、もうちよつと頑張ってみるしかないじゃないか。そうだ、『洞窟内に謎を解かないと通れない場所があった』てのは？」

「そうねえ……【洞窟の通路はどの時間においても塞がれていない】わ。そもそも、通り抜けられるときつき言つたじゃないの」

「あ、そっか」

「焦つても意味がありませんわよ」

「分かつているつての。じゃあもう、あれだ。『地図がバラバラになつて読めなくなつた』とかだろ」

「……【地図に損傷はない】と言つたはずよ？ だから焦つても——」

「それはむしろそつちじゃないの、紫？」

静かな声と共に、霊夢が切り裂くような鋭い視線を紫に向ける。

「今、確かに言いよんだわよね？ 今の魔理沙の青に、根本に繋がる真実があつたんじゃないの？」

「あら、言いますわね。だつたら、どんな真実が紛れ込んでいるというのかしら？」

「それは……魔理沙、パス」

「えっ」

「ここでか、と正気を疑うような目を魔理沙が霊夢に向ける。それに対し、霊夢はまるで悪びれた素振りもなく肩をすくめて言う。

「だつて何が引つかかったのか思いつかないんだもの。そもそもが貴女の出した青であ

る以上、貴女が追求するのが自然というものよ」

「無茶苦茶言うなあ。んー……」

と、魔理沙が腕を組み、周囲を見渡すようにしながら考え込む。うろろろと視線を彷徨わせた後、ふと魔理沙の視線が一所に落ち着いた。そこにあるのは、以前に自分が暇つぶしに持ち込んだ、風景を描いたジグソーパズルだ

「——あ、あれじゃないか？」

「あれ？」

「そう、『実は地図はジグソーパズルに描かれていて、小町はそれを解くことが出来なかった』んだよ。ピースが多ければ解けない可能性はあるだろうし、逆に可能性はあるから脱出の可能性が常にあったってことになる。パズルがバラバラなのは仕様なんだから、欠損もクソもないだろ」

「なるほど……」

どうだ、と期待に満ちた視線を魔理沙と霊夢が向ける。それを数秒ほど受け止めていた紫であったが、ふっと小さく笑った後、お手上げと言うように両の手を掲げる。

「お見事。ここにリザインを宣言するわ。真相もおおよそ魔理沙の言うとおりで間違いないわ」

「——よっしやー！」

力強く、魔理沙がガッツポーズを取る。そんな彼女にパチパチと軽く拍手を送った後、霊夢は紫に対して口を開く。

「そういうことだったのね。地図の使用が前提の洞窟で、その地図がそもそも完成されていなかったと。よっぽどピースの多いパズルだったんでしょうね」

「ええ。私や勘の良い貴女ならともかく、一般の頭脳しかない人間であれば限界も近いでしょう。端は出来たが真ん中はぼっかり、という風になるのが目に見えているわ」

「ああ、私もピースが多いのやるとそんな感じになるなあ。そうなると途中で飽きて投げ出すんだが、流石に命のかかった状況なら頑張る……かな？」

「その前に、魔法で洞窟を破壊しようとするんじゃない？」

「同感」

「お前らなあ……」

せつかく正解を導いたのにと、からかう二人に対しジト目を向ける魔理沙であった。

第十七盤、出題編

当ゲームにおける基本ルール

1. 〔〕で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
2. 『』で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。ただし、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
3. 魔女は提示された青字に対して、赤字を使って反論する義務を持つ。青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、探偵の勝利となる。なお、赤字での反論が有効かどうか、探偵はよく検証する必要がある。
4. 人間側は「」で囲われた文章を提示することで、魔女に対しその文章を復唱することを要求できる。ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。

5. 探偵は、復唱要求や青き真実を使うまでもない疑問、質問を魔女に問うてもよい。ただし、魔女側はそれに答える義務を負わない。

以上

「……ふむ、ちよつとやってみましようか」

命蓮寺の縁側、昼下がりの陽気が心地よいその場所で、ふと聖白蓮はそのようなことを呟いた。これを聞きとがめたのは、彼女と一緒に食後のお茶を楽しんでいた寅丸星であつた。

「やってみようとは、何のことですか？」

「これです。屁理屈推理合戦、と呼ぶようですが」

そう言つて聖が差し出したのは、射命丸文なる天狗から受け取つた、『文々。新聞』なる紙束であつた。試供品に、と一方的に置いて行かれたものだったが、一度は目を通すのが礼儀であると、聖によつて読み進められていたものである。

そのうちの一か所を、聖が指し示す。受け取り、軽く一読すれば、屁理屈推理合戦なる推理ゲームの類について書かれているのが分かつた。どうやら、幻想郷の一部で流れている遊びらしい。基本ルールや実際に行われた例などもあり、きちんと読み込めばすぐにもやつてみることも出来なくはないだろう。

「しかし、何故これをも？ 屁理屈で話をすり替える、というのは聖にとつてはあまり好ましくないものだと思つていましたか」

「それはそうなのですが、屁理屈というのはつまり、解釈の幅を広げるといふ風にも考えられることです。仏教に限らず、様々なことは受け手の解釈を必要とすることが多い。その力を鍛えるという意味で、これもまた役立つのではないかと」

「はあ、なるほど」

そうだろうか、と思つた星だったが、まあいいかとすぐさまにその疑問を投げ捨てる。合っているようで合っていない気もするが、聖がこういうことに乗り気というのも珍しいので、たまにはいいだろうと考え直したのである。

「しかし、そうなる人が必要ですね。どうしますか？」

「提案した私が魔女をやるのは当然として、そうですね、探偵も二名は欲しいですね」
「では、一人は私がやりましょう。後は適当に、手の空いている者でも探してきましょうか」

「お願いしますね。その間に、私は問題を考えますので」

聖に見送られ、星は命蓮寺内を適当にうろつき始める。誰を誘うか、と悩んでいた星であったが、十分と経たずにそれは解決した。廊下の一角で暇そうにしている村紗水蜜の姿を発見したからだ。

事情を話したところ、村紗はあっさりと探偵役になることを快諾してくれた。元々、屁理屈推理合戦に興味があつたらしい。なんでも、前に人里で呑んでいた時に、近くの若者が酒の肴としてやっていったのを小耳に挟んで以来、一度はやってみたいと思つていたそうだ。きつかけはともかく、関心があるのは都合がいい。

「聖、連れてきましたよ」

「おや、早かつたですね」

「屁理屈推理合戦をやると聞いたので、急いで来たんだ」

「ふふ、愉しみにしていただけたようですねによりです」

村紗を引き連れ、星は聖の元に戻る。あれから三十分弱しか経っていないが、聖の表情を見るに、どうやら問題は完成しているらしい。一先ずの前置きなどを挟みつつ、聖

を挟むようにして星たちは縁側に座る。

「では、始めましょうか」

どことなく楽しそうに、聖はパンと手を合わせる。

「まずは幻想。魔女が繰る魔法でもって、探偵たちを惑わすとしましょう——」
ノリノリだ、とつられて微笑む星の前で、朗々と聖は幻想を語り始めた。

もういいかい。私の声が周囲に響く。それを物陰で聞くのは、顔を曇らせた一輪。周囲を見渡す一輪に、ふと声がかけられた。

「どうしたんだぜ？」

少女の声に振り向けば、そこにいたのは黒き魔女。にやにや笑う魔女に対し、一輪は慌てながら答える。

「かくれんぼをしているんだけど、隠れる場所が見つからないんだ。このままだと姐さ

んに見つかつてしまう」

「ほう、ほう。そりや確かに、ちよいと困つたことになるな。ふむ、なるほど。だつたら手を貸してやるぜ」

首を傾げた一輪が、すぐにその顔を青ざめさせる。彼女を探す私の気配が、彼女の近くにまで来ていたからです。

「時間がないなあ。どうする？ 私の力を借りるか否か。私はどつちでもいいぜ」

「……お願い」

「ははっ、承知した！」

口角を上げ、愉快そうに笑いながら、魔女が一度指を鳴らす。同時、一輪の視界の端にこちらへ迫る私の姿が映る。身を強張らせた一輪だったが、しかし、そのすぐ隣を私は歩き去る。えっ、と振り向く一輪でしたが、私はやはり気づく素振りもなく、一輪の名を呼びながら遠くへ歩いていく。

「どうだ、私の魔法は？ 良かったな、鬼は何処かに行くようだぜ」

「凄い……まるで私の姿が見えなくなつたよう」

「そうだな。そう、見えなくしたのさ」

「魔法つてすごいのね。それで、この魔法つていつまでかかっているの？」

興奮しながら一輪が問いかける。それを聞いて、にやり、と魔女の口が大きくゆがむ。

「一生き」

「え？」

「お前はもう、誰にも観測されない。ずっと、ずっと、永遠に一人ぼっちになるのさ。くはははははっ！」

高笑いを残し、魔女の姿が忽然と消え去る。呆然と佇んでいた一輪の隣を、再び私が通り過ぎる。

「姐さん！」

一輪が叫ぶ。しかし、その声は私には届きません。すぐる一輪を無視して、私は周囲に呼びかけます。

一輪、何処に隠れたのですか、と——

「——以上です」

語り終えた聖が、ふうと息を一つ吐く。湯呑を傾け、喉を潤している彼女に、しかし、

と星は声をかける。

「やや、奇妙な幻想でしたね。視点が妙で、聖の視点と客観的な視点が混じっていましたか」

「そうですね。あえて、そういう風になりました。その理由は、このゲームが過去に私が体験した話を基にしているからです」

「体験？ ということは、これは一般的な現象から大きく乖離しないってことなの？」

「はい、「このゲームでの現象は、現実世界においても起こりえる」ということになりませんね」

「そういう赤から始めるゲームとは、やはり珍しい。おおよその謎は把握したつもりですが、謎を成すための赤を提示してもらえますか？」

星が問いかけると、聖は大きく頷く。

「はい、まず前提として【このゲームにおいて、私とは聖白蓮のことを指す】ということになります。これは私の視点でゲームを見る、という体で話を考えたからです」

「面白いね。普通であれば魔女になるはずの聖が、魔法の影響を受けた人物になるのか」

「それは何か不都合が出るのですか？」

「出ないんじゃない？ そりゃ、厳密に言えば変なんだろうけど、別にロジックエラーが起きるってわけでもないんだし」

ふうむ、と村紗の説明を聞いた星はなんとなく腕を組む。こういう意見が出る時点で、このゲームに対する星と村紗の知識の差は大きい。この差が果たして、後々の推理の差になるのだろうか。どうせなら先に正解を当てたい、などと思いつつ、話を再開させるために、聖に視線で続きを促す。

「続けますね。今回のゲームをまとめると、このような謎になります。【ゲーム中、私は一度以上一輪を視界に収めました】しかし、【私は一輪に対し、声をかけなかった】のです。【声をかけるのをためらわれる作業をしていたわけではない】ですし、【一輪から私にそういう指示があったわけでもない】です。【一輪を認識した場合、私は必ず声をかける】はずであったのに、何故私は一輪に声をかけなかったのか。それは『私が魔女に騙され、一輪を認識できなくなっていた』からにほかなりません」

さて、と聖はこちらを改めて見やる。

「探偵の皆様、どうかこの謎を解き、一輪にかけられた魔法を取り除いてください。それが、私の願いです」

魔女らしからぬ言葉で締めて、聖は一度口を閉ざす。

「では、考えてみましょうか」

「一輪には悪いけれど、この謎は私たちだけで楽しむとしよう」

一応、修行という名目なのですが。そんな言葉はあえて飲み込み、星もまた楽しむた

めに、推理を始めるのであった。

今回出た赤字纏め

【このゲームにおいて、私とは聖白蓮のことを指す】

【ゲーム中、私は一度以上一輪を視界に収めました】

【私は一輪に対し、声をかけなかった】

【声をかけるのをためらわれる作業をしていたわけではない】

【一輪から私にそういう指示があったわけでもない】

【一輪を認識した場合、私は必ず声をかける】

以上

第十七盤、解答編

当ゲームにおける基本ルール

1. 〔〕で囲われたものを赤き真実とする。赤字の内容は絶対の真実である。
2. 『』で囲われたものを青き真実とする。探偵が己の推理を提示する際に用いる。ただし、探偵の提示する青は魔法を否定する内容でなければならぬ。
3. 魔女は提示された青字に対して、赤字を使って反論する義務を持つ。青字を否定できない場合魔女側はリザインを宣言し、探偵の勝利となる。なお、赤字での反論が有効かどうか、探偵はよく検証する必要がある。
4. 人間側は「」で囲われた文章を提示することで、魔女に対しその文章を復唱することを要求できる。ただし、魔女側はそれを行う義務を負わない。

5. 探偵は、復唱要求や青き真実を使うまでもない疑問、質問を魔女に問うてもよい。ただし、魔女側はそれに答える義務を負わない。

以上

「さて、最初はまずどのよう動いていくべきだと思いますか？」

「まずは前提の確認とかか、別にいいと思うなら青や復唱要求で可能性を潰していこう。最短でのクリアを目指しているんじゃない限り、基本的には数撃ちや当たるの精神でいいんじゃないかな」

「なるほど」

例えば、と村紗は少し考えた後に口を開く。

「青をちよつと出してみようか。『聖は喉に怪我をしており、声を出すことが出来なかった』とか」

「私は声を出せないような怪我や障害を負っていない」とします」

「じゃあ、『水中で声が出せなかった』というのはいかがかな」

「私と一輪がいたのは水中ではありません」ついでに「私と一輪がいたのは真空中ではない」というのも提示しておきましょう」

「ふむ、なるほど」

「これで声を出せなかった可能性は消えた、ということになるんですね？」

「今のところは、たぶんね。まあ今は思いついていないだけで、実際は違いかもしれないけれど」

「こういう流れか、と星が数度頷く。

「では、今度は私が、『距離が遠かったので、声が届かなかった』というのはどうでしょうか」

「【意識的に発声した時点で、声をかけたと定義する】とします。いえ、「距離に関係なく、聖は一輪に声をかけられる状態にあった」ともしておきましょうか」

「駄目ですか」

「それ、テレビとか電話の画面越しで見たってパターンもないってことでいいの？」

「はい、そうでないと声をかけられませんからね。付け加えるならば【私は確かに肉眼で直接一輪を視界に収めた】となるのでしょうか」

「そうなるよ、声をかけられなかった可能性も消えましたかね?」

「いや、『どちらかが乗り物に乗っており、声をかける前にその場を去ってしまった』というパターンがある。出たばかりの赤に抵触する可能性もあるけれど……」

「そうですね。微妙ですが、新しい赤で切りましょう。【私も一輪も、声をかける暇がないほどに高速で移動していません】とします」

「じゃあ……そうだ、『声をかける前にゲームが終わった』というのはどうだろう。ゲーム終了時とかの赤はまだなかったはずだし」

「今回のゲームではあまり関係ないと思っていましたからね。【ゲーム中、私は二度以上一輪を視界に収めた】としましょう。不足ならば【私が一輪を視界に収めてからゲームが終了するまで、十分な時間があつた】とも提示しておきましょうか」

「やっぱり駄目か、と村紗と聖は同時に唸る。そのまま数秒ほど思索し、改めて村紗は口を開く。

「ちよつと声が出せなかつたパターンを思いついたから二つほど。『二人がいたのは発声が禁止されていた場所だった』あるいは『聖が声をかけるのにためらうような作業を一輪は行っていた』というのはどうかな」

「手術室か何処かにいた、みたいなシチュエーションですね」

「うーん、別にそういう場所ではないんですけどね。【私たちがいたのは発声を禁止され

た場所ではない」ですし、「一輪は特に声をかけるのをためらうような作業をしていない」です」

「ううん、やっぱりこっち方面はないのかな」

「どうも、声をかける動作を妨げるのは難しいようですね」

そうなるのと、と村紗は自身の顎を軽くなでる。

「一輪を認識させない方向で考えるのがいいのかな。えーつと、『一輪は変装していた』で」

「【一輪は変装していない】です」

「では、『一輪は顔に大きな傷を負っていた』というのはどうでしょう。いや、『一輪は整形をしていた』の方がいいですかね？」

「【一輪は怪我をしていないし、顔に何らかの傷跡もない】【一輪は整形していない】で切りましょう」

「いつそ復唱要求しようか、「一輪の顔は聖が覚えているそれと同じ」」

「【一輪の顔は私が覚えているものと同じ】としましょう。文章的には【私は一輪の現在の顔を完全に記憶している】の方が正しいかもしれませんが」

「あつさり切るのか」

「まあ、別に意地悪をしたいわけでもないのです」

魔女としてはやや怪しい発言だが、聖ならばその方が自然か。彼女の返答にそう納得しつつ、村紗は更に可能性を探りに行く。

「じゃあ、一輪の服装が原因だったのはどうかな。例えば『一輪は着ぐるみを着ていた』とか」

「『一輪の恰好は通常衣服としておかしくないもの』でした」

「ふむ、中々ピンときませんね。視界に収めている以上、声をかけるのを妨害するよりもそもそも視界に収めたうえで認識させない方が早いとは思うのですが」

「同感。だから、今の方向性で行ってみたいところだけれど……」

「なんだろうか、と村紗は提示すべき青について思考を巡らせる。

「視界に収めたうえで認識させないってどうやればいいんだろう。姿を見せないってのはどうにも出来なさそうなんだけど」

「言い換えれば、どうやって誤解させるかということになりますか。どうすれば一輪を一輪以外と誤解させられるか。試しに、『何らかの手段で一輪は聖を誤解させた』あるいは『何らかの理由で聖は一輪を、一輪以外の人物であると誤解した』と提示した場合どうなりますか?」

「あ、星、それはちよつとまずいかも」

「え?」

怪訝そうな星と共に、村紗は聖の顔を見る。すると、彼女は非常に困った表情を浮かべ、うーんと悩みの声を漏らしていた。

「あれ？ 案外クリーンヒットですか？」

「いや、私のにわか知識も混じるけれど、屁理屈で「何らかの手段」とか「何らかの方法」って形で青を出されると、魔女も赤で切れなくなるんだよ」

「ええ、実際困っています。ちよつと返答の赤が思いつきません」

「それは……申し訳ありません、聖」

「いえ、返答できない以上、魔女の敗北に変わりありませんから。今回はきつちりかつちりした謎でもないですし、そもそもそれが今回の謎の根幹ですらかね」

「どういうことですか？」

「今回のゲームで、「私は一輪を視認したが、とある理由から彼女を別人だと誤解したため、声をかけなかった」ということですよ。改めて考えてみると、そういう風に青を出されたら一発で終わりの欠陥でしたね」

「いや、そこはまあどこにでもそういうのはあるし」

「そもそも即興でしたしね、まあ青を出した私が言う台詞でもないですが。ちなみに誤解した原因は何だったと思います？」

「そうだなあ……厚化粧、とか？ これは変装に入らない気がする」

「何かしらの、らしくないことをしていた、とかでしょうか」

「ああ、近いですね。ヒントは仏門に帰依したものは避けた方がいいものです」

「んー、なんだろう……」

思わず、村紗の言葉が止まった。ゆつくりと視界を動かせば、同じく固まっている星と、不自然なほどにニコニコしている聖の姿が見受けられる。

これは自分が答ええないといけなのだろうか。謎の緊張感を覚えながら、村紗は恐る恐る口を開く。

「あの……えーつと………飲酒、だったりする?」

「ええ、正解です! 本来ならあり得ない光景ですし、場所が人里の食事処だったためか服装も常と違う。その結果としてあれは一輪では『ありえない』と誤認したという『設定』ですね」

「な、なるほど。そうだったのですね……」

重苦しい沈黙が、一瞬その場を支配する。一瞬であったのは、ちょうど玄関の方から、一輪が帰宅を知らせる声が聞こえたからだ。それを聞いた村紗と星が固まる中、聖がゆつくりと立ち上がる。

「どうやら、一輪は帰ってきたようですね。私は少し彼女に話があるので、席を外します」

微笑を称えながらそう言い残し、聖は玄関の方へと歩いていく。彼女の背を思わず見送り、その姿が完全に見えなくなつたところで、ふと星が口を開く。

「……………どうしようか、村紗」

「どうって……………祈るしかないんじゃないかな」

主に、一輪の無事を。そんなことを考えながら、村紗は玄関の方に合掌した。